

平成 19～22年度

挂之上遺跡

—本文編—

2015

袋井市教育委員会
袋井市役所建設部都市計画課

平成19～22年度

掛之上遺跡

—本文編—

2015

袋井市教育委員会
袋井市役所建設部都市計画課

例　　言

1. 本書は、平成19～22年度に袋井市教育委員会と袋井市役所都市建設部区画整理課（当時）が実施した、^{かけのうえ}掛之上遺跡の第57～94次発掘調査報告書本文編である。
2. 本発掘調査は袋井市教育委員会松井一明を発掘調査の担当者として実施した。
3. 本調査に係る事務については、袋井市役所都市建設部都市計画課区画整理係には円滑な調整をして頂いた。ここに記して感謝いたします。
4. 本書の編集・原稿執筆は袋井市教育委員会が行った。
5. 本調査で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。
6. 今回の本文編に関係した報告書は、写真図版編は平成19年度の報告書21～23、平成20年度の報告書24～26、平成21年度の報告書27・28、平成22年度の報告書29・30、遺構・遺物図版編は平成19・20年度の報告書35・36、平成21・22年度の報告書38・39があり、これらの報告書を参照されたい。



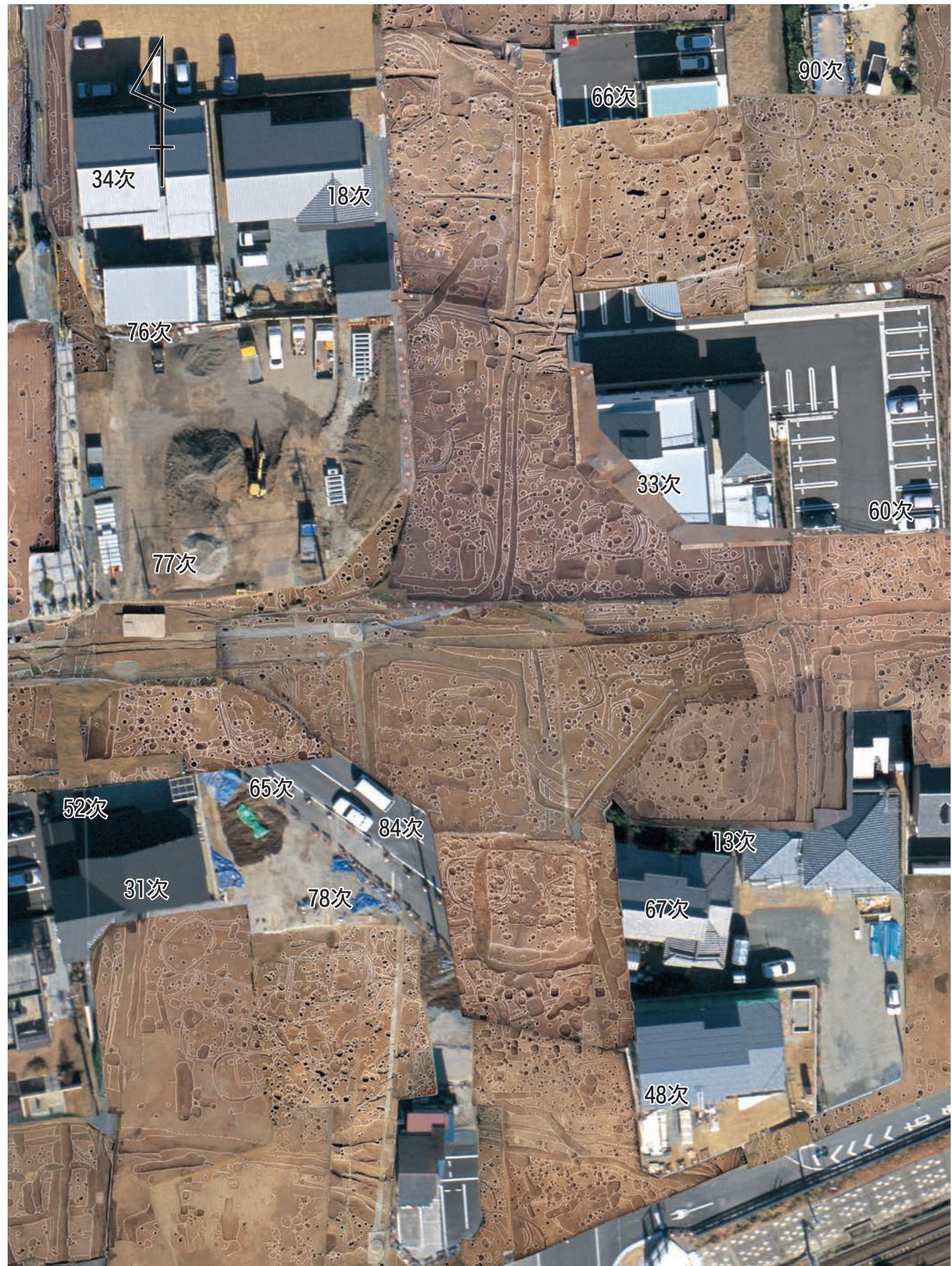
北西部の調査区合成写真（弥生時代中期の方形周溝墓群がほぼ全域存在している。弥生時代終末時期の方形の溝に囲まれた掘立柱建物、古墳時代初頭の方形区画が存在する。上が東方向となる。）



中央部分北端の調査区合成写真（平成23年度までに完了した中央部地区北端での遺構群である。弥生時代中期の方形周溝墓群や竪穴住居、豪族居館と見られる古墳時代後期の柵列や竪穴住居、戦国時代の武将の館と思われる区画溝や大型掘立柱建物が存在する。上が東方向となる。）



中央部分南端の調査区合成写真（弥生時代中～後期の竪穴住居と古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物が密集しており、両時期の居住の中心域と思われる。遺構の少ない部分は農協倉庫の基礎のため破壊されている。上が北方向となる。）



中央部分の調査区合成写真（弥生時代中～後期の竪穴住居と古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物が密集しており、両時期の居住の中心域と思われる。単独である古墳時代初頭の方形周溝墓と奈良時代の大型掘立柱建物も存在している。上が北方向となる。）



中央部分北端の調査区合成写真（弥生時代中期の方形周溝墓群、弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居のほか、戦国時代の武将の館と思われる大型掘立柱建物や土坑が存在する。奈良時代の遺構はない。上が北方向となる。）



東部分の調査区合成写真（平成23年度調査区分まで含んだ合成写真である。弥生時代中期の方形周溝墓群、弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物のほか、戦国時代の掘立柱建物や土坑が存在する。上が北方となる。）

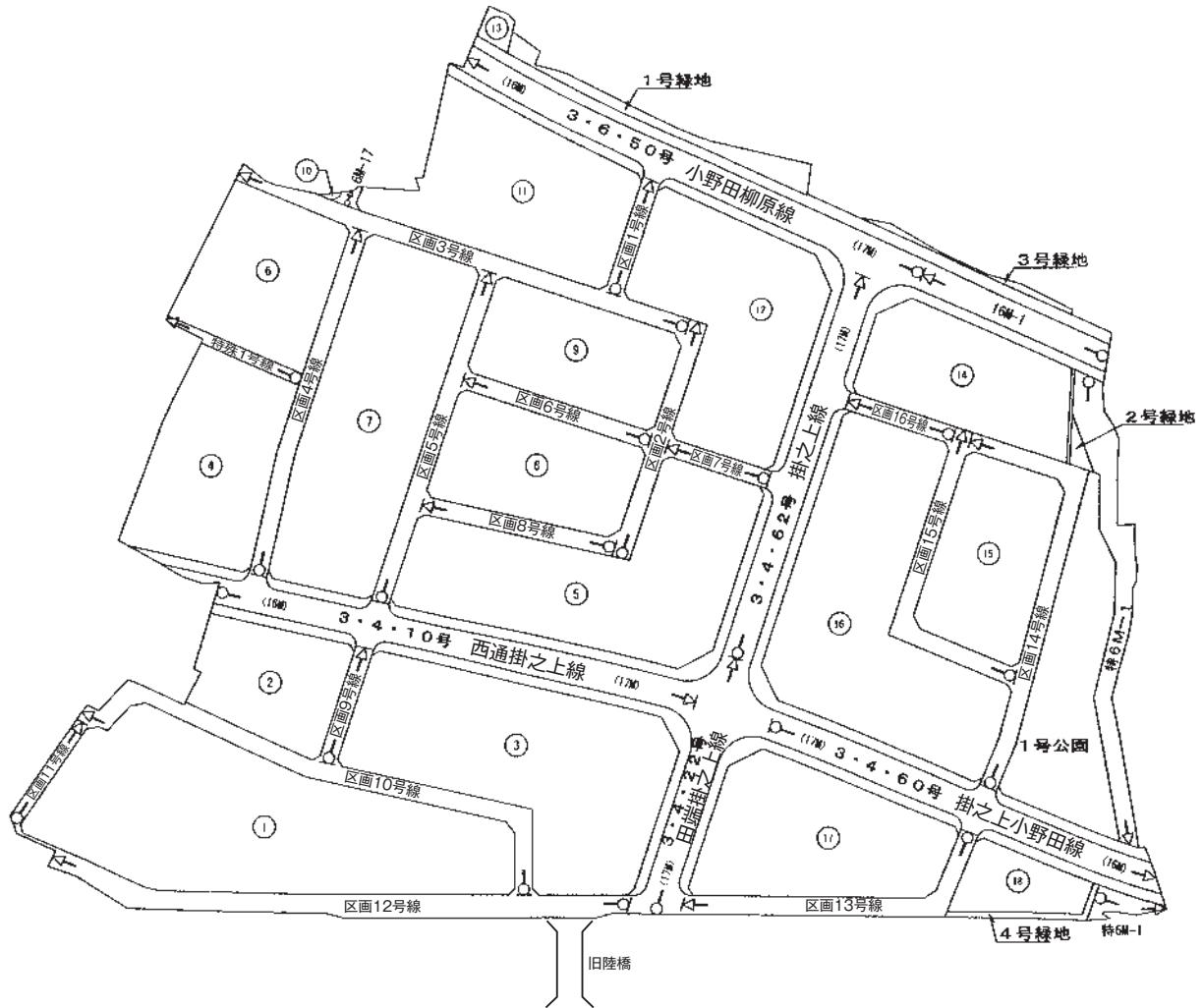


旧高尾跨線橋と弾痕跡（昭和7年東海道線上に架けられた陸橋で、平成20年10月現在の新陸橋に架け替えられた。昭和20年終戦間近の5月、陸橋の下に逃げ込んだ国鉄車両を東より狙ったアメリカ軍艦載機の機銃掃射による弾痕穴9箇所が、東側鉄板に残されていた戦争遺跡の遺構である。現在はその一部が橋のたもとに展示されている。）

目 次

- 卷頭カラー図版1 北西部分の調査区合成写真
- 卷頭カラー図版2 北西部分北端の調査区合成写真
- 卷頭カラー図版3 中央部分南端の調査区合成写真
- 卷頭カラー図版4 中央部分の調査区合成写真
- 卷頭カラー図版5 中央部分北端の調査区合成写真
- 卷頭カラー図版6 南東部分の調査区合成写真
- 卷頭カラー図版7 旧高尾跨線橋と弾痕跡

第1章	調査に至る経過	1
第2章	調査の経過	2
第3章	平成19～22年度の調査概要	5
1.	第57次調査区の概要	5
2.	第58・77次調査区の概要	6
3.	第59次調査区の概要	8
4.	第60次調査区の概要	9
5.	第61・72・74次調査区の概要	11
6.	第62次調査区の概要	14
7.	第63・75-1次調査区の概要	17
8.	第64・66次調査区の概要	20
9.	第65次調査区の概要	22
10.	第67・70次調査区の概要	23
11.	第68次調査区の概要	26
12.	第69次調査区の概要	29
13.	第71・78次調査区の概要	30
14.	第73次調査区の概要	33
15.	第75-2次調査区の概要	35
16.	第76次調査区の概要	37
17.	第79・80・85-2次調査区の概要	37
18.	第81・82-1次調査区の概要	40
19.	第82-2・87-1・2、91-1・2次調査区の概要	43
20.	第84-1～3次調査区の概要	47
21.	第85-1・90・94次調査区の概要	50
22.	第86-1・2次調査区の概要	54
23.	第83・88-1・2、92-1～3次調査区の概要	55
24.	第89・93次調査区の概要	58
第4章	平成19～22年度の総括	61



区画整理地内道路配置図

表紙写真 中央南端部分の調査区合成写真（弥生時代中期の方形周溝墓はないため、弥生時代中～後期の竪穴住居と古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物が密集しており、両時期の居住の中心域と思われる。弥生時代の区画溝はないため、拠点集落ではあるが環濠集落にはならない。また、単独ではあるが古墳時代初頭の方形周溝墓と、奈良時代の大型掘立柱建物も存在している。上が東方向となる。）

平成19～22年度 掛之上遺跡発掘調査報告書

第1章 調査に至る経過

袋井市高尾地内に所在する掛之上遺跡は、昭和49年に実施された第1次発掘調査を皮切りに、袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査が平成11年度より実施され、15年間をかけて平成25年度には現地調査が終了している。平成9年5月に区画整理事業予定地内の掛之上遺跡の範囲確認を目的とした試掘調査を実施したところ、予定地域内のはぼ全域に埋蔵文化財の所在が確認された。この試掘調査の結果から、平成11年5月6日付で袋井市長豊田舜次名（袋井市役所区画整理課扱）の文化庁長官宛に「埋蔵文化財発掘の通知について」（文化財保護法57条の3の規定）が提出された。これを受け、平成11年6月8日付の「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」（教文2-51号）の通知が、静岡県教育委員会教育長杉田豊名で袋井市長宛送付され、区画整理事業着手前の発掘調査が正式に指示された。

区画整理事業地内で発掘調査に至る原因は、都市計画道路・区画道路と宅地造成に伴うものである。都市計画道路は歩道がつく客員幅17mになる幹線道路（交付金対応）、区画道路は歩道のない客員幅6mの生活道路（補助金対応）に分かれる。幹線道路の歩道部分も含めて、道路工事で地下の埋蔵文化財が壊されることが明らかとなつたため、道路と歩道部分は全域が発掘調査の対象となった。宅地部分については、造成による土の入れ替えや、土壤改良等により地下遺構が破壊される場合のみ、平面調査の対象とした。掛之上遺跡での平面調査は、生活のための迂回路や工事用道路が必要となるため、年度内で一つの調査区を最大で3～4回に分割した平面調査を行ったり、隣接した2～3箇所の調査を同時に進める複雑な工程を毎年のように行った。発掘調査の対象とはならなかった宅地造成工事場所については立会調査として、保護層の確保に努め地下遺構の毀損を防ぐと共に、幅1m以内となる水道や下水道の埋設工事、小規模な排水溝の工事部分などについても立会調査を実施して、平面調査の対象からは除外したが、立会調査についても毎年20件以上にのぼった。

第二地区土地区画整理事業に伴う本調査は、平成11年度のJA遠州中央袋井南支店の移転に伴う第5次発掘調査（675m²）が最初である。平成12年度では第6・7次発掘調査の2件（1970m²）、平成13年度では第8～12次発掘調査の5件（1040m²）、平成14年度では第13～20次発掘調査の8件（2070m²）と、平成15年度では第21～26次発掘調査の6件（2378m²）、平成16年度では第27～37次発掘調査の11件（2745m²）、平成17年度では第39～48次発掘調査の10件（3558m²）、平成18年度では第49～56次発掘調査の8件（3902m²）を実施し、区画整理事業の進展に伴い面積、調査地点数共に増加してきた。

今回報告する平成19年度では第57～67次発掘調査の10件、平成20年度では第68～78次発掘調査の11件、平成21年度では第79～86次発掘調査の8件、平成22年度では第87～94次発掘調査の8件となっている。調査面積の内訳は平成19年度の宅地造成調査分では942m²、区画道路調査分では1519m²、都市計画道路調査分では2065m²の合計4526m²、平成20年度の宅地造成調査分では1482m²、区画道路調査分では1482m²、都市計画道路調査分では725m²の合計3689m²、平成21年度の宅地造成調査分では406.5m²（一部区画道路調査分含む）、都市計画道路調査分では2005m²の合計2411.5m²、平成22年度は宅地造成調査分のみで2375.5m²（一部区画道路調査分含む）となっている。ちなみに今回報告した平成19～22年度の合計調査面積は、宅地造成調査分で5206m²、区画道路調査分では3001m²、都市計画道路調査分では4795m²の総計13002m²となり、宅地造成部分の調査が多かったことが分かる。ちなみに、平成22年度までの区画整理における本調査総面積は31340m²となる。

第2章 調査の経過

平成19年度 掛之上遺跡の調査は補助金・交付金決定をまって、5月より宅地造成の調査区（第57次）から始めた。方形周溝墓や古墳時代後期の竪穴住居など比較的多くの遺構が見つかったが、5月末日に終了したので、引き続き西通掛之上線の第58次調査を開始した。第58次調査区は既存道路部分の調査で遺構数は少ないと予想されたが、弥生時代後期と古墳時代後期の掘立柱建物や近世の溝などが確認でき、6月内で調査は完了した。引き続き遺跡の北東部分である第59次調査を開始した。この調査区は民地の宅地造成の調査と、区画道路14号線の調査を合わせて実施したものであった。古墳時代後期と中世の柱穴が多数検出され、一部は掘立柱建物と認識された。遺構数の割に遺物量は少なかったため7月末日には調査を完了した。

7月下旬から引き続き小野田・掛之上線の第60次調査を開始した。8月は第60次調査を本格的に行い、天候にも恵まれたため、8月末日には調査を完了した。なお、この調査区では弥生～古墳時代後期の竪穴住居や柱穴群、中近世の区画溝など多数の遺構が検出され、居住の中心地域であることが確認できた。白鳳時代の瓦が出土したことが注目された。

9月からは民地の宅地造成の第61次調査を開始したところ、第59次調査区と同様に古墳時代後期と中世の掘立柱建物と柱穴群が多数、近世の区画溝が検出された。この調査区については面積が広かつたが、遺物の出土する遺構が少なかったため10月末日に完了した。

11月は第62次とした掛之上線の調査を開始した。道路幅西半分の調査区で、トレンチ調査のようではあったが、弥生～古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物、中世の掘立柱建物、北端には谷地形に多数の土器を出土する包含層が確認された。遺物量は多かったが調査範囲が狭かったので、11月末日には終了した。

12月は小野田柳原線の第63－2次調査を行った。この調査区では南側を平成18年度2月に排水溝を付設するため先行し第63－1次調査を行っており、本報告書で併せて報告する。弥生時代中期の方形周溝墓、後期の竪穴住居や柱穴群、中世の掘立柱建物など多数の遺構・遺物が出土した。天候に恵まれたため2月末日には調査を完了することができた。

平成20年1月になると、第64次とした掛之上線の調査を開始した。居住の中心地域であるため遺構・遺物は多かったが、調査面積が狭かったため1月中頃には完了した。引き続き西通掛之上線（第65次）の調査を開始したところ、こちらも居住域の中心地域であるため遺構・遺物は多かったが、調査面積が狭かったため1月末日には完了した。

2月になると当初予定していた田端掛之上線の第67次調査のほかに、民地の宅地造成に伴う第66次調査が入り、同時並行で調査を進めなければならない苦しい状況となった。第67次調査区では奈良時代の大型掘立柱建物や古墳時代初頭の方形周溝墓なども発見されたが、第67次調査は2月末日、第66次調査は3月中旬には調査を無事完了することができた。2月末より現場作業と並行して進めていた、平成19年度分の報告書（写真図版編）の作成を行い、3月末日に刊行した。

平成20年度 例年通り5月より区画道路3・4号線の調査と、民地の宅地造成を併せた第68次調査を開始した。この調査区はかつて調査した第2次調査区の南にあたる場所で、方形周溝墓や奈良時代の郡衙正倉域の区画溝など、重要遺構が発見される可能性があった。予想通り方形周溝墓や奈良時代の区画溝が発見された。なお、調査区西側の未調査の宅地西辺の擁壁敷設部分については、小規模工事となるため立会調査とした。第68次調査は雨天日も多かったが、遺構数が少ないこともあり、6月中

旬には終了した。引き続き遺跡の南東端にあたる民地の宅地造成と区画道路13号線を併せた第69次、近くの田端掛之上線道路の残り部分（第70次）を併せて調査し、さらに民地の宅地造成の第71次調査を開始し、第69次と第70次調査は7月末日に完了し、第71次調査も8月末日には完了した。

9月になると遺跡東端の区画道路14号線と民地の宅地造成を併せて第72次調査を開始した。この調査区も、隣接の第59次や第61次調査区と同様に、古墳時代後期と中世の掘立柱建物と柱穴群方数検出されたが、遺物の出土量は少なかったため、9月末日には調査を完了することができた。

10月になると遺跡北東地区の区画道路16号線の西半分の第73次調査を開始した。弥生時代中期の方形周溝墓が見つかり、完形品の土器なども出土したが調査区が狭かったせいか10月末日には完了した。

11月には区画道路15号線と併せて周辺の民地の宅地造成の第74次調査を行った。弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代中～後期の溝、近世の区画溝など多数見つかった。溝からの遺物出土量は多かったが、12月上旬に完了した。引き続き小野田柳原線に伴う谷を挟んだ2地点の第75次－1・2調査を開始した。弥生時代後期の竪穴住居や柱穴群多数と、古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物が発見され、同時期の居住の中心地域であることが判明した。1月上旬には調査を完了した。

1月は西通掛之上線の東端の第77次調査と、近くの区画道路2号線の南端の第76次調査を併行して調査を始めた。第77次調査区は既存の道路下あったが、奈良時代郡衙正倉域東辺の区画溝を発見するなどの成果があり、1月末日に完了した。

2月は民地の宅地造成の第78次調査を行った。隣接調査区と同様に、弥生時代後期の竪穴住居や柱穴群多数と、古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物が発見され、同時期の居住の中心地域であることが判明した。2月末日には調査を完了した。

3月は掛之上小野田線に係る小規模面積の第79－1次調査を行い、遺構数も少なかったため3月中旬には完了した。2月より現場作業と並行して進めていた、平成20年度分の報告書（写真図版編）の作成を行い3月末に刊行した。

平成21年度 例年通り5月より掛之上小野田線の第79－2次・80次調査を開始した。第80次調査区からは弥生時代中期の方形周溝墓より多量の土器、さらに郡衙関連の大型掘立柱建物が検出されたので埋め戻しに立ち会い保存した。6月中旬に調査は完了した。引き続き6月下旬より小野田柳原線の東端の第81－1・2次調査を2つの調査区に分けて開始した。いずれの調査区からも弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居や多数の柱穴群、古墳時代中期の方形周溝墓など多数の遺構が発見され、居住の中心地域であることが判明した。遺構数も多く、面積も広かったが8月上旬には完了することができた。

8月中旬より急遽区画道路12号線と民地の宅地造成を併せて第83次調査を行った。民地の宅地造成分は道路面に接した建物部分のみの土地改良であるため、全域調査をしなかつたが、未調査部分には確認のトレーナーを入れた。小面積の調査区であったが、郡衙正倉域II期の東辺区画溝と南東隅部分、土橋となる出入口部が発見され、郡衙正倉域を知るうえで重要な発見があった。8月末日に調査は完了した。

8月上旬より第83次調査と併行して、掛之上線の第82－1・2次調査も開始した。いずれの調査区からも弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居や柱穴群、戦国時代の大型土坑など多数の遺構が発見され、居住の中心地域であることが判明した。遺構数も多く、面積も広かったが10月中旬に調査は完了することができた。

引き続き10月中旬より本年度最大の調査区である田端掛之上線の交差点部分の第84次調査を開始した。迂回路の関係で、2つの調査区（第84－1・2次）に分けて調査を進めた。いずれの調査区から

も弥生時代中～後期の竪穴住居や柱穴群多数、中近世の区画溝など多数の遺構が発見され、周辺調査区と同様に居住の中心地域であることが判明した。遺構数と遺物量共に多く、面積も広かつたため1区は10月末日には完了したが、2区は迂回路建設のため1月より調査を開始することとした。なお、調査期間中に乗用車が調査区に落ち込む事故が起り、現道付近での調査の安全対策の再検討をした。調査作業中の事故ではなかったせいか、この事故による人的被害、遺構の損傷はなかった。

12月は遺跡東部の民地の宅地造成地である第85-1・2次調査を開始した。いずれの調査区も遺構の数は少なかったが、1区からは弥生時代中期の方形周溝墓、中世の掘立柱建物と柱穴群、2区からは弥生時代後期の溝から多量の土器、中世の区画溝から奈良時代初頭の瓦が出土した。途中で北側公園の電柱設置工事ほかの2箇所が本調査対象となることが急遽決定し、第86次-1・2調査として開始した。狭い調査区であったため、2月中旬に調査は完了した。

1月は予定どおり田端掛之上線の迂回路の設置が終了したので、第84-2次調査を開始した。遺構の残存状況は悪かったが、弥生時代中～後期、古墳時代後期の竪穴住居や土坑、江戸時代の区画溝などが見つかった。1月末日に調査は完了した。

3月に民地の擁壁工事を4月から行うことが決定したため、本調査の対象となった。3月より第87-1・2次調査を開始し、下旬には完了した。なお、1月より現地調査と並行して、平成21年度分の報告書（写真図版編）の作成を行い、3月末日には刊行することができた。

平成22年度 例年通り5月より区画道路12号線と民地の宅地造成に伴う第88次調査を開始した。調査区が狭かったため5月末日には完了した。隣接地の第83次調査で見つかった奈良時代の郡衙正倉域南辺の区画溝が、当調査区でも確認できた。

6月は北東部の民地の宅地造成に伴う第89次調査を行った。古墳時代後期の竪穴住居のほか、戦国時代と思われる大型の掘立柱建物が発見され、戦国時代の武士の館の中心域になると思われた。6月末日には完了し、引き続き東部の民地の宅地造成に伴う第90次調査を開始した。この調査区は土置場の関係で2地区に分けて調査したことと、調査区が広かつたため、8月末日までかかったが調査は完了した。弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居や土坑など多数が確認され、遺物も多量に出土した。なお7月は宅地の擁壁工事（第87次調査で実施済分）の設計変更があり、追加調査の必要が出てきたので、第91-1・2次調査を実施し、7月末日には完了した。

9月になると南部の民地の宅地造成分の第92次調査を開始した。この調査区も土置場や搬入路のため3地区に分けて調査を進めることとなった。1区は9月下旬より始め、10月上旬に完了し一端中断した。弥生時代中期の方形周溝墓や古墳時代後期の竪穴住居などが見つかった。

10月中旬は民地の宅地造成に伴う第93次調査を開始し、10月末日には完了することができた。この調査区でも戦国時代の大型掘立柱建物が確認され、武士の館の中心域になることが裏付けられた。

11月は中断していた搬入路となる区画道路12号線分の第92-2次調査を中旬より実施し、11月末日に完了した。

12月は東部の区画道路15号線と民地の宅地造成に伴う第94次調査を行い、12月末日には完了した。弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居・土坑や、方形周溝墓などが見つかり、比較的遺構・遺物の数は多く、同時代の居住の中心域であることが分かった。

1月より本年度最後の調査である第92-2次調査を開始した。この調査もさらに土置場の関係で2地区に分けて調査を進め、2月上旬には完了した。奈良時代の郡衙正倉南辺と東辺の区画溝が発見され、大きな成果がえられた。本年度も現地調査と並行して平成22年度分の報告書（写真図版編）の作成を1月より開始し、3月末日には無事刊行することができた。

第3章 平成19～22年度の調査概要

1. 第57次調査区の概要（報告書35第2図～第13図）

(1) はじめに

第57次調査区は平成19年度実施の民地の宅地造成分と、南西端が区画道路5号線分の調査区にあたる（2008報告書21写真図版編）。

遺物包含層は表土が薄くほとんど確認できなかつたが、北東部分で厚さ20cmの包含層が確認された。

(2) 遺構

主な遺構は弥生時代の方形周溝墓と土器棺、古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物である。

竪穴住居 古墳時代後期の竪穴住居4棟は、調査区全域から検出されている。SB3は4.6×4mを測る小型住居で、かまどや屋内炉はない。SB9はSB12と重複するが、新旧関係はSB12のほうが新しい。SB9は北壁にかまど、南壁に貯蔵穴をもつ一般的な竪穴住居である。SB12は北壁東寄りにかまどがあり、かまどの東脇に浅い貯蔵穴がある。貯蔵穴は南壁付近にあるものは深く、かまど脇にあるものは浅い傾向がある。南壁溝から見ると2時期ありそうである。SB11は一部調査区外となるが、壁溝とかまどの数から最低2時期の建て替えがあつたことが分かった。かまどは破壊されておらず、保存状況は良かったので、SB11a→b→cへと変遷したと思われる。時期はSB3より6世紀末葉、SB11は7世紀前葉、SB12からは6世紀中葉の須恵器や土師器が出土している。

掘立柱建物 SH14は柱穴の堀方が円形になり土間造りの2間×4間の長方形建物である。確実な時期を示す遺物は出土していないが、柱穴の形態と主軸方向が奈良時代の掘立柱建物と異なるため、古墳時代後期の掘立柱建物になると考えた。

方形周溝墓・土器棺 方形周溝墓は隣接地の第6・16次調査区でも確認された中期後葉の時期のSZ8・15、後期後葉のSZ3・4がある。前者については、何れも中期後葉の典型的な四隅に陸橋を持つ形態を示し、周溝出土の土器は白岩式新段階の時期を示す。後者のうちSZ4は北東隅が接続し、北溝の陸橋も中央にある中期の方形周溝墓とは異なる形態を示す。時期の分かる土器は本調査区では出土していないが、隣接調査区では後期後半新段階の土器が出土している。

SZ15の南溝には1.2×0.6m桶状の小型木棺になると思われる溝内埋葬遺構が認められた（第42次調査区）。北溝からは完形率の高い壺が横倒しになり、底からやや浮いた状態で出土している。SZ8には墳丘内中央に楕円形の主体部と、標識が立てられていたと思われる柱穴が確認されている（第6次調査）。SZ8と15の中間に土器棺（SK23）が存在する。土器棺は直立した大型壺を棺身とするが、底部付近しか残っていないので蓋があつたかは分からない。胴部中央に最大径をもつため、白岩式新段階の土器棺と考えたい。

その他の遺構 SK20からは弥生時代の土器片が出土しており、埋土の状況から見ても弥生時代の遺構であるため、SK18と組み合わせになる方形周溝墓の周溝かもしれない。

方形や長方形の土坑であるSK21・22・27・29・30などは遺物と埋土から見て、江戸時代後期の土坑になりそうである。同時期の遺物は南北方向の区画溝SD14～17からも一定量出土しているため、江戸時代後期の屋敷地があった可能性がある。とくにSD17からは多量のかわらけが出土しているため、一般の農家屋敷の区画溝とは思えない。

(3) 遺物

方形周溝墓から弥生時代中期の土器がまとめて出土している。中期の壺の内第10図29・36や第11

図41・44などの細頸壺は、白岩式新段階の特徴を示している。46の台付甕の台部は低いもので、中期後葉の台付甕になると見たい。48の土器棺については胴部中央に最大径があるため白岩式新段階と見られる。

古墳時代後期のS B11出土の第10図3～18のうち3、18は6世紀中葉の特徴を示している須恵器高环蓋と土師器長胴甕であるが、それ以外は7世紀前葉の須恵器・土師器が出土している。

第11図52～66に示したS K22～30出土の江戸時代の土器・陶磁器は、19世紀前葉の肥前茶碗、かわらけが出土している。S D17からまとまって出土した第12図93～第13図129の土器・陶磁器は、何れも江戸時代の18世紀後葉を主体に該当しており、土坑の遺物より古くなる傾向が看取される。

(4) まとめ

弥生時代中期の墓域の中心域であるとともに、後期後半新段階の方形周溝墓も確認された。中期の方形周溝墓のない場所の空閑地を利用して、後期の方形周溝墓が造墓されたと思われる。

古墳時代後期の堅穴住居と掘立柱建物が存在し、S B9・12は6世紀前～中葉、S B3・11は7世紀前葉と時期差があった。S H4の時期は分からぬが、S B12のかまどに近いので、位置関係から見ると7世紀前葉の建物になりそうである。

江戸時代の遺構のうちS D17から18世紀後葉の土器・陶磁器がまとまって出土し、とくにかわらけが多数出土した。第6・16次調査区でも同時期の大型土坑や区画溝が存在することから、例えは旗本である渡辺氏の高部陣屋に關係した遺構と考えられる。

2. 第58・77次調査区の概要（報告書35第14図～第23図）

(1) はじめに

第5・6・8次調査区より南に隣接する調査区である。どちらも都市計画道路西通掛之上線に伴う調査で、第58次調査が平成19年度（2008報告書23写真図版編）、第77次調査が平成20年度に実施されている（2009報告書26写真図版編）。道路内をさらに分割した調査のため、東西方向の狭い調査区となった。

遺物包含層は現道の下にあたるため、道路工事の際の削平があり、ほとんど確認できなかつたが、第77次調査区北端は一部道路敷から外れるため、厚さ20cmほどの包含層が確認できた。

(2) 遺構

主な遺構は弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期と古墳時代後期の堅穴住居、奈良時代の大型掘立柱建物と区画溝、近代屋敷地の区画溝であった。

堅穴住居 堅穴住居からはほとんど遺物が出ないため確実な時期は分からぬが、地床炉をもつS B8（第77次）・9・14、正方形プランにならないS B15は弥生時代後期、北壁にかまどをもつS B8は古墳時代後期の堅穴住居と思われる。S B9は小型の方形住居で、北壁に近い位置で礫を伴う地床炉が存在する。柱穴は2本しか確認できなかつた。S B14は住居のほぼ中央を検出したが、全体形は分からぬ。中央に地床炉が4箇所、壁溝では2本確認できるので最低2時期以上の建て替えがあつたと思われる。柱穴配置は分からぬ。S B15については搅乱が激しくて4本柱しか確認できないが、部分的に残った壁溝からは楕円形か隅丸方形の堅穴住居になると思われる。

S B8は北壁にかまどをもつ堅穴住居で、比較的小型の部類に入るものである。かまどは西半分が搅乱を受けているが、保存状況は良く故意の破壊はなかつたようである。かまど東側には浅い貯蔵穴があり、7世紀前葉に該当する小型の広口壺が残されていた。堅穴住居としては認識できなかつたが、P15から6世紀前葉の壺・高壺などの土師器を出土する小穴があり、古墳時代後期の堅穴住居の南壁

付近にある深い貯蔵穴に類似した遺構である。

掘立柱建物 第52次調査区で発見された土間造りの大型掘立柱建物である。第52次調査区では西側柱列しか発見できず東西間口は不明であったが、今回の調査区で間口寸法は異なるものの、2間であることが判明した。よって2間×6間以上の土間造りの建物と想定されるであろう。この建物は、第5・6次調査区で発見されたロの字型倉庫群東列の倉庫群を構成する建物であることも判明した。

方形周溝墓 第5・6次調査区で確認できたS Z 7の南と東溝が検出できた。四隅に陸橋をもつ典型的な弥生時代中期の方形周溝墓である。一辺14mを測る大型方形周溝墓である。溝出土の遺物から、白岩式古段階の時期と見られる。

その他の遺構 第58次調査区東端のS D31は幅3mを測る溝で、北東方向に延びており倉庫群の主軸方向と合致するため、倉庫群に関係した区画溝と思われる。さらにその東側の第77次調査区でも幅3mの同方向に延びる溝が確認できこちらも倉庫群に関係した区画溝と思われる。

S K62は12世紀末～13世紀前葉の遺物を出す土坑で、2段堀の井戸と思われる。中世の井戸は今のところこれ1基しか発見されていない。

S D41は明治時代の屋敷地の南辺区画溝で、東端は東辺溝のコーナー部分も確認できた。第5次調査区でも同時期の石垣のある東辺区画溝が発見されているが、石垣は当調査区の方が丁寧に積まれているので、こちらが屋敷正面の区画溝と思われる。「とうもろこし」と書かれた木札が出土している。遺物から見て明治時代後期の陶磁器と、桟瓦が出土しているので瓦葺建物があった屋敷である。

(3) 遺物

第23図1の打製土掘具は小型品であるため、縄文時代中期に属すると見られる。

弥生時代の遺物は、S Z 7南と西溝から出土した中期後葉のものがまとまっている。第20図13の疑似流水紋、第21図31の西遠江～三河の瓜郷式系の壺、第20図11・19の受口口縁の壺を見る限り、白岩式古段階の特徴を示している。第21図26などの低い台は鉢形甕の台になるのものと思われる。

古墳時代後期の遺物としては、P 15から出土している第23図76は口縁が内湾する土師器壺、77～79の外反口縁の土師器長脚高壺は6世紀前葉、第20図1のS B 8貯蔵穴出土の小型土師器広口壺は、7世紀前葉の特徴を持つ。

中世遺物としてはS K57より出土した第21図34～38の12世紀末～13世紀前葉の山茶碗・小皿がまとまっている。いずれも渥美・湖西産であり、他の調査区でも渥美・湖西産山茶碗に少量の東遠江山茶碗が伴う傾向と一致している。

(4) まとめ

弥生時代中期の方形周溝墓と後期の竪穴住居がまとまっている状況は、周辺の調査区の様相と一致するため、中期では墓域、後期になると居住域となるが、方形周溝墓を全面破壊して竪穴住居を造るのは、S B 8がS Z 7を壊して造られているように古墳時代後期になってからである。

奈良時代の大型掘立柱建物のS H17は土間造りで、I期の郡衙正倉域東部のロの字型配列の東辺建物群のひとつであるが、このロの字型配列の倉庫はすべて総柱倉庫であるため、土間造りの倉庫が含まれることが判明した。さらに、区画溝もロの字型倉庫群に近いS D31とS D42が確認され、前者がI期、後者がII期の東辺区画溝であることが追認できた。ただし、この調査区より北方面へはS D42は確認できているが、S D31は確認することができない。

明治時代の屋敷地の区画溝が検出できた。屋敷地内部の建物や遺構の配置は第5次調査区においては、同時代の遺構調査はしていないのでよく分からぬ。

3. 第59次調査区の概要（報告書35第24図～第30図）

（1）はじめに

本調査区は遺跡の東部地区の東端中央にあたる調査地点で、東部地区では初めての調査区である。区画道路14・16号と、民地の宅地造成を併せて平成19年度に実施された（2008報告書22写真図版編）。

包含層は台地の端にあたるため流出したせいかほとんど確認できないが、調査区の西北端のごく一部で厚さ10cmの包含層が確認できた。

（2）遺構

遺跡の東端にあたるため遺構数は少ない。掘立柱建物が多数と竪穴住居、土坑が確認されている。

竪穴住居 北西部分の区画道路16号調査区より2棟確認されている。S B 1は4本柱穴と北西隅の壁溝が確認されたのみであるが、隅丸方形の竪穴住居になると思われる。遺物は出土していないが、平面形態から弥生時代後期に該当すると見たい。S B 2は北壁の壁溝の一部が確認されたのみで、方形か隅丸方形になる竪穴住居と思われる。かまどはないので、弥生時代後期の竪穴住居と考えたい。

掘立柱建物 掘立柱建物はS H 1～4・6～12の11棟が確認された。柱間の確認できたのはS H 11の2間×2間の建物のみで、比較的柱間数の多いS H 1・4のほかは小型建物と見られる。建物周辺の小穴やS H 6の柱穴からは、古墳時代後期、中世では13世紀ないし16世紀の土器・陶磁器が出土しているので、大方戦国時代の掘立柱建物になると考えられる。ただし、S H 3は小型建物ながら堀方が方形をなすため、戦国時代の主要建物か奈良時代の掘立柱建物になる可能性もある。S H 5は近代の礎石建物で、礎石抜取痕が確認できた。

その他の遺構 円形土坑のS K 3と楕円形のS K 1より13世紀前葉の山茶碗が出土している。いずれも土葬墓の可能性がある。その他の土坑のうち小破片の土器や埋土の状況から見ると、S K 2は弥生時代中～後期の時期になりそうで、S D 4と共に方形周溝墓の溝になる可能性が高い。S K 5は古墳時代後期、S K 15・16は古墳時代後期、S K 4～6・8・10・12・13は江戸時代に該当しそうである。S D 9は古墳時代後期、S D 6ほかの東西方向の小溝は江戸時代後期から明治時代の埋土の特徴を示し、遺物はほとんど出土しないため畠地の区画溝か暗渠排水路の可能性が高い。S H 1を破壊している攪乱は、近代の道跡であるため、調査の対象から外した。

（3）遺物

古墳時代中～後期の土師器と須恵器は第30図31～37・39～44に示したように、32が5世紀後葉、それに続く34が6世紀前葉、43・44が6世紀中葉、33・39～42が6世紀後葉、31・35～37が7世紀後葉の時期に該当する。

中世の遺物は13世紀前葉の山茶碗・小皿で知多産は第30図3・4・21～24、渥美・湖西産は17～20、東遠江産は16となり、知多産が多数を占めており、当遺跡での他の調査区での流通傾向は渥美・湖西産が主体となる傾向とは異なる結果が得られた。中世後期の戦国時代の遺物としては15の青磁碗のほか、45・47の瀬戸大窯1期、30・48の大窯3期併行の志戸呂、28・29・46・50の在地系のロクロかわらけなどがあり、16世紀の時期が主体をしめる。

（4）まとめ

遺跡の東端にあたるため、竪穴住居など弥生～古墳時代後期の遺構は数が少なかったが、方形周溝墓の溝と見られる遺構や、土坑などもあるため西方調査予定地での遺構数は増加すると見られる。中世の遺構・遺物は13世紀前葉と戦国時代後葉の時期に分かれるが、前者は調査区のうち南部、後者は北部に多い傾向が見られた。とくに、戦国時代の遺構は北西部に多くあり、今後この部分より西側で戦国時代の館関連の遺構が発見される可能性がある。

4. 第60次調査区の概要（報告書35第31図～第48図、報告書36第236図）

（1）はじめに

遺跡の中央を東西方向に分断する主要幹線の都市区画道路掛之上小野田線の西部を中心とする平成19年に実施され、一部民地の宅地造成分を含む調査区である。民地の迂回路のため南の1区を先行して行い、迂回路ができたところで北の2区の調査を実施した（2008報告書23写真図版編）。なお、隣接地の第13次調査区は平成14年度に調査され報告済（2003報告書6本文・写真図版編）、第33次調査区は平成16年度に調査され報告済（2005報告書14写真図版編、2012報告書31遺構・遺物編1、2014報告書37本文編）である。

遺物包含層は畠地の耕作土が深かつたせいか、ほとんど確認できなかった。

（2）遺構

主な遺構は弥生時代の竪穴住居と土坑、中近世の区画溝である。なお、本調査区より東南の調査区外は、近年の宅地造成により削平され遺構が失われていたことが判明したため調査範囲外とした。

竪穴住居 多数の土坑や柱穴が存在するため、壁溝をもつ竪穴住居7棟が検出されている。全体の形状が分かるものはないが、楕円形のSB37、隅丸方形のSB38～41、方形のSB42、不明のSB43がある。建て替え回数を壁溝の数から見ると、SB37が最低2回、SB43も炉跡3箇所が存在するため2回の建て替えがあったと思われる。時期は出土遺物から見ると、SB39・42が弥生時代後期前半新段階、SB41が後期後半になると思われる。平面形態から判断すると、SB37は弥生時代中期後葉～後期前半、SB38・40は弥生時代後期後半になると思われる。

土坑 土坑のうち弥生時代の遺物を出土したものをあげるとSK124・125・127・129・139・140、そのなかでSK124・125からは弥生時代後期前半新段階の土器がまとまって出土している。江戸時代後期の土坑はSK126だけであったが、SK30も埋土から江戸時代後期になる土坑と思われる。

その他の遺構 溝の時期は遺物から判断すると、弥生時代後期のSD61・62、鎌倉時代か戦国時代のSD1・51・59・68・69・71、奈良時代のSD60、江戸時代後期のSD30・63・64となる。中世の溝から白鳳期の瓦や奈良時代の須恵器が出土しており、SD60とともにこの時期の遺構の存在が注目される。浅いが大型土坑と見られるSX11からは奈良時代の須恵器が出土している。

（3）遺物

縄文時代の遺物は第48図37の石匙が中期に該当すると見られる。

弥生時代中期の遺物は少ないが、第36図8の壺の頸部は中葉の嶺田式、第41図194の壺型土器口縁部は中葉の三河の瓜郷式の特徴を示す。第39図133の横櫛描文が施された壺型土器は後葉の白岩式古段階の特徴を示す。149の鉢形甕は白岩式新段階に該当する台付甕になりそうである。

SK123～125からは第39図126～第40図160に示した弥生時代後期前半新段階の土器がまとめて出土している。SK124出土の129～132の壺型土器口縁は大きく外反し、断面小さな折返口縁となる古い特徴が見られる。137は前半新段階に見られる受口口縁の壺に対して、高坏は135の折返口縁、接合部に多重の横刺突文の施された134・151・156、二段の突帶文の施された154は後半古段階の特徴をもつものを含む。157の小さく外反する口縁の台付甕は前半段階の特徴である。

SB41からは第36図13～第38図106に示した弥生時代後期後半段階の土器がまとめて出土している。このうち、73・87は胴部上半部全体に縄文を施す長胴壺は後半古段階となるが、壺や高坏に有段羽状刺突文が施された27・63～67は後半新段階の特徴を示している。96～98の大きく外反した口縁で長胴化した台付甕は後半古段階の特徴を示す。弥生時代の土製品はSK130出土の第45図6・7の2次焼成を受けたもので、鋳型の可能性もあるが小破片のため分からず。時期は後期後半の土器と奈

良時代の須恵器が出土しているため、いずれかと思われる。

第45図1・2はガラス小玉で、1は中世のS D 3、2は時期不明のP 12より出土しているが、色調から弥生時代後期～古墳時代のものと思われる。弥生時代の石器の多くは中近世の溝から出土しており時期は確定できないが、第46図16・18・23、第47図29、第48図47の扁平片刃石斧、17・28・34・39・43・45・46・48の砂岩の粗製剝片のスクレイパー、26・44の伐採斧、20の大型石鋤、14・36の叩石、19・21・22の砥石などは後期の石器になると思われる。16の赤色凝灰岩は駿河地域からもたらされたものである。後期後半のS B 41から出土した第46図19と、後期前半のS K 139出土の22の砥石は金属用と思われる。第46図15の刃部磨製石器には光沢痕はないため、稻の収穫具である石包丁ではない。25・32・35・38・40・42の叩石や、36の磨石は古墳時代後期のものと区別がつかない。

古墳時代中期の土師器は第44図335～338の5世紀前葉の見性寺II-2式のものが少量ある。

古墳時代後期の土器は第38図110・111、第41図210・221、第42図237、第43図272・301、第44図315に示した6世紀後葉～7世紀前半の須恵器壺蓋・身、第43図303の須恵器塙、第42図234に示した6世紀末葉の土師器長脚高壺があるが、須恵器主体で土師器は少ない。

白鳳期と思われる瓦としては第42図233・261、第43図307、第44図318があり、233は頸付四重弧文軒平瓦、307・318は桶巻造りの平瓦である。奈良時代の須恵器としては8世紀初頭～前葉のものをあげると第38図112・113、第41図212、第42図238・241・242、第43図273・302、後半は第38図114・125、第41図211・220・225、第42図240・243・244、第43図304と時期不詳の須恵器甕の破片である第42図245～250第44図310がありまとまっている。第42図255の尾張産灰釉陶器K 14期のものは、寺院や郡衙関連遺跡からの出土例が多い。第41図216は清ヶ谷産灰釉陶器としては古い9世紀後葉のものである。

中世前期の遺物は山茶碗・小皿・片口鉢のうち渥美・湖西産の第40図161、第41図219・223、第42図230～232・252・253、第44図320・321、知多産の第41図218、第42図254・258、第44図312～314・322、東遠江産の第41図217、第44図308、第45図372が確認できた。渥美・湖西産が54%、知多産33%、東遠江産13%となっているが、知多産のほとんどは13世紀前葉である。第44図324は古瀬戸前期の瓶子で国産の威信財として注目される。中世後期では第44図309の古瀬戸後期の小壺と323の瀬戸大窯1～2期の摺鉢が確認できたに過ぎない。

江戸時代の遺物は少なく、第41図222の19世紀前葉の瀬戸産染付碗、第43図298の19世紀前葉の瀬戸産の鉢、第42図257の18世紀のろくろかわらけぐらいしか確認できなかった。

(4) まとめ

弥生時代後期の竪穴住居と土坑が多数確認でき、中期の遺物と遺構は少ない。方形周溝墓はなく弥生時代後期の中心的な居住域であることが分かった。遺物も土坑からまとまって出土しており、後期前半のものが主体であった。比較的多数出土した弥生時代の石器も後期前半が主体になると思われる。S K 130出土の鋳型らしい破片は注目すべきもので、今後詳細な検討が望まれる。

白鳳期の瓦と奈良時代の須恵器が比較的まとまった調査区であった。いずれも中世の溝からの出土で、同時期の遺構はないが瓦については、郡衙関連の遺物として注目される。

鎌倉時代を中心とした溝が発見され、企画性を持って配置されているので屋敷地を区画する溝と思われる。戦国時代の陶器も微量混じるので、時代が降る可能性もある。S D59とS D68の間と、S D1とS D51の間は2～3mあり、屋敷地の間に設けられた通路と思われる。そうすると4箇所の屋敷地があったと思われる。

江戸時代の遺物は極端に少ないものの、S D 3・17などの小溝は、畠地の区画溝と思われるため、江戸時代の屋敷地はなく、畠地の場所だったと思われる。

5. 第61・72・74次調査区の概要（報告書35第49図～第84図）

（1）はじめに

第61・72・74次調査区は遺跡の東部地区なかでも東端にあたり、平成19年度に第61次調査（2008報告書21写真図版編）、平成20年度に第72・74次調査（2009報告書25写真図版編）が民地の宅地造成を主体とし区画道路14・15号線分を含む調査として実施された。この調査区の北には平成19年度に実施された第59次調査区（2008報告書22写真図版編、2013報告書35遺構・遺物図版編1、本文編本書掲載）、南側にも平成19年度に調査が実施された第60次調査区がある（2008報告書23写真図版編、2013報告書35遺構・遺物図版編1、本文編本書掲載）。

遺跡の東端であり崖線に近いところの包含層は失われていたが、西半は集落域になるため厚さ10cmの包含層が確認できた。

（2）遺構

主な遺構は弥生時代の竪穴住居と方形周溝墓、土坑、古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物、中世の掘立柱建物、江戸時代末期の墓と土坑、溝である。

竪穴住居 調査区全面に柱穴と見られる小穴が密集して確認できたが、弥生時代の竪穴住居と認識できたのは、炉をもつSB3～6・8の5棟であった。このうち平面形態が分かったのはSB5の楕円形のみで、他は壁溝すら分からなかった。SB5には南寄りに炉跡が2箇所あるが、建て替えがあったかどうか分からぬ。SB6は長軸3.2mの小型住居で北寄りの地床炉があり、住穴は確認されなかつた。遺物から時期判断するとSB3・5・6・21は後期後半新段階となる。

SB7からは6世紀前葉の土師器壺が出土しており、古墳時代後期の方形竪穴住居と思われる。かまどは削平されて確認できないが、南入口に貯蔵穴がある。SB21は古墳時代後期の竪穴住居と思われるが、ごく一部の検出で詳細な時期は分からぬ。

掘立柱建物 柱穴と柱間規模、主軸方向から古墳時代後期、奈良・平安時代と中世のものを識別した。古墳時代後期は同時期の竪穴住居住主軸方向を同一にするもので、柱間隔も一定のSH15・23～25・29・33、奈良・平安時代は大型建物で大きな柱穴となるSH16・20・38、中世は小型建物が主体で柱間隔が不規則なSH10・17～19a・19b・26～28・30・31・39としたが、ほとんどは遺物での時期決定が出来てないので、一部混同した時期がある可能性を含む。

古墳時代後期のSH15・23は長方形の建物、SH29・33は正方形の建物である。奈良・平安時代としたSH16は4間×5間、SH20は1間×3間の土間造りの長方形建物、SH38は北側に庇をもつが、南北方向の柱列がよく分からぬ大型建物である。なおSH38の柱穴からは平安時代の灰釉陶器が出土している。また、SH16についても柱穴が不揃いのため平安時代に降る掘立柱建物になる可能性もある。中世の掘立柱建物のうちSH10は1間×6間の土間造りの長屋風建物、SD10の溝で囲まれたSH19aは特殊な建物で、後者は宗教施設の可能性がある。それ以外は比較的小規模な建物群で構成されている。SD10からは弥生時代中期後葉の土器に混じって13世紀前葉の山茶碗が出土しており、大方の掘立柱建物は13世紀前葉になると思われる。

方形周溝墓 SZ1は他の時期の遺構との重複が激しく確実な全体形は不明であるが、中期後葉の四隅に陸橋をもつ方形周溝墓になるとと思われる。主軸方向はほぼ北を向き東部地区で発見される中期後葉の方形周溝墓になると同一方向となる。大きさは方台部10mを測る中規模サイズで、溝幅は1.5m前後を測る狭いものである。溝内土坑や土器棺はない。時期は周溝から出土している土器から、白岩式新段階の時期になると思われる。北側のSK52やSD66は同一主軸となる溝状の土坑で、SZ1と単位群になりそうな遺構である。

土坑 弥生時代の土器を出土した土坑のうち、中期後葉の土坑は S K17・18・48・49、後期後半の土坑は S K20・21である。S K49からは完成品に近い白岩式新段階の細頸壺が出土しているため、方形周溝墓の周溝になりそうな土坑である。それ以外の土坑の遺物量は少なく、破片で出土しているため廃棄土坑と考えられる。

鎌倉時代の遺物を出土した土坑は S K22・23・51である。性格を特定できる遺物は出土していないが、掘立柱建物群に付随するゴミ穴と思われる。S K47は S D48の埋土中より検出された遺構のため、遺物の出土位置しか分からなかった。17世紀のかわらけと中国錢が出土しているため、江戸時代初期の土坑墓で、単独で発見されたため屋敷墓になる可能性が高い。

溝状遺構 第72次調査区の北端に東西方向、第74次調査区では南北方向の溝が多数発見された。弥生時代ではまとまって中期後葉の土器を出土した S D60、弥生時代後期の土器出土した S D25・34・48・51・62があげられる。S D60は東西方向の溝で、その他の溝方向とは異なるため、S K49と組み合わせになる大型方形周溝墓の周溝になる可能性もある。弥生時代後期の溝については、地形から見て排水目的の溝と思われる。S D62は溝というより窪地ないし池のような遺構である。

奈良時代の遺物を出土した S D11・54a、中世の遺物を出土した S D14・34・35・50・53・54b・64については、掘立柱建物群を区画する溝ないし排水溝と思われる。このうち S D11・50・54a より白鳳～奈良時代の瓦が出土している。同時期の瓦は南西方向で隣接する第60次調査区でも出土しており、郡衙関連の遺物として注目される。

江戸時代末期の陶磁器・土器を出土した溝は S D17・49と少ないが、S D15・21～23・51・52・56・67なども含めた小溝は、畠地の区画ないし排水溝としての役割が考えられる。江戸時代の遺物は少ないので、この調査区では畠地としての利用が考えられる。

その他の遺構 P 311・312より16世紀後葉のかわらけが出土している。戦国時代の掘立柱建物の柱穴に埋納された地鎮具かもしれない。

(3) 遺物

縄文時代の遺物として第76図457の中期中葉の勝坂式の深鉢破片のほか、第83図20・21の打製土掘具も小型で、縄文時代中期になる可能性がある。

第63図37～第64図64の S Z 1 の遺物は一部混入品もあるが、白岩式新段階の一括資料として認定できる。45の典型的な外反する単純口縁の細頸壺、38・51の受口口縁となる細頸壺、49の受口口縁の広口壺がある。37の内面突帯のあるものは白岩式の高杯の特徴である。甕は58～64の長胴の台付甕が主体となる。S D60出土の第78図537～第79図562も白岩式新段階の一括資料である。壺は540・542・545の細頸壺、537の受口口縁の広口壺、554～562の鉢形台付甕がある。単独であるが S K49出土の第67図168の細頸壺も白岩式新段階の細頸壺である。混入品であるが中世の溝 S D10出土の、第67図178～第68図202も白岩式新段階の土器である。183・195～198は細頸の壺、180の受口口縁の広口壺、199・202の鉢形台付甕、178の脚の小さな鉢形高杯の脚などがある。中期中葉の嶺田式の受口口縁になる広口壺の194の他、第78図541の頸部が膨らむ細頸壺がある。

S K21出土の第65図89～第66図126のうち、101の単純口縁の壺、97・102の受口口縁の壺、110の3条の横刺突文の壺、94～96の下端の立ち上がりが小さな高杯脚は後期前半の特徴を示す。92は西遠江の伊場式の高杯脚部で西遠江からの搬入品で、他に伊場式高杯は第74図390も該当する。ただし、この土坑中には118のように胴部上半に2段の縄文を施す壺の後半古段階、91・93・106・108の後半新段階の特徴となる有段羽状刺突文を施す高杯や壺も含まれている。第71図306～第73図385に示した S D48出土の土器のうち、323は白岩式古段階、332・333の鉢形甕と335の台付甕は白岩式新段階、321

の受口口縁の壺は胎土・色調から見ると県東部からの中後葉の土器の搬入品と思われる。315・317・322・353・358の壺には、後期後半新段階の有段羽状刺突文が施されている。366の小型壺も後期後半新段階によくある壺である。第76図458～467に示したS D51出土のうち、461・462も後期後半新段階の特徴である有段羽状刺突文の施された壺である。

弥生時代の土製品は第63図39の有孔の円盤型土製品は壺蓋の可能性があるが、弥生時代中期後葉のものなら類例はない。弥生時代の石器は、第84図31は快りのない柱状片刃石斧、第83図23・27・第84図34（未製品）の伐採用石斧があり、石材は西遠江～東三河産であるため搬入品と見られる。第83図22・第84図28～30・32の砂岩の粗製剥片のスクレイパーは、弥生時代中期中葉～後期前葉によく見られる石器であるが、摩耗痕しか観察できないので石包丁としての用途としては使っていない。

古墳時代前期の遺物は少ないが、第72図341～343が前期に該当し、341の小型丸底壺を含む。

古墳時代中期では第71図288の5世紀前葉の土師器高壺、5世紀後葉では第80図572の土師器高壺と、591の須恵器壺蓋がある。

古墳時代後期になると遺物量は増え、年代別にならべると6世紀前葉では第63図11・31の土師器壺、第81図609の須恵器壺蓋、6世紀中葉では第80図574・第81図615の土師器の折返口縁壺、第80図573・第81図611・612の土師器長胴甕、第74図404の須恵器壺蓋、第63図24・第81図607の須恵器壺身、第74図409の須恵器高壺、6世紀後～末葉では第81図595の土師器壺、第63図12・第69図230・第74図396・392・第80図575・第81図599の土師器高壺、第78図534・第81図600・632の土師器長胴甕、第67図171・第74図405・第76図470の須恵器壺蓋、第74図412の須恵器壺、7世紀初～前葉では第78図532・533の土師器壺、第67図170の土師器高壺、第69図219の須恵器壺蓋、第71図309の須恵器壺身、7世紀中葉では第63図36・第67図165・第74図403・第81図596・603・608・第82図653・654の須恵器壺蓋、第67図172・第71図289の須恵器壺身、第74図407の須恵器高壺、第74図410の須恵器浅鉢、413の須恵器鉢、7世紀後葉では第63図14の須恵器壺蓋がある。第78図527のミニチュア土器は形態から見ると古墳時代後期に属するものである。

奈良時代の遺物としては瓦が特筆される。S D54a以外の中世の溝からの出土しており、第69図205・206、第76図455・456は桶巻造りの平瓦、第75図451～453・第76図454、第78図536は桶巻痕がないので一枚造りの平瓦と判断した。前者は第60次調査区で四重弧文軒平瓦が出土しているので白鳳期に遡り、後者は奈良時代中頃のものと見たい。奈良時代の須恵器は第68図187の壺、第71図290・第78図535の高台壺・292の壺、408の無高台壺、第74図406・第77図507・第81図604の壺蓋など奈良時代前～後期の壺類が多く出土している。平安時代の灰釉陶器は、10世紀の第68図188の碗、第80図577・第82図651の瓶、11世紀前半の第80図576の碗があるが極めて少ない。

中世山茶碗関連については、総数130点出土しており他の調査区と比べるとまとまって出土している。12世紀のI期の製品は湖西・渥美産21点のみ、12世紀末葉のII期の製品は湖西・渥美産15点(65%)、知多産7点(34%)、東遠江産1点(1%)、13世紀前葉のIII-I期の製品では湖西・渥美産29点(37%)、知多産47点(62%)、東遠江3点(1%)、13世紀中葉のIII-2期の製品では湖西・渥美産7点と、III-1期では、地元湖西・渥美産よりも知多産が多数を占めるという、遠江の中世遺跡としては特異な状況を示している。中国産磁器は第71図294・第81図597の竜泉窯の青磁碗、第81図614の白磁碗が12世紀～13世紀前葉、630・631の竜泉窯の鎧蓮弁文青磁碗は13世紀後葉に該当する。戦国時代の陶磁器類はさらに少なく、15世紀後葉では第65図74の古瀬戸後IV期の端反皿、第80図587の三河型くの字口縁内耳鍋、16世紀前葉では第75図448・第82図650の瀬戸大窯1～2期の摺鉢、16世紀後葉では第81図637のかわらけ、第82図652の遠江型内耳鍋がある。第81図613のふいごの羽口と第

83図10～13の焼けた土壁残片は、614の白磁と共に出土しているので、平安時代末期～鎌倉時代のものと思われる。

第82図1～6の渡来銭は江戸時代の墓であるS K47より第67図144～146とともに出土したもので、寛永通宝流通以前のものであろう。これ以外の江戸時代の遺物は第69図232の瀬戸産鉢、第74図387・388のカワラケ、第75図446の志戸呂産小皿がある程度で極めて少ない。

(4) まとめ

弥生時代では中期後葉～後期の遺物が出土したが、遺構としては中期後葉の方形周溝墓1基と、後期の竪穴住居4棟が確認できた。中期後葉の土坑もあるため、同時期の住居があった可能性がある。よって、弥生時代中期後葉では居住域と墓域、後期では居住域として利用されていた。

古墳時代では初頭の土師器、中期前葉の見性寺式がわずかに出土し、後期の6世紀中葉～7世紀前葉の土師器・須恵器が一定量出土している。遺構も後期と思われる竪穴住居1棟、掘立柱建物6棟が確認できたので、後期の居住域が遺跡東部地区の端まで広がっていることが判明した。

奈良時代の遺物としては、白鳳期と奈良期に属する2時期の瓦が出土したが、寺院の存在を裏付けるほどの量ではない。掘立柱建物3棟も平安時代に降ると思われる。

中世のうち鎌倉時代の遺物が一定量出土し、13世紀前葉の知多産山茶碗が多いことが確認できた。戦国時代の遺物は少ないため、掘立柱建物11棟のほとんどは鎌倉時代の時期になると思われる。中国産磁器は少ないながら白磁と青磁碗が出土した。瓶や大皿など威信財と見られるものは出土していないので、一般集落の様相と思われる。

江戸時代後期の遺物も少なく、遺物をほとんど出土しない小溝を確認したのみで、居住域ではなく畠地の区画溝や暗渠排水溝と思われる。遺物では判断できなかったが、一部明治時代の溝も含むかもしれない。

6. 第62次調査区の概要（報告書35第85図～第101図）

(1) はじめに

第62次調査区は遺跡の北部にあたる場所で、北端が原野谷川崖線にあたる。都市計画道路掛之上線の第18次調査区の北に位置し、掛之上線道路建設に伴い平成19年度に実施された（2008報告書23写真図版編）。平成16年度実施された、配水管埋設に伴う第37次調査の内第1～3区の調査範囲と重複している。迂回路のため客員幅半分の範囲の調査区となっている。ちなみに、第18次調査区は報告済（2003報告書8本文・写真図版編）である。

包含層は宅地利用のせいか搅乱が深くおよび南半ではほとんど確認できないが、北端では自然の谷に埋没した包含層が厚く堆積していた。

(2) 遺構

主な遺構は弥生時代中期の方形周溝墓、後期の竪穴住居と土坑、中世の掘立柱建物、江戸時代の溝などが主な遺構である。

竪穴住居 弥生時代中～後期の集落域にあたるため、竪穴住居のほか土坑や柱穴と見られる小穴が調査区南半に密集して検出されたが、台地北端に至たる北半では柱穴の数は減少する。竪穴住居は調査区南端で見つかった楕円形のS B22と、北端で見つかった隅丸方形のS B44がある。出土遺物では時期は分からぬが、平面形態から前者は弥生時代中期後葉～後期前葉、後者は後期後葉になると見られる。S B44はほぼ中央に地床炉をもつが、S B22に炉はない。

掘立柱建物 掘立柱建物は全形の分かるものはないが、比較的太い円形の柱穴からなる、S H5～

7・9・10は中世の掘立柱建物と思われる。主軸方向は真北より少し東に傾く奈良時代の掘立柱建物とは異なり、真北か真北に対して直角になる。柱間はS H 6で南北4間、S H 7は南北3間、S H 10も南北3間の建物で、S H 6のなかに柱を残すものがある。このうち柱間寸法が異なるためS H 6と7は別の建物としたが、同一建物ならば南北7間の大型掘立柱建物となり、柱穴内より16世紀初頭の瀬戸大窯1期の陶器が出土しているので、戦国時代の建物群になると思われる。S H 8も柱間が一定でないが、戦国時代の掘立柱建物になる可能性がある。

方形周溝墓 弥生時代中期後葉の方形周溝墓S Z 1の1基が確認できた。主軸は東部地区で検出される方形周溝墓と同じく北方向になる。西溝が調査区外となり全形は不明であるが、四隅に陸橋をもつ中期後葉の典型的な方形周溝墓になると思われる。東溝より北溝に延びた接続小溝がある。周溝内からは白岩式新段階の土器が出土しているが破片である。中期後葉の土器がまとまって出土しているのはS K 1である。S K 1はこの溝と同じく中期後葉の土器がまとまって出土した第18次調査区のS K 7と組み合わせになると、方形周溝墓の西溝となる。ただし主軸方向はS Z 1とは異なりやや東向きになるし、中期後葉の方形周溝墓特有の完形率の高い壺は出土していない。

その他の遺構 弥生時代の土坑としては、S K 80・143・145でいずれも遺物量は少なく後期の時期に該当する。土器以外の廃棄土坑であろうか。S K 147からは鎌倉時代の山茶碗が出土している。S K 146と149の深めの円形土坑は、形態と埋土から見て江戸時代になる可能性が高い。

溝は南北方向の谷の方向に延びたS D73・75・79、東西方向のS D80、谷の斜面にあるS D76・77がある。このうち、江戸時代後期のS D73・75からは遺物が出土しないので、畠地の区画ないし排水溝となる。S D77からは、弥生時代後期後半古段階の土器が完成品を含む大量の土器片が出土した。谷堆積物以前の遺構であるが、自然に浸食された溝で谷堆積物の一部かもしれない。

北端の谷堆積物からは、下層で弥生時代後期後半新段階の土器片が大量に含まれ、上層からは古墳時代初頭～後期、奈良時代の土師器・須恵器が出土しているが、中世の遺物は少ない。

(3) 遺物

弥生時代中期後葉の土器としては、第90図17～第95図135のS K 1出土の土器が一部混入品を除くとほぼ一括性がある。S K 1からは白岩式新段階の細頸壺である17・34・36・37・40～45・50・51・59・64・66・73・127、受口口縁の広口壺である32・33・35・38・39と、その肩部である55・58・65がある。細頸壺のうち単純口縁の36・73と、受口口縁の17・34・37の2種類がある。胴部形態は76～81・89のように球形ないし西洋梨型になるものが多い。57は小型壺、29・74はミニチュア壺に属する。25～28は白岩式新段階の高壺脚部になる可能性があるが、18・20は後期前半、24は後半新段階になる高壺で混入品であろう。129は東三河の瓜郷式壺の搬入品である。甕は鉢形の92～103・110～130、台付甕の104～109・111・118・131があり、台付甕の脚部114～117・119～126が一定量あるため、鉢形にも台付になるものがある。

第96図185～第97図201に示したS D77出土土器は、細頸壺は単純口縁の191～193・196・197、受口口縁になる194の2種類がある。194・196の駒形の胴部形態は、後期前半古段階に近い形態である。

後期後半新段階の土器は第95図138～149、第97図222～第100図317に示したS K 143・145と北端の谷堆積内より出土している。その特徴である有段羽状刺突文をもつ137・140・141・146・147・227・228・231・234～237・266・267・271・274～278・292・293の高壺・壺がある。また、折返口縁で口縁端部に縦方向の連続櫛刺突文の施された223・239・245・252・255・256・259・264の壺と高壺、多段の羽状刺突文の施された268・270の壺も後半新段階の特徴である。台付甕はくの字口縁になる309～311と312の折返口縁の台付甕が後期後半新段階の特徴である。313・314の台付甕接合部に補強

帶をもつものは、西遠江の台付甕と共に通する特徴である。

弥生時代の石器は第101図6の扁平片刃石斧のほか、8～10の砂岩の粗製剥片を利用したスクレーパーは中期後葉の時期になるものと思われる。11の土掘具は小型で縄文時代のものかもしれない。

古墳時代は初頭に属する高坏の第100図319、くの字口縁で長胴台付甕の320、第97図216の鉢、中期では5世紀前半の土師器である第100図321～323の高坏、324の台付甕、325～327のくの字口縁の甕、後期では6世紀前葉の第101図328の土師器の高坏、6世紀中葉の第97図209の土師器の小型鉢、220の須恵器坏蓋、6世紀後～末葉の第95図136・第101図329の土師器の坏、330～333の土師器の長脚高坏、7世紀では前葉の第95図152の土師器高坏、中葉の第101図336・337の須恵器の坏身などは混入品や谷堆積物上層出土のものが多く、遺構から出土するものは少ない。土製品としては第101図4・5の土錘があり、形態から見ると古墳時代後期か中世に該当すると思われる。

奈良時代の須恵器は、8世紀初頭～前葉の第95図153・第96図173の坏身のほか、174の甕口縁、第101図334・335の坏蓋が谷堆積物上層からわずかに出土したのみである。第97図202の平瓦は表面摩滅しているが、桶巻痕跡が見られるため白鳳期に該当し、第60・74次調査区からも出土している。

中世のうち前期の山茶碗は12世紀前～中葉I期は湖西・渥美産が5点、12世紀末葉のII期では湖西・渥美産が5点、13世紀前葉のIII-I期では湖西・渥美産が8点、知多産1点、東遠江産が1点、13世紀中葉のIII-II期では湖西・渥美産が1点、知多産が1点という結果で、データ化するほど多く出土していない。中世後期では15世紀後葉の第96図183の古瀬戸後IV段階の皿、第96図184の三河産羽釜、第97図213の三河産鍔付鍋がある程度で、16世紀になると第97図214の大窯I期の端反皿、第90図15・第97図219の大窯I期摺鉢、第97図208の常滑鉢、第96図176・第97図203・204・210・212・218の在地ろくろかわらけのほか、第96図177・第97図217の西遠江～三河系の非ろくろかわらけ、第90図16の遠江型内耳鍋があり、16世紀のかわらけが目立つ。とくに217は意味不明であるが墨書のかわらけがある。第101図12はS H 6・7の柱穴の一つから出土した柱根で、当遺跡の掘立柱建物からは唯一の出土品である。戦国時代の柱根で水分を含んでいたため残ったと思われる。腐化は進んでいるが直径15cm以上はあった柱で、材質は針葉樹であることが分かる。

江戸時代の遺物としては図化できたのは、第90図1の18世紀後葉の瀬戸産陶器の蓋、第96図179の18世紀後葉の肥前染付筒茶碗、第97図221の17世紀のかわらけのみで非常に少ない。

(4) まとめ

弥生時代中期後葉～後期の竪穴住居2棟が発見され、居住域であることが確認できた。中期後葉の方形周溝墓であるS Z 1と、周溝になる可能性の高いS K 1が確認できた。ただし、S Z 1の主軸方向は東部地区で見つかる同時期の方形周溝墓群と同じくほぼ北向きになるが、S K 1は東に傾いている。東部地区と同様に中期後葉段階では墓域、後期段階になると居住域に変遷する場所と見られる。北側の現在でも見られる谷地形は、遺物の出土状況から見ると弥生時代中期後葉からの開析谷になることは確実で、しかも埋没状況から見るとほとんど地形は変わっていないと思われる。

古墳時代の遺物は後期のものが一定量出土したが、明確な遺構は確認できなかった。近くに同時期の遺構が存在していると推測される。

掘立柱建物は柱穴に戦国時代の遺物を含むものがあり、しかも大型掘立柱建物になる可能性が高い。また、建物の主軸方向は僅かに東に傾く奈良時代の掘立柱建物とは異なり、ほぼ北向きになっている点からも戦国時代の遺構であると思われる。遺物もかわらけが主体となり、本間氏など地元有力武将の館（袋井市役所1983）に関係した主要建物の一部になる可能性がでてきた。ただし、遺物に中国産磁器のうち壺や大皿などの威信財がないことが気になる。

7. 第63・75-1次調査区の概要（報告書35第102図～第123図、報告書36第236図）

(1) はじめに

第63・75-1次調査区は遺跡の北端、原野谷川崖線上に近く、第62次調査区北東方向に位置している。都市計画道路小野田柳原線に伴い第63次調査区南端の幅1mの排水溝部分を平成18年度に先行調査し、その北の道路部分を平成19年度、さらにその北の道路部分を第75-1次調査区として平成20年度に調査を実施した（第63次＝2008報告書21写真図版編、第75-1次＝2009報告書26写真図版編）。西側は第7次調査区と隣接しており、こちらは報告済みである（2001報告書2本文・写真図版編）。

包含層の保存状態は良く、調査区全体に厚さ20cmの包含層が確認できた。

(2) 遺構

主な遺構は弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期の竪穴住居と土坑、古墳時代後期の竪穴住居、戦国時代～江戸時代初期の掘立柱建物、江戸時代後期の溝と土坑である。遺構は調査区中央に集中し、北端で減少する傾向がある。開析谷と隣接した東端は、工事の搅乱のため遺構がなくっており調査対象外とした。

竪穴住居・土坑 柱穴が集中するところに竪穴住居があることと、壁溝や床面までの掘りこみが浅かつたため住居の範囲を決めることができなかった。一部残った壁、地床炉、4本の柱穴、貯蔵穴を手がかりに竪穴住居8棟を抽出したが、平面形態が分かるものはない。地床炉のある竪穴住居はS B 12・17である。S B 17の柱間は4mあるため、中規模の竪穴住居であった可能性はあるが、S B 12の柱間は2mに満たないもので、小型住居になるかもしれない。いずれも弥生時代後期の時期と見たい。S B 18は南壁に近い位置に貯蔵穴があるため、古墳時代後期の竪穴住居と判断したが、かまどのある北壁ほか大半は調査区外となる。S B 13・16についても確認できる範囲では壁が直線的であるため、古墳時代後期の竪穴住居になると思われる。

土坑の時期は土器が出土した後期前半新段階のS K 67、後期後半新段階のS K 47以外は明確ではない。少ない土器片で判断するとS K 47・66は後期前半新段階、後期後半新段階はS K 8・55・59が該当する。埋土や微量の土器からみて、S K 7・50・61・63・64なども後期に該当する土坑と思われる。時期の分かるものから見ると、後期後半新段階の土坑がまとまっている。

掘立柱建物・区画溝 戦国時代～江戸時代初期に認定できる大型掘立柱建物2棟が確認できた。S H 7は北端が分からぬものの2間×7間以上、梁行6.6m、桁行13m以上の規模になる土間造りの建物である。S H 9は3間×5間、梁行4.8m、桁行9.2mの規模になる土間造りの建物である。S H 8は柱並びが悪くS H 9と重複する、2間×5間、梁行3.6m、桁行5.6mの規模になる土間造りの建物である。S H 7のP 88とS H 9 P 129より江戸時代初期の土器陶磁器が僅かながら出土するため、江戸時代初期に降る時期の建物とも考えられるが、主軸方向は戦国時代の館区画溝S D 7と一致するため、建て替えがあり、当初の建物は戦国時代末期に遡る建物かもしれない。

S D 7は幅2m、深さ1mを測る箱堀となる、戦国時代後期の館の区画溝と考えられる。当遺跡内の戦国時代後期の館を区画する溝のなかでは一番規模が大きく、主時期方向もほぼ北向きになり、第62次調査区で確認できた戦国時代の大型掘立柱建物と主軸方向が一致する。

方形周溝墓 調査区南端にあるS Z 14は、主軸を大きく北東方向に向けるため、西部地区で確認される中期後葉の方形周溝墓群の主軸方向と一致する。北溝と東溝のみの検出で、南・西溝は調査区外となるが四隅に陸橋をもつ方形周溝墓で、北隅に連結溝らして小溝がある。東溝北端で白岩式新段階の焼成後穿孔の完成品の壺が出土している。方台部内のS K 48は中心位置にないが、主体部（土坑墓）になる可能性がある。

その他の遺構 古墳時代後期の土器を出土する土坑は、S K57のみで少ない。該当時期の遺物は出土していないが、埋土から判断して江戸時代後期と認定できる土坑はS E 1、S K60のみでこちらも少ない。S E 1は安全のため底を確認していないが井戸、S K60は水溜用の桶を埋納した土坑と思われる。南北方向に掘られたS D10・11・15も江戸時代後期の畠地の区画溝と思われ、隣接した第7次調査区と同様に屋敷地ではなく畠地利用の場所と考えられる。

(3) 遺物

縄文時代の遺物は第120図291のソーメン文状の突帯文が施された深鉢は、中期後葉の曾利1式に該当する。第123図11・14の小型の打製土掘具は縄文時代中期に該当する可能性がある。

弥生時代の白岩式新段階の土器は第111図4～第113図54・第236図14～31に示したS Z14北・東溝からまとまって出土している。細頸壺の内ラッパ状に開く単純口縁の17・19・35・第236図16と、受口口縁になる13・18・第236図24がある。受口口縁の広口壺は4・16があり、23が肩部となる。27は小型壺の頸部である。高坏は10・第236図21の内面突帯があるものと第236図20のないものがある。ないものと第236図23の接合部に一条突帯文のあるものは後期前半の高坏の特徴となる。甕は鉢形の37・40と、5・43～45・第236図29の球形胴の台付甕がある。42の台がつかない丸底の甕は特殊な事例である。46の低い台をもつものがあり、前者の鉢形甕の台になる可能性がある。49の鉢は口縁部が内湾するものであるが、白岩式では珍しく、後期前半の鉢に近い形態である。6～9・11・12・14・15の壺・高坏は後期後半新段階の混入品である。

後期前半新段階の土器は第117図174～第118図238に示したS K66・67出土のものである。壺は中期後葉からの系譜を引く細頸傾向があり、単純口縁の191・192・194・220・223、折返口縁の186・187・190・218・219・221・222、複合口縁の224の3種類がある。185は受口口縁の広口壺であり、こちらも中期後葉からの系譜を引く。194・226・227は小型壺である。高坏は鍔状で単純口縁の175、折返口縁の176～179・208・209の2種類と、174・210・213の鉢が鉢形高坏になる可能性がある。脚部は180・211・214・216のような接合部に一条の突帯文が施され、183・217のような脚下端が短く立ち上がるものが古い。甕は緩やかに外反し端部に面を作る口縁の198～203が当段階の台付甕特徴となる。

後期後半新段階の土器は第113図74～第115図122に示したS K47と、第115図129～第116図146に示したS K55出土の土器群である。有段羽状刺突文が施された93・95～98・133の壺、折返部が厚く下に垂れ下がった口縁になる83・87・90・91・126・127・129・131、大きく開いた単純口縁の89と内湾口縁の132が当段階の壺の特徴となる。高坏は接合部に有段羽状刺突文をもつ79・80の壺と同じく下に垂れ下がった折返口縁の74～78がある。甕はくの字状口縁で長胴傾向のある111～113・136・137・145・146、折返口縁の128の2種類がある。なお、別遺構からの出土であるが、163は胴部の張る小型壺で当段階に多く見られる器種、245は搬入品である西遠江の欠山式の高坏脚部である。

弥生時代の石器は第123図7・16の扁平片刃石斧が弥生時代中期後葉～後期前葉、9の砂岩の粗製剥片のスクレイパーが弥生時代後期、12・13の中型の打製土掘具が弥生時代中期後葉～後期、10の叩石が弥生時代後期に該当すると思われる。

古墳時代初頭の土器は、第122図338の折返口縁の壺、第119図249の高坏脚部、第122図339の複合口縁の壺の3点のみで、該当時期の遺構からの出土はない。

古墳時代中～後期の遺物は第116図149～158に示したS K57の6世紀中葉の土器がまとまっている。157・158の須恵器の坏蓋のほか、155の土師器摸倣坏蓋、150・153の短脚高坏、152のくの字状口縁の小型甕、151の底部に籠目のある土師器甕などは当段階の特徴を示している。149はミニチュア土器である。ほかに5世紀前葉では第122図340・341の土師器高坏、342・343の小型丸底壺、5世紀後～末葉

では第120図288の須恵器壺蓋、第121図315の須恵器大型高壺、第120図312・313の土師器高壺、第121図314の土師器長胴甕が見られる。6世紀前～中葉では第120図290・第122図352の須恵器壺蓋、第121図332の須恵器壺身、331の土師器壺、328の土師器高壺、第120図298・第122図344の土師器の短脚高壺、第111図3・第122図345の土師器折返口縁の壺、第121図329・330の直口壺、第120図287・第122図347のくの字状口縁の長胴甕、第122図346の小型甕、第120図306の底部に小穴をもつ土師器甕、後葉では第120図289・304の須恵器壺蓋、第113図55・第119図251・252・第120図305・第121図336の須恵器壺身、第120図307の須恵器甕、第121図326・327の土師器壺、第120図294・299・300・第122図348の土師器長脚高壺、第120図302の直立気味口縁の長胴甕がある。7世紀前葉では第122図354の須恵器壺、第113図72・第120図303・309・第121図325・第122図349～351の土師器高壺、第113図73の土師器長胴甕、第121図321の小型甕、中葉では第111図2の須恵器壺、1の須恵器瓶などがある。各時期少ないもの6世紀前葉～7世紀中葉までまんべんなく出土している。

古代の遺物量は極端に少なく、第121図322の奈良時代と思われる赤彩された土師器の蓋があるのみで、詳細な時期も不明である。

中世前期の山茶碗の数は少なく、12世紀中～前葉では渥美・湖西産の第119図259・260・第120図283、12世紀末葉では東遠江産の第119図258、13世紀前葉の渥美・湖西産山茶碗の第119図261のわずか5点しか図化できなかった。中世後期の戦国時代の土器陶磁器は、第119図262～278に示したS D 7でまとまって出土した。瀬戸製品は大窯3期の262の丸皿、267の摺鉢、270の折縁大皿、地元初山製品は264の丸皿と265の壺底部、志戸呂大窯製品である263の壺、266の折縁皿、268・269の摺鉢、273～277地元産のろくろかわらけ、278の遠江型内耳鍋は16世紀後葉のもの、250・271・272の常滑甕は10期の15世紀後葉と古いもので、耐久財として16世紀まで使われていたと思われる。このほか第116図164の16世紀前葉の中国明の染付碗、第120図282瀬戸大窯1期の端反皿など16世紀前葉のもののほか、16世紀後葉の第121図317の志戸呂大窯製品の天目茶碗、第121図319・323の地元ろくろかわらけ、324の西遠江の非ろくろかわらけなどがある。

江戸時代の土器陶磁器は溝や柱穴から出土しており、17世紀前葉の第120図281・第121図318の瀬戸登窯製品の天目茶碗と316の瓶、第120図308の三河系非ろくろかわらけ、18世紀では第122図355瀬戸登釜製品の天目茶碗、第120図284の常滑壺、286の志戸呂鉢と285の壺がある。

(4) まとめ

縄文時代中期後葉の土器片が確認できた。遺構の存在は不明であるが、石器のなかで小型の土掘具2点が縄文時代中期に該当すると思われる。

弥生時代中期後葉の方形周溝墓の墓域として確認できた。S Z 14の位置は第55次調査区 S Z 5の延長上にあり、同規模の方形周溝墓3基の単位群になることが想定される。

弥生時代後期の竪穴住居2棟が確認できた。後期前半・後半の土器を出土する土坑もあるため、中期では方形周溝墓の墓域、後期では集落域になった場所であることが判明した。

古墳時代後期の竪穴住居3棟を想定したが、かまどは確認していないので竪穴住居として認定するには不確定要素を残す。ただし、土坑や柱穴から一定量の古墳時代中～後期の土器が出土するため、居住域として安定した場所であったと思われる。

中世前期の遺物は少ないので対して、構造は単純であるが戦国時代末期～江戸時代初期の大型掘立柱建物S H 7と付属建物のS H 9の存在を確認できたので、屋敷地があつたことが判明した。大型掘立柱建物の主軸方向は、16世紀後葉の遺物を出土する箱堀のS D 7の主軸方向と一致するため、戦国時代後期には区画溝をもつ屋敷地、江戸時代初期になると堀は機能しなくなり建物だけ残った屋敷地

に変遷したとも考えられる。

江戸時代後期になると土坑と溝が確認できるが遺物量は極端に少なくなるため、付近に屋敷地はなく第7次調査区同様に畠地になっていた場所と思われる。

8. 第64・66次調査区の概要（報告書36第124図～第140図）

(1) はじめに

遺跡の東部にあたる第64次調査の都市計画道路掛之上線と、第66次調査の民地の宅地造成に伴い、平成19年度に実施された調査区である（第64次＝2008報告書23写真図版編、第66次＝2009報告書24写真図版編）。なお、第64次調査の隣接の調査区は、同じ掛之上線内の第18・33次調査区である（第18次＝2003報告書8本文・写真図版編、第33次＝2005報告書14写真図版編・2012報告書31遺構・遺物編1・2013報告書37本文編）。

包含層は調査区全域で搅乱を受けておらず厚さ10～30cm前後の包含層が良好に残っていた。

(2) 遺構

遺構面の削平を受けていないため全域から弥生時代中期後葉～後期、古墳時代後期の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、柱穴群が確認された。第64次調査区では中・近世の区画溝が確認された。

竪穴住居・土坑 竪穴住居と思われる遺構は13棟発見されたが、いずれも掘り込みが浅く遺物量も少ないため確実な時期は分からぬが、S B 10・12・14・15（第64次）・15（第66次）16・45・46には地床炉があるため、弥生時代後期の竪穴と思われる。形態から方形になるS B 11は古墳時代後期の時期になりそうである。小型住居のS B 9からは須恵器が出土しているが、平面形態からみると古墳時代後期の竪穴住居ではないと思われる。隅丸方形のS B 46・47などは、弥生時代後期に該当すると思われる。建て替えはほぼ同じ場所で3回あったS B 15（64次）・B 16、少し位置をずらして2回建て替えられたS B 12・45・46、単独のS B 9・10・14・47がある。なお、S B 10の東側には周溝らしい溝の一部がある。

弥生時代の土坑の内中期後葉はS K 50・151・152、後期前半の土坑はS K 27・30・153～155、後期後半の土坑はS K 25・31・33である。何れも直径1～2mの楕円形や不定形の土坑で、大型の破片を出土した土坑はS K 50・153である。

掘立柱建物 S H21は1間×4間の土間造りで、柱穴の堀方が方形、建物の主軸が少し東向きになるため奈良時代に該当すると考えた。S H10は竪穴住居の可能性もあるが、柱穴の堀方が大きかったので1間×1間の掘立柱建物で、古墳時代後期の掘立柱建物と考えたが、確実な時期は不明である。

方形周溝墓 四隅に陸橋のないS Z 2の溝からは、弥生時代後期後半新段階、古墳時代初頭、中期前半の3時期の土器が出土しているが、方形周溝墓に伴う完形品の土器（第136図113）は、古墳時代初頭に該当する。形態からも四隅は連結するが隅の溝幅は狭くなるため、後期後半新段階～古墳時代初頭の方形周溝墓の特徴を示している。

その他の遺構 弥生時代後期後半の小型土器を出土したP 184は、S B 12に関係した貯蔵穴などの遺構かもしれない。S D 28からは弥生時代後期前半新段階の土器のほか鎌倉時代の山茶碗の破片が出土しているため、中世の区画溝と考えた方がいいだろう。S D 2は隣接の第18次調査区で確認された戦国時代の屋敷地の区画溝である。比較的溝幅の広い東西方向のS D 81は幅が広い溝で、江戸時代後期の幹線溝と思われるが、遺物の出土量は少ないため屋敷地の区画溝とは思えない。溝幅の狭い南北方向のS D 4・21、東西方向のS D 14・84も遺物量は少ないが、江戸時代後期の区画溝の可能性がある。

(3) 遺物

縄文時代の遺物としては第140図6の頁岩剥片と9の石錐について可能性がある。

弥生時代中期後葉の土器はSK50出土の第133図29～第134図55に示したもので、31は櫛描横線文の施された白岩式新段階の典型的な細頸壺である。47は小型の鉢形甕、48・50～54は長胴の台付甕で白岩式新段階に該当する。なお、台付甕脚部の破片を見る限り、この段階の平底甕は少ない。SK151出土の第135図56～62のうち60～62は鉢形甕が主体で、58の壺も三河の瓜郷式土器と見られるため、白岩式でも古段階に該当する土器群かもしれない。

後期前半の土器はSK153出土の第135図71～第136図94に示したもので、壺は81～84・88の細頸で単純口縁の壺と、85の広口壺の肩部がある。高坏は72の鍔状の単純口縁と71の鉢形高坏になるものがある。接合部の文様も74～77の横一条の突帶文と73・78の無文のものがある。89～92の台付甕は口縁は小さく外反するように開く単純口縁で、後期前半の特徴を示す。白岩式と同じような細頸壺を含み、壺や高坏に折返口縁を含まないことから前半でも古段階に属す特徴を示している。第136図95～97に示したSK154の細頸壺や甕も、後期前半古段階の特徴を示している。

後期後半の資料は少ないが、第133図25～28に示したSK33の土器は後期後半新段階となる。25・26の折返口縁下端に指頭圧痕があり、端部に横方向の押引文、肩部に有段羽状刺突文の施された壺が当段階の指標となる。27・28は西遠江からの搬入品で、欠山式の高坏である。SZ2出土の第136図113は受口傾向の単純口縁の壺で形態は後期後半新段階の特徴を示すが、肩部文様がないので古墳時代初頭に降る可能性が高い。112の複合口縁の壺は極めて装飾性に富むもので、西遠江からの搬入品で古墳時代初頭の壺と思われる。

弥生時代の石器は第139図8の扁平片刃石斧と7の砂岩の粗製剥片のスクレイパーは後期の堅穴住居、10の磨製型石器は後期前半の土坑から出土している。

SZ2南溝上層からは第137図120～140に示した古墳時代中期前葉の見性寺II-2式の土器片がまとまって出土した。SZ2の周溝中に土坑などの遺構があったものと思われる。120～123の新しい特徴を示す長脚高坏、124～129は見性寺I式よりの系譜で脚部中央が膨らむ高坏である。131は複合口縁の広口壺、132は埴型の広口壺、133は受口口縁の広口壺でいずれも見性寺II-2式の特徴を示している。139・140は小型丸底埴、138は球形胴の甕と見られる。

古墳時代後期の土器は少ない。6世紀中～後葉では第133図3の須恵器坏身、16の土師器坏、7世紀前～中葉では第133図17の須恵器壺蓋、第138図153の須恵器瓶の底、169の土師器坏しか出土しておらず、古墳時代後期の遺構の数が少ないと付合する。

第135図63の赤彩された土師器の短脚は、奈良時代前半に見られる高盤と見られる。平安時代の土器は、第136図105の灰釉陶器1点のみである。土製品としては第138図5の土錐は江戸時代後期の溝から出土しているが、形態は古墳時代後期か中世のものである。

中世の土器も少なく、図化できたのは前期の山茶碗は第138図157の湖西・渥美産の小碗、第137図151・第138図158の知多産山茶碗と152の片口鉢の4点である。後期の戦国時代も第136図104の瀬戸大窯1期の端反皿、106の瀬戸大窯1～2期の摺鉢、107の遠江型内耳鍋の3点である。

江戸時代で図示できる土器陶磁器はなかった。

第140図1～4は第66次調査区の南側、駐車場の地境に設けられた擁壁設置工事の立会調査で包含層よりの出土した土器で出土遺構は判明しない。1は小型壺、2も折返口縁の壺で弥生時代後期後半古段階、3の土師器長胴甕と4の須恵器坏蓋は6世紀末葉に該当する土器である。

(4) まとめ

本調査区は弥生時代中～後期と古墳時代後期の集落域であることが判明した。遺構の数と遺物の出土量は集落の中心域としては少なく、とくに古墳時代後期の竪穴住居は1棟のみであった。方形周溝墓は古墳時代初頭1基が確認されたのみで、弥生時代中期後葉の墓域は及んでいないことが判明した。

奈良時代の遺構はS H21の1棟のみが確認された。郡衙の建物と主軸方向が一致するが、建物規模は貧弱である。正倉域外の施設・建物がどのように展開していたのか課題として残った。

中世の遺構・遺物は少ないが、SD2は戦国時代の屋敷地の区画溝として認識できるものである。

江戸時代の遺物量は少ないため、屋敷地があったとは思えないが、溝幅が広い区画溝が確認できることから、SD81は排水用の主要幹線溝であったと考えられる。また、SD14・84などの東西溝と交差する場所は、溝同士が切り合わないので畠地割に関係していることが分かる配置を示す。

9. 第65次調査区の概要（報告書36第141図～第149図）

(1) はじめに

第52次調査区の西側、都市計画道路西通掛之上線の東端部分にあたり、平成19年度に実施された調査区である。（2008報告書23写真図版編）なお、第52次調査区は平成18年度に実施され報告済みである（2007報告書20写真図版編、2013報告書34遺構・遺物編2、2014報告書36本文編）。西端の未調査区は仮設の下水道管が埋設されていたため、安全に配慮したためである。

包含層の保存状況は良く、全域で厚さ30cmの包含層が確認できた。

(2) 遺構

狭い調査区であったにもかかわらず主な遺構は、弥生時代中期後葉～後期の竪穴住居と土坑、古墳時代後期の竪穴住居が密集して検出され、重要遺構である奈良時代の区画溝も確認された。

竪穴住居 SB6・11・12・14の弥生時代中～後期に該当する楕円ないし隅丸方形の竪穴住居4棟、SB10・13のかまどをもつ古墳時代後期の竪穴住居2棟、合計6棟が確認できた。SB6・11・12は地床炉をもち、SB6・11は住居中央より北より、SB12は壁に偏った場所にあった。このうちSB11と12は切り合い関係にあり、SB12の方が古い。SB11はほぼ同じ位置で壁溝より最低2回、SB12は1回の建て替えが確認でき、いずれも拡張したと見られる。出土遺物はSB11・12よりは白岩式新段階の土器が出土している。SB14からは後期後半の土器片が僅かに出土している。SB6についても時期の分かる遺物は出土していないが、後期の竪穴住居と思われる。

SB10は北壁に保存のいいかまど、南壁近くに貯蔵穴をもつ当遺跡では典型的な古墳時代後期の竪穴住居である。SB13も北壁部分のみの検出に留まったが、かまどの保存状況は良かった。当遺跡のかまどの大部分は竪穴住居廃棄の際にかまども破壊されるが、SB10・13はかまどを構築するための白色粘土が残り焚口の状況も判明した。SB10の貯蔵穴からは6世紀中葉の須恵器が出土しているため、遠江のかまどとしては比較的古い時期のものである。

区画溝 SD42は奈良時代の郡衙正倉建物群と主軸方向が一致する溝である。溝幅も3mを測り、第51次調査区で確認された区画溝の延長上にあるため、郡衙正倉II期の東辺を区画する溝と考えた。底に段差が認められるので、最低1回の改修がなされていると思われる。遺物は古墳時代後期の土器ばかりで、奈良時代のものは出土していない。

その他の遺構 弥生時代の土坑では中期中葉の嶺田式土器を出土したSK50、中期後葉の白岩式新段階の土器を出土したSK59があり、竪穴住居と共に中期中～後葉の居住域であることが分かる。SK60・61についても遺物量が僅かで時期不明であるが、埋土から弥生時代中～後期の時期と判断した。

(3) 遺物

第147図54～第148図86に示した S K 50の土器は、弥生時代中期中葉の一括資料である。57・58の壺は肩部に連続押引文、頸部に太い沈線文の施された典型的な嶺田式の細頸壺である。54～56は西遠江以西の瓜郷式の細頸壺である。63・65・68～71は条痕が施された嶺田式の鉢形甕で、73・75・76・81～83・85の条痕が施された低い台の存在より、平底甕だけでなく鉢形台付甕がかなりの割合で存在していたことが分かる。第148図87～95に示した S K 59出土の土器は、白岩式新段階の一括資料である。87・91の外反する単純口縁の細頸壺と、89の受口口縁になる広口壺、95の甕は嶺田式の混入品である。第146図8～第147図51は S B 11・12出土の土器で、混入品はあるが17・39・40・47などの単純口縁の細頸壺を見る限り、肩部はなだらかに開くため白岩式新段階に属すると思われる。50は筒状になる片口の小型鉢である。

弥生時代の土製品としては、第149図1～5の焼成を受けた粘土塊がある。1～5の粘土塊は弥生時代の土坑から出土することが多いが、用途は不明である。石器は第149図8は白岩式新段階の S B 12より柱状片刃石斧、9の摩耗のある板状の礫が出土している

古墳時代後期の土器としてまとまっているのは、第146図2～7に示した S B 10の貯蔵穴から出土した6世紀前～中葉の土器群である。3は土師器摸倣坏身、4・5は須恵器坏蓋、6・7は須恵器坏身で、6だけ前葉となるので、伝世した須恵器であろうか。S B 11の混入品である32は6世紀後半の坏身、33は7世紀後半の須恵器坏身である。

奈良時代の溝 S D 4 から第149図103～105の6世紀前～中葉の土師器の短脚高坏、106・107の6世紀後～末葉の土師器の長脚高坏、108の6世紀後葉の土師器の長胴甕、第149図110・111・112の7世紀中葉の須恵器高坏・坏蓋・長頸瓶、P 43からも第149図117～120に示した6世紀中葉の土師器の短脚高坏、模倣坏身、須恵器坏蓋が出土している。第149図121は6世紀の壺型のミニチュア土器、122・123は6世紀前葉の土師器の折返口縁壺と短脚高坏、125は6世紀中葉の須恵器坏身である。総じて S B 10と同じ6世紀前～中葉の土器が多い。

奈良時代の土器はないが、第149図128・129は平安時代後期の地元清ヶ谷産灰釉陶器碗である。

(4) まとめ

竪穴住居は弥生時代中期後葉の2棟、古墳時代後期の竪穴住居2棟が発見された。弥生時代中期中葉の土坑 S K 50もあり、弥生時代の集落の始まりを知るうえでの資料となった。後期の竪穴住居は時期不詳ながら2棟は存在していたと見られる。

古墳時代後期の竪穴住居のかまどの保存状況は良く、かまど破壊祭祀はなかったと思われる。時期も6世紀中葉と古い事例となる。

奈良時代の郡衙正倉域II期になる東辺区画溝 S D 42が確認できた。これで、第30次調査区で確認された S D 9 も正倉域II期の東辺区画溝になる可能性が高くなった。

中世～江戸時代後期遺構・遺物は確認されなかった。

10. 第67・70次調査区の概要（報告書36第150図～第168図）

(1) はじめに

遺跡の南東部にあたる場所で、何れの調査区も都市区画道路の田端掛之上線に伴う調査である。ただし、第70次調査は民地の換地時期の関係で、第49次調査区の北東と南西に接した狭い調査区2箇所に分かれて平成20年度に実施した（第67次＝2008報告書23写真図版編、第70次＝2009報告書26写真図版編、第49次＝2007報告書20写真図版編、2013報告書34遺構・遺物編2、2014報告書36本文編）。平

成19年度に実施した第67次調査は、第49次調査区の北側にあたるが、東側の歩道部分は民地の換地計画の関係で後日の調査となつた。

包含層の保存状況は良く、全域に厚さ10~30cmの包含層が存在した。とくに南西部分が最も厚い包含層が存在していた。

(2) 遺構

主な遺構は弥生時代中~後期の竪穴住居9棟と土坑が密集し、古墳時代初頭の方形周溝墓と奈良時代の大型掘立柱建物も確認できた。

竪穴住居・土坑 竪穴住居のなかにかまどをもつものはないので、古墳時代後期の竪穴住居はなかつた。平面形態で分けると、楕円形のS B50・51・52（第67次と第70次）・53（第67次と第70次）、隅丸方形のS B32・48・49に分けられる。このうち時期判定のできそうな遺物を出土しているのはS B50であるが、中期後葉と後期後半の2時期の土器が混在している。この住居は壁溝を見る限り、最低4回の建て替えが行われ、しかも楕円形という平面形態を考えると中期後葉の時期になりそうである。なお、S B52（第70次）はほぼ同じ位置で5回、S B53（第70次）でも3回の建て替えが認められた。これらの住居も平面形態と建て替え回数の多さから、中期後葉~後期前半になる可能性が高い。また、S B51からは後期前半の土器が出土しているため、楕円形住居の時期は中期後葉~後期前半の時期幅をもつと考えられる。隅丸方形の竪穴住居のうちS B32からは僅かな後期前半の土器片が出土し、建て替えも3回ある。その他の隅丸方形の竪穴住居は建て替えが少ないものは、後期後半に多い傾向がある。地床炉はS B52・53（第70次）以外ほとんどの竪穴住居に伴い、住居中央より北よりあるのはS B32・48ぐらいで、S B50・51・53（第67次）は壁際か柱近くという特異な場所にあり、一定の傾向は認めがたい。また、多数の建て替えのあるS B52（第67・70次）・53（第70次）に、炉がないことも注目される。炉を破壊して焼土をどこかに持ち出すことをしたのだろうか。

弥生時代の土坑のうちS K166・168より中期後葉、S K156・158~161・163・165・169・172より後期前半新段階の土器が出土しており、後期後半のものはなかつた。竪穴住居の時期と同じように、中期後葉と後期前半段階のものが多い傾向は一致する。形態は楕円形、方形、不定形など様々で、立ち上がりも緩く、大きさも2m以内のものがほとんどで、ゴミ穴としての用途が考えられる。

掘立柱建物・溝 奈良時代の掘立柱建物は、第49次調査区で見つかったS H3の北側柱列を確認することができた。判明した範囲では、3間×5間以上の土間造り建物になると判明した。正倉院西倉庫群の3間×9間の土間造りのS H1に匹敵する規模の建物で、正倉院外から初めて確認された大型掘立柱建物である。建物の主軸方向は東に少し触れるが、正倉院の掘立柱建物よりやや北向き傾向にある。柱穴掘方の形状は梁行では正方形のなすのに対して、桁行きは長方形で主軸方向に直行するように配置している。ちなみに、S H3の柱間寸法は2.4mで白鳳8尺となり、S H1の柱間寸法は2.7mで白鳳9尺となり、S H1の規格よりS H3のほうが小さい。また、正倉院の総柱の高床倉庫の柱間は、2.1mの白鳳7尺と規格化されている。時期は柱穴内より第158図25の8世紀初頭になる須恵器坏蓋が出土しているので、早くても8世紀前葉に建てられていたといえ、正倉院で大型の倉庫が建てられた時期とも符合するため、I期の建物と考えたい。

この建物の北側には、排水用の溝らしい遺構を確認したが、雨落ち溝のように建物を全周するものではない。弥生時代後期の方形周溝墓であるS Z3南溝と重複していたが、溝底で区別がついた。幅1.8mを測る直線的に延びた溝で、深さ40cmを測る深い溝である。出土土器の中で奈良時代に限り最も新しいものは第162図159~171に示した8世紀前葉のもので、S H3の建築時期とあってくる。ただし、8世紀後葉の土器は出土していないので、8世紀後葉には廃絶していた可能性が指摘される。

方形周溝墓 一辺12mを測るやや大型の方形周溝墓S Z 3が確認された。2隅にしか土橋はなく、周溝がつながる場所も溝幅が狭くなる傾向が認められ、後期後半～古墳時代初頭の形態となる特徴を示す。当遺跡での単独方形周溝墓は古墳時代初頭のものが多く、周溝からは後期後半新段階～古墳時代初頭の土器が出土しているが、第160図113などの土器から古墳時代初頭の方形周溝墓としておきたい。墳丘が削平されていたのか、主体部は見つからなかった。

その他の遺構 S K167は溝状の細長い土坑で、7世紀中葉の須恵器が出土し、S Z 3と重複しているため、S Z 3の墳丘削平時期が古墳時代後期にあったことが分かる。他の調査区でも弥生時代～古墳時代初頭の方形周溝墓は、概ね古墳時代後期に削平された状況と一致する。

(3) 遺物

縄文時代の遺物としては第167図11の黒曜石のスクレイパーが該当すると思われる。

白岩式新段階の土器はS B50出土の第158図9～12、S K166・168出土の第165図285・586・288～299がある。9は受口口縁の広口壺、10・11は肩部に櫛描横線文が施された細頸壺と思われる。285は鉢型甕で286の低い台がつく台付甕になるかもしれない。289は西洋梨型の胴部の細頸壺と、291は受口口縁の広口壺の肩部で新段階のもの、288は肩部に向かって開く頸部の細頸壺で白岩式古段階、290・292の連続押引文の壺、293～295・297の条痕が施され、口縁部に刻目をもつ甕は嶺田式に該当する。298・299は白岩式段階の台付甕の脚と思われる。第158図27は西遠江の瓜郷式の細頸壺である。

後期前半新段階の土器はS K158～161・163・165・172出土の第163図193～第164図240、第164図267～第165図284、第165図303～318に示した土器がまとまっている。193の大きくラッパ状に開く単純口縁の壺、205・308・309外反する単純口縁の壺のほか、203・204・215の折返口縁の壺、206・281の受口口縁の広口壺も含む。肩部文様は193・195の櫛描横線文、209の縦方向の櫛描文のほか、208・216・273の横一条の刺突文が古い特徴である。高壺は225・226の鍔状の単純口縁で、197～202・213・214・227～230・269・270・280・306・307の壺と脚の接合部に横一条の突帯文の施されたものが古い特徴になる、267・268・303の小さな折返口縁は新しい特徴になる。306は小型高壺の脚で珍しいサイズのものである。脚端部は231・306のように屈曲のあるものと、屈曲がなく開くものの2種類があるが、後者は鉢形高壺が多い。240は口縁が垂直に立ち上がる鉢、284はコップ状の小型鉢で珍しい。甕は211・218・221・235・236・314・315・318の短く外反する口縁の台付甕が主体である。276の折返口縁の甕は当段階では珍しく、新しい特徴と見られる。

後期後半古段階の土器はS K162出土の第164図241～266がある。247・248の単純口縁の壺は、前半新段階の193と比較すると、さらに大きくラッパ状に開いている。249の折返口縁の壺の折返部も大きくなっている。頸部文様のうち252の横一条突帯文は古く、251の横三条刺突文は新しい特徴である。高壺も243の接合部文様である横一条突帯文は古く、241・242の横五条刺突文と横二条突帯文は新しい特徴である。

後期後半新段階の土器はS Z 3出土の第158図30～第161図143がある。壺・高壺の文様である有段羽状刺突文の施された37・39・41・46・99・100・111・112の壺・高壺は当段階の指標となる。また、有段にはならないが50・72・114の3段の羽状刺突文の施された壺についても当段階の特徴になる。折返口縁の壺は33・42・45・47・105・107のように、口縁端部に横方向の押引文、折返下端に段がつくようになるものが新しい特徴である。内湾した単純口縁壺も、31・32・46・88のようにさらに大きく外に開くようになり、32のように端部に縄文が施されるものもある。なお、折返口縁端部の横方向の押引文は、30のような高壺の文様としても採用されている。高壺のうち40の外に開く脚は西遠江の伊場式、70の内湾する脚は欠山式に該当し、搬入品と思われる。甕はくの字状口縁になる54・55があ

るが数は少ない。76は小型の台付甕にも見えるが、内面ミガキ調整なので鉢であろう。また、55の刻目のない台付甕、88の内湾口縁の壺、113の肩部無紋の壺などは古墳時代初頭に降る可能性が高い。

弥生時代の土製品としては第166図337の後期の壺蓋は三河以西で見られ、当地では珍しい。石器は第167図9の柱状片刃石斧、8の砂岩の粗製剥片スクレイパーは中期後葉、13の伐採斧の破片、10・14の叩石、12のスクレイパーは後期、16のスクレイパーも弥生時代の石器と見られる。

古墳時代中期のうち5世紀前葉の土器は、S Z 3 西溝上層出土の第160図81～86が該当し、何れも見性寺II-1式で、81の脚部中央が膨らむ高壺、83のくの字口縁で球形胴の広口壺、86の壺型壺などがある。S D 86からは第161図155の5世紀末葉の須恵器壺蓋が出土している。

古墳時代後期では6世紀前～中葉の第161図147の土師器高壺、148・150の土師器短脚高壺、第159図65・第161図151の折返口縁の壺、66の広口壺、149のくの字口縁の長胴甕、6世紀後～末葉の第162図161の須恵器壺身、第161図152の土師器壺、153の土師器高壺、第166図338の土師器瓶、7世紀では第161図156～158・第165図287の須恵器壺蓋、第162図162の須恵器壺身、176の須恵器瓶、173の須恵器鉢、321の須恵器の平瓶、第162図166・167の須恵器の長頸瓶、172の須恵器壺、第161図154の土師器高壺がある。第164図1・4は古墳時代後期の土製支脚、第168図11・12の金属用砥石は古墳時代後期～奈良時代に該当すると思われる。

奈良時代の須恵器はS D 86より、第158図25・第162図159・160の壺蓋、163・164・168・170の壺身、165・169の壺が出土しており、いずれも8世紀初頭～前葉に該当する。第158図22・第166図319は清ヶ谷産灰釉陶器碗である。

中世は前期では12世紀末葉の第162図177の東遠江産片口鉢、13世紀前葉の第166図339は渥美・湖西産山茶碗、第159図67の渥美・湖西産の山皿、第166図340の知多産山茶碗の僅か4点しか図示できなかつた。中世後期は第162図184・第166図320の古瀬戸後期の皿の2点のみしか図化できなかつた。

(4) まとめ

弥生時代中期後葉～後期の竪穴住居が、密集して確認できたことから、居住域としての中心地であることが分かる。古墳時代初頭になる方形周溝墓S Z 3が単独で築かれている。後期後半新段階の方形周溝墓は遺跡の西部地区では2～3基の単位群を形成するが、東部地区の居住域内部に築かれる古墳時代初頭の方形周溝墓は単独で存在し、S Z 3も単独で存在する。

正倉域外で初めて発見された大型掘立柱建物としてS H 3が確認された。この建物は、正倉西倉庫群を構成する土間造り倉庫S H 1に匹敵する大型建物である。周辺部に大型掘立柱建物はないため、単独で存在するため用途は不明である。正倉を管理する建物であろうか。

中世の遺物は少なく、明確な遺構もない。江戸時代の遺物については図化できるものはなかつた。

11. 第68調査区の概要（報告書36第166図～第187図）

(1) はじめに

遺跡の北西地区、第2・17次調査区（第2次＝袋井市教育委員会1983、第17次＝2003報告書6本文・写真図版編）の東隣にあたり、民地の宅地造成と区画道路5・3号線を併せた調査区で、平成20年度に調査を実施した（2009報告書25写真図版編）。また、調査区北端では第26次調査区（2004報告書9写真図版編、2012報告書32遺構・遺物図版編2、2014報告書37本文編）、南端は第22・54次調査区（第22次＝2004報告書9写真図版編、2012報告書32遺構・遺物図版編2、2014報告書37本文編、第54次＝2007報告書19写真図版編、2013報告書34遺構・遺物図版編2、2014報告書37本文編）とも接している。

包含層は宅地として利用されていた場所の割には、保存状況は良くなかったが、調査区南西端部分に限って厚さ20～30cmほどが残っていた。

(2) 遺構

主な遺構は弥生時代の竪穴住居1棟・方形周溝墓2基、古墳時代後期の竪穴住居2棟・掘立柱建物5棟、奈良時代の区画溝である。

竪穴住居 竪穴住居であるS B 9は、2箇所の地床炉のまわりの柱穴配列で竪穴住居と認定した。出土遺物からは時期は分からぬが、弥生時代後期の竪穴住居とみたい。

竪穴住居のS B 2・8は平面形態は方形で、北壁にかまど、南壁近くに貯蔵穴のある当遺跡における典型的な古墳時代後期の竪穴住居である。遺物はS B 2からは7世紀初頭の土師器、S B 8からは6世紀中葉と6世紀後葉の2時期の土師器と須恵器が出土している。S B 2からは3時期の壁溝と貯蔵穴が確認できるので、最低2回の建て替えがあったと思われる。かまどはほとんど破壊されている。S B 8出土の遺物は2時期あるが、壁溝は1時期しか確認できない。かまどの保存状況はいいので、かまどの破壊祭祀はなかったと見たい。中央の貯蔵穴と思われる土坑からは5世紀末葉の須恵器がでているので、この土坑はS B 8に伴う貯蔵穴ではない。S B 8以前に5世紀末葉の竪穴住居があった可能性がある。

掘立柱建物 柱穴の堀方が大きいS H 5を除いた、S H 6～9は古墳時代後期の竪穴住居とほぼ主軸方向が同じなので、古墳時代後期の掘立柱建物と考えた。小型で間口2間×2間の土間造りであるS H 6・8・9と、中型で2間×4間土間造りであるS H 7の2種類に分けられる。重複するS H 8を除いたS H 6・7・8と竪穴住居S B 2などが組み合わせになる可能性がある。S H 5については柱穴の堀方を見ると奈良時代の掘立柱建物に類似するが、主軸方向は西向となり異なるため古墳時代後期の時期としておきたい。

方形周溝墓 S Z 1は西溝が第2次調査区、北と東溝が第26次調査区で確認され、今回の第68次調査区では南溝が確認でき、四隅に陸橋をもつ中期後葉の典型的な方形周溝墓であることが分かった。遺物は西溝より白岩式新段階の壺・台付甕が出土している。方台部で12mを測る大型の部類に属し、単独で築かれ単位群を形成しない。主軸方向も北向きで、西地区に展開する単位群形成する方形周溝墓とは異なる。S Z 6は北と東溝は第22次調査区、南溝は第54次調査区、本調査区では西溝が確認でき、四隅に陸橋をもつ中期の方形周溝墓であることがわかった。時期も北溝と今回調査の西溝からも中期中葉の嶺田式の土器が出土し、当遺跡最古の方形周溝墓の一つであることが追認された。主軸も東に傾き西部地区の方形周溝墓群の主軸方向と一致し、西溝が第22次調査区S Z 5の東溝と共有し、単位群を形成している。

土坑 弥生時代の土坑はS K 63・68の2基で、S K 68からは後期後半新段階の土器が出土している。何れも浅い楕円形の土坑である。S K 64からは6世紀前～中葉の土器が出土しているが、埋土は江戸時代後期である。S K 72でも16世紀後葉の陶器が出土しているが、埋土は江戸時代後期である。江戸時代後期の土坑はS K 43・62・65・70・71・73・74で、なかでもS K 65・70からは大量の土器・陶磁器・瓦が出土している。江戸時代後期の土坑はS K 62・64・70・71・74の深いものと、S K 65・73のように浅いものがあり、前者は水溜用、後者はゴミ穴と思われる。S K 70は水溜用として廃棄された後に、ゴミが大量に廃棄されたと思われる。S K 74にはくずれた壁面を修復した石積がある。

区画溝 S D41は奈良時代の郡衙正倉建物群と主軸方向が直交方向で同一になる溝である。溝幅も3mを測り、第51次西・第53次調査区で確認された区画溝の延長上にあるため、郡衙正倉II期の北辺区画溝と考えられた。遺物は古墳時代後期と奈良時代の土器が出土している。

その他の遺構 幅の狭い区画のためと思われる溝が、調査区北端と中央で東西方向、東端では南北方向で多数確認できた。このうち S D10からは弥生時代中期後葉、S D25からは古墳時代初頭、S D40からは戦国時代の土器・陶磁器が出土している。S D25は古墳時代初頭の祭祀空間ないし豪族居館の施設と思われる方形区画溝の一部である。S D6・8・9・10・43～45・47・48からは江戸時代後期の土器・陶磁器が出土している。江戸時代後期の溝は南北と東西方向にまとまって配置されていることと、溝と共に多数の遺物を出土する土坑もあることから屋敷地の区画溝と見て間違いない。

(3) 遺物

弥生時代中期の遺物としては、第178図36に示した S Z 6 西溝出土の土器、第184図182の S D10 出土の白岩式新段階の細頸壺がある。36は頸部に渦巻文沈線文が施された中葉の嶺田式の細頸壺で、34・35・37～40の土器は弥生時代後期後半新段階～古墳時代初頭の混入品である。ほかに後期後半新段階の土器は、第181図117～119、第184図184・第186図230の折返口縁壺がある程度で少ない。

古墳時代初頭の土器は第178図40の小型埴、第184図183の S 字甕の台、第184図227の脚の裾が広がる小型高壺がある。

5世紀の須恵器としては、中葉の第185図194の壺身、197・第186図240の壺、末葉の第178図32・33 の壺蓋と壺がある。

古墳時代後期では第177図1～第178図29に示した S B 2・8、S D41、柱穴などから、6世前～中葉では第179図50の須恵器壺蓋、第186図242の須恵器壺身、16・第186図238の土師器模倣壺蓋、17～20・第179図48・第184図188の土師器壺、第185図191の土師器高壺、1・21・第179図49・第184図189・190・第185図193の土師器短脚高壺、24の土師器鉢、23の土師器脚付埴、第185図192の土師器直口壺、26の土師器広口壺、6世紀後～末葉では第178図29・195・第186図229の須恵器壺蓋、12の須恵器壺身、第185図203の須恵器壺、第186図236の須恵器甕、15・27の土師器長胴甕、7世紀初～中葉では第186図243の2段透高壺、4の土師器高壺、2・3の土師器鉢、5～8・11・28の土師器長胴甕、10の土師器瓶が出土している。

古代の土器は、S D41出土の第185図196の須恵器壺蓋、199の須恵器長頸瓶、198の尾張産長頸瓶のほか、第178図30の須恵器壺身、第177図14の10世紀後葉の地元清ヶ谷産灰釉陶器碗があり、数は少ない。

中世前期の土器は第183図157の渥美・湖西産山茶碗1点、156の渥美・湖西産壺1点のみが図化できた。中世後期の戦国時代では第183図135の大窯3～4期になる天目茶碗、第154図185の小型天目茶碗とこちらも数少ない。

江戸時代後期の土器・陶磁器は S K 65などの土坑、S D 6などの溝から出土している。まとまっている S K 65の第179図51～第180図101に示した陶磁器を見ると、肥前産磁器は21点、瀬戸産陶器は20点、地元志戸呂産陶器は3点である。特徴として肥前産磁器は碗類が17点、瀬戸産の碗類は3点、摺鉢7点、志戸呂産摺鉢2点となるため、碗は肥前産、それ以外は瀬戸産・志戸呂産で占められていることが分かる。第180図102～第181図116、第182図124・128の棟瓦は瓦当三つ巴、軒平文様は中央花、二反転唐草文になるものがほとんどで、当遺跡では19世紀に一般的に普及しているものである。109は第182図128の中央菊紋になる可能性がある。第183図158は明治の三重県萬古焼製品と思われる。

第186図3の瓦転用砥石、4の鉄釘、5・7・8の鉄鎌などいずれも江戸時代後期に属するものである。石器のうち第187図9の抹茶用石臼、10・11の砥石も江戸時代後期の時期になるものである。

(4) まとめ

弥生時代の遺構は中期中～後葉の方形周溝墓2基があり、そのうち S Z 6 は中葉に遡る。中葉にな

る当遺跡最古の方形周溝墓は第12次調査S Z 5、第48次調査S Z 15、第56次調査S Z 12と合わせると4基めとなる。S Z 1は、単独で存在する中期後葉の大型方形周溝墓で、単位群を形成する方形周溝墓とは異なる被葬者を考えた方がいいのかもしれない。後期の遺構は希薄で、遺物も少ないため主要な居住域からは外れると思われる。

当調査区でも古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物が組み合せとなり、建物の大きさから竪穴住居ではなくて掘立柱建物のS H 7が中心建物になると思われる。そうすると、中心建物となる掘立柱建物1棟、納屋と見られる小型の掘立柱建物2棟、台所の竪穴住居1棟の組み合せが想定される。

古代については郡衙正倉域の北辺区画溝が、第51次西・第53次調査区につづいて確認された。北辺区画溝については西辺とは異なり改修の痕跡はないため、同一の場所で1期と2期の溝が存在していたと考えられる。溝出土の須恵器からは、8世紀前葉以降に成立していたとしかいえない。

江戸時代の区画溝が計画的に配置され、区画内の土坑からも18世紀後葉～19世紀前葉の土器・陶磁器が出土するため、屋敷地があったと思われる。また、19世紀前葉には棧瓦が出土するため、土倉などの瓦葺建物があった可能性がある。

12. 第69次調査区の概要（報告書36第188図～第190図）

(1) はじめに

本調査区は遺跡の東南部の端にあたる場所の調査区で、平成20年度に民地の宅地造成と区画道路13号線に伴い実施された（2009報告書24写真図版編）。なお区画道路13号線部分の西隣にあたる第49次調査区は、平成18年度（2007報告書20写真図版編、2013報告書34遺構・遺物図版編2、2014報告書37本文編、）に実施された調査区である。

包含層は最近の宅地造成のためか、攪乱が各所に入っていたが、区画道路13号線調査区では厚さが10～30cmもある場所が残っていた。

(2) 遺構

主な遺構は弥生時代後期の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物であるが、遺構の密度は少ない。

竪穴住居 弥生時代後期の竪穴住居2棟が確認された。S B 18は狭い調査区内での検出であるため、平面形態は不明であるが、時期は後期の土器片が少量出土しているにすぎない。S B 20も住居の堀方が検出されたにすぎず、平面形態、柱穴配列も分からぬ。ただし、出土土器から見ると後期後半古段階に該当する。

掘立柱建物 掘立柱建物はS H22の1棟が確認され、柱穴の堀方は正方形で、復元すると3間×4間以上の土間造り建物になると思われる。主軸方向も東に少し触れるので、正倉域の建物と同じ主軸方向となることから、奈良時代の建物と考えた。

その他の遺構 P 25もS H22の柱穴と同じく奈良時代の掘立柱建物の柱穴と思われるが、調査区端のため掘立柱建物の柱穴になるかは分からなかった。S D31・32は南北方向の江戸時代後期の溝であるが、遺物は出土していないので屋敷地の区画溝にはならない。

(3) 遺物

遺物は少なく、僅かに第190図4～12に示したS B 20より出土した弥生時代後期後半古段階の土器がまとまっている。高壺は4の脚下端が外に開くようになり、5・6の口縁の折返部が四角から台形状に変化したもの、7のように下ぶくれではあるが胴が張ってきた壺がある。9の短く外反する口縁の台付甕は前半段階の特徴を示す。1の叩石は弥生時代後期に属するが、2の黒曜石は縄文時代になる可能性がある。

S H22のP 1からは、14・15の6世紀末葉の土師器長脚高壺と広口壺が出土しいてる。

(4) まとめ

弥生時代後期の居住域であることが分かったが、集落域の南東端になるせいか極端に遺構数は少ない。古墳時代後期の遺構は発見されなかつたが、遺物は出土しているので居住域と見てもいいだろう。

奈良時代の遺構としては土間造りの掘立柱建物が発見され、郡衙正倉域より南東地区の状況が判明した。建物の規模としては正倉域内よりも明らかに小さいが、第49・67次調査S H 3と共に郡衙正倉域より東部域に関係した何らかの施設に伴う建物であることは間違いない。

13. 第71・78次調査区の概要（報告書34第120図～第137図）

(1) はじめに

本調査区は遺跡の中央の南端にあたり、第30・31次調査と隣接する調査区となっている。第71・78次調査は平成20年度に民地の宅地造成と、南端に区画道路12号線の道路拡張部分を含んで実施された（2009報告書24写真図版編）。隣接する第30・31次調査は平成16年度の調査で報告済である（第30次＝2005報告書13写真図版編、第31次＝2005報告書12写真図版編、第30・31次＝2012報告書12遺構・遺物編2、2014報告書37本文編）。

包含層は建物基礎のために遺構面の一部が破壊されていたが、それ以外は保存状況がよく調査区全面で20～30cmの包含層が確認できた。

(2) 遺構

竪穴住居 弥生時代の竪穴住居は平面形態で見ると、楕円形のS B15・20・23a・26と、隅丸方形のS B2・11・23b・24・25・27・28がある。S B2・3とS B23では楕円形から隅丸方形に変化したことが確認されている。このうち土器が出土したものあげると、後期前半新段階の土器が出土したS B12・23・28のみで、しかも小破片であるため、土器からは大方の竪穴住居は時期不詳であるが、平面形態からは前者が後期前半、後者は後期後半に属する可能性が高い。S B23a・bでは4時期の壁溝があり最低3回の建て替え、S B25からは3時期の壁溝があり最低2回の建て替え、S B24・27からは2時期の壁溝があり最低1回の建て替え、S B20では2時期の柱穴があり最低1回の建て替えがあったと思われる。改築の多いS B23・36は弥生時代中期後葉～後期前半の竪穴住居の特徴となる。炉跡はS B2・24からは2箇所の地床炉、S B20・23a・b・26からは1箇所の地床炉が確認された。

方形のS B12～13・16～18・21は古墳時代後期に該当するが、出土土器から見るとS B17は6世紀前～中葉と6世紀末葉、S B18は6世紀末葉、S B13は7世紀初頭となるが、遺物量も少ないとめ確実な時期は不明である。当遺跡における古墳時代後期の竪穴住居では、北壁にかまど南壁中央付近に貯蔵穴があり、S B13・17・18では両方、S B21では貯蔵穴のみが確認された。S B17のかまどの保存状況はいいが、S B13・18についてはかまどの保存は悪いのでかまどの破壊祭祀が行われていた可能性がある。S B16・21についてもかまどは検出されなかつたが、破壊祭祀があつた可能性がある。S B18は壁溝から2時期、最低1回の建て替えを確認できるが、古墳時代後期の竪穴住居に改築のあるものは珍しい。

掘立柱建物 四本柱の建物は竪穴住居の柱穴よりも大きなものを掘立柱建物と認定した。柱穴の堀方が円形になるS H4・6～8は古墳時代後期、方形になるS H5は奈良時代の掘立柱建物と考えた。S H4は2間×2間の土間造りの建物であるが、間口が1.4mと狭いので束柱が礎石になる高床倉庫になるかもしれない。1間×1間建物は納屋程度の建物と思われる。詳細な時期は分からぬが、主軸方向はS B17と類似するため、6世紀前～中葉か末葉になるとを考えたい。

S H 5 は 3 間 × 3 間 の 土間造り 建物 であるが、 間口寸法 1.8m 、 白鳳 6 尺 と 狹い ので、 第 3 ・ 36 ・ 46 次 調査 で 確認 さ れた S H 1 ・ 3 は 東柱 を 磁石 と し た と 推定 さ れる 高床倉庫 と 同じく、 総柱建物 に なる 可能性 が ある。 ちなみに S H 1 ・ 3 の 建物 は 3 間 × 4 間 、 間口寸法 2.1m 、 白鳳 7 尺 と なる の に 対し、 S H 5 は 白鳳 4.5 尺 で、 正倉域 の 高床倉庫 の 規格 と は かなり 小規模 と なる。

土坑 弥生時代の土器を出土した土坑のうち中期後葉は S K 30 ・ 31 ・ 40 、 後期前半新段階は S K 34 、 後期後半新段階は S K 29 ・ 33 ・ 37 である。 その他、 中世前期の土器が S K 25 、 江戸時代後期の陶磁器が S K 26 より出土している。 時期の分かる土器は出土していないが、 形態から見ると円形や方形になる S K 32 ・ 35 も江戸時代後期の土坑になると思われる。 弥生時代の土坑のうち S K 30 ・ 33 からはまとまって土器が出土しており、 溝状の大型土坑となるが方形周溝墓の周溝にはならない。

その他の遺構 調査区中央に溝が集中する箇所がある。 排水用か屋敷地の区画溝と考えられる。 この溝の延長にある第49次調査区には同時期の溝はないため、 東側は調査区外で方向を南に転じ、 S D 19あたりに接続すると思われる。 溝の時期は土器から判断すると、 S D 17 より 弥生時代後期前半新段階、 S D 8 ・ 18 ・ 20 より 中世前期、 S D 4 は 中世後期 となる。 ただし、 S D 8 ・ 18 は 江戸時代の溝が重複している。 S D 17 からは土器がまとめて出土しており、 S K 30 ・ 33 と同じく 大型土坑の一部 になる可能性もある。 S D 17 付近の焼土 2 については 6 世紀後葉の土師器が出土しているので、 古墳時代後期の竪穴住居のかまど であった可能性がある。

(3) 遺物

石器の中に第212図 8 ~ 10 に示した、 縄文時代中期に属する石錘、 黒曜石の微細剥離のある剥片が出土している。

弥生時代の遺物としては第204図 60 ~ 第205図 104 に示した S K 30 出土の中期後葉、 第208図 162 ~ 178 ・ 第209図 212 ~ 第211図 275 の S K 34 ・ S D 17 出土の後期前半新段階、 第203図 23 ~ 第204図 29 の S B 18 出土の後期後半古段階、 第206図 106 ~ 第208図 161 ・ 183 ~ 190 の S K 33 ・ 37 出土の後期後半新段階の土器があげられる。

61 の 外反する 単純口縁 の 細頸壺 、 60 の 受口口縁 の 細頸壺 、 64 ~ 69 の 肩部文様 も 櫛描文 が 多用され、 白岩式新段階 の 特徴 を 示す。 41 ~ 43 の 内湾する 受口口縁 の 広口壺 は 文様 から 見ると 41 ・ 42 は 白岩式古段階、 43 は 嶺田式 に 属する もの であろう。 78 ・ 79 ・ 81 ・ 83 ・ 84 ・ 86 ~ 90 ・ 92 は 外反口縁 で 口唇部 に 刻目 やへら押さえ の ある 鉢形甕 で、 平底 と 103 の ような 低い 台 の つく もの と、 90 ・ 91 の 外反口縁 の 球形胴 の 台付甕 も ある。 164 ・ 222 の 台付甕脚接合部 に 粘土帯 を 巻き付ける もの は、 西・中遠江 の 後期前半新段階 ~ 後半新段階 に 見られる 特徴 である。 104 の 鉢 は 後期前半新段階 に ある 鉢 に 類似 する。 第211図 300 の 高環脚部 下端 の 屈曲 が 小さい もの は、 白岩式新段階 に 属す る と 見られる。

163 の ような 断面四角 で 小さな 折返口縁 の つく 鎧状口縁 の 高環 は、 後期前半新段階 の 特徴 を 示す。 251 の ような 胴部 下半 に 屈曲 、 肩部 が 湾曲 する 壺 は 新しい 特徴 である。 高環 の なかで 162 の 単純口縁 で、 165 ・ 219 ~ 221 ・ 225 ・ 226 ・ 228 の 脚 と 环部 の 接合部 に 横一条 の 突帯文 の つく もの も 後期前半新段階 の 特徴 となる。 また、 166 ・ 167 ・ 223 ・ 224 ・ 227 の 無文 の もの は 鉢 が 环部 と なる 高環 に 多い。 台付甕 は 小さく 外反する 口縁 の 173 ・ 174 ・ 253 ・ 254 ・ 258 ・ 267 は 古い 特徴 、 外反 が 弱くなつた 257 ・ 259 ・ 263 ・ 265 ・ 268 は 新しい 特徴 と 見られる。 255 ・ 256 ・ 264 ・ 266 の 折返口縁 の 台付甕 も ある。 第211図 301 の 小型壺 は 頸部 に 横 1 条 の 突帯文 と その 上下 に 刺刺丈 が あり、 この 段階 に 属す る と 見られる。

23 の ような 断面台形 に なる 折返口縁 の 高環 、 22 の 高環 の 脚接合部 に 横二条 の 突帯文 が 施さ れる もの は 後期後半古段階 の 特徴 である。 29 の 内湾口縁 の 鉢 は 後期後半新段階 に 多く、 古段階 では 珍しい。

後期後半新段階 の 特徴 である 折返 の 下端 に 段 が つき、 口唇部 に 横 方向 の 押引文 が 施さ れた 口縁 、 肩

部文様と脚接合部に有段羽状刺突文の施された108・114・118・122・127・128・186・187・189の壺と、111・112・183の高壺がある。129・130のように2段以上の羽状刺突文で有段にならないものも一定量ある。125や302のような短く開く単純口縁で胴が張る形態の広口壺も後期後半に一般的で、小型のものが多い。台付甕はくの字状口縁の149・190が一般的で、158の長胴のものもある。147・150の折返口縁の台付甕も存在する。161の小型鉢はあまり見ない形態である。124・126の細頸壺は白岩式古段階に属する混入品である。

弥生時代の石器としては、第212図6・12の伐採斧の破片があり、6は後期前半新段階、12は中期後葉の土器が伴っている。7・13の砂岩の粗製剥片のスクレイパーは打製石包丁との説もあるが、摩耗痕のみで、稲の刈取による使用痕跡は確認できない。5は扁平な川原石である砂岩の両面を砥石面として利用しており、後期後半新段階の時期になる。

古墳時代後期の土器は第203図7・8・11～22のS B13・17より出土したものが該当する。6世紀前～中葉の土器は15の土師器の壺、13の土師器の短脚高壺、14の土師器高壺、21の複合口縁の広口壺、16の底に籠目圧痕のある長胴甕、6世紀後～末葉の土器は7の土師器の壺、12の土師器の高壺、17の外反口縁の土師器の長胴甕と18の小甕、7世紀は19・20の土師器高壺、8の刷毛調整が密の長胴甕などがある。ほかに第211図290の6世紀前葉の内湾口縁の土師器壺、第204図56・第211図276・307の6世紀中葉の須恵器壺蓋、296の6世紀末葉の須恵器壺蓋、7世紀前～中葉の須恵器では、288・291の壺蓋と第209図198の壺身がある。292のミニチュア土器は形態・焼成から見て6世紀後葉のものである。第212図1の土製紡錘車は珍しい形態であるが、焼成から見ると古墳時代後期に属していると見られる。2～4の金属器を研いだ痕跡のある砥石はS B17より出土しており6世紀に該当する。

古代の土器は第208図182の8世紀初頭の須恵器壺蓋、第211図281・282の8世紀前葉の土師器の皿しか出土していない。

中世前期の土器は山茶碗があり、12世紀前葉の渥美・湖西産が第209図208、12世紀後葉の渥美・湖西産が第211図287、13世紀前葉では渥美・湖西産は第209図209・第211図289、知多産は第204図39・第209図210・285・286が出土しており、13世紀前葉では渥美・湖西産と知多産山茶碗が拮抗している。中世後期では第209図204の古瀬戸後IV期の折縁皿、第204図57は15世紀後葉の常滑産の折返口縁の小型壺がある。第211図284は戦国時代後半の在地のろくろかわらけがある。

江戸時代後期の陶磁器で図化できたのは、第204図40の18世紀の肥前産白磁茶碗のみである。

(4) まとめ

縄文時代の遺物は今までの調査区において中期の土器や、磨製石斧、石鏃、石匙などの石器や、縄文時代の遺物しか出土しない柱穴もあるため、掛之上遺跡での縄文時代の遺構は確実に存在することが確認されている。本調査区出土の縄文時代の石器は弥生時代の溝や、時期不明の柱穴から出土しており明確な遺構はないが、他の調査区と比べると石器の点数が多い。

本調査区でも検出された弥生時代の竪穴住居のうち楕円形から隅丸方形に変化したことが確認され、傾向としては中期後葉～後期前半新段階は楕円形、後期後半段階になると隅丸方形に変化する傾向はつかめた。ただし、土器から時期の判明した竪穴住居は少なかったため傾向の指摘に留めておきたい。

古墳時代後期の竪穴住居が、他の調査区と比べるとまとまって確認された。組み合わせになりそうな掘立柱建物もあったが、母屋になりそうな大型の掘立柱建物は確認されていない。かまどが破壊されているもの、全く確認できないものなどは、かまどの破壊祭祀が行われていた可能性がある。

奈良時代の郡衙正倉域西側に存在する郡衙関連施設と思われる掘立柱建物が確認できた。また、正倉域の建物より小規格で作られていることも判明した。

中世前期と後期の方形の屋敷地割に關係したと思われる区画溝が確認できたが、内部の建物の状況は分からなかった。

江戸時代後期の土坑や区画溝は確認できたが、遺物はほとんど出土していないので、屋敷地として利用されていた場所ではないことが明らかとなった。

14. 第73次調査区の概要（報告書36第213図～第226図）

(1) はじめに

掛之上遺跡地内の北東部分、都市計画道路掛之上線に接続する区画道路16号線の西端の調査区である。西端では一部掛之上線敷地内も調査対象に含め、平成20年度に実施した（2009報告書25写真図版編）。西端の掛之上線敷地内は平成19年度に実施した第62次調査区、東端は平成19年度に実施した第59次調査区（2008報告書22写真図版編、2013報告書35遺構・遺物編1、本書本文編掲載）

包含層は西端ではほとんど確認できなかつたが、西に行くほど標高が高くなり10cm前後の薄い包含層が確認できた。

(2) 遺構

主な遺構は弥生時代中期後葉の方形周溝墓・土器棺、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物・土坑、中・近世の溝である。

竪穴住居・掘立柱建物 壁溝が巡り平面形態が分かる竪穴住居は確認できなかつたが、古墳時代後期の竪穴住居に特有な貯蔵穴を中心に、付近にある柱穴や壁溝と思われる小溝を抽出した。S B19・20の貯蔵穴からは、6世紀前～中葉の須恵器・土師器が出土している。また、S B20の貯蔵穴は最低2回掘直した痕跡があり、最後に完形品に近い土師器が投棄されていた。

古墳時代後期の掘立柱建物になると思われるS B19・20の西側に3棟展開するが、調査区が狭いため竪穴住居と組み合わせになる掘立柱建物どうかは分からぬが、主軸方向は一致している。S H34・35は2間×2間の総柱の高床倉庫、S H36は土間造り？の2間×1間以上になる正方形の建物になると思われる。S H36もすべての柱穴は確認できていなかつたが、規模から見てS H34・35と同じ高床倉庫になる可能性がある。

S H37については桁行の柱穴配置が特殊なもので、主軸方向は隣接の第62次調査区で発見された戦国時代と同時期の掘立柱建物になる可能性が高い。残された柱穴からは桁行2間×梁行3間で、中央に間仕切りの柱列をもつ。おそらく桁行の柱の基礎は礎石になるかも知れない。

土坑 弥生時代の土器を出土した土坑は後期後半新段階のS K38のほか、5世紀の土器が出土したS K36、6世紀の土器が出土したS K35・43・44で、遺物から江戸時代後期の土坑に認定できるものもはなかつた。深めで方形か円形のS K46・116は江戸時代後期の水溜用土坑に類似する。S K43は深めの円形土坑であるため、古墳時代後期の竪穴住居の貯蔵穴になる可能性がある。

方形周溝墓・土器棺 弥生時代の方形周溝墓溝の組み合わせが判明し、S Z3・5とした。S Z3の西溝北端は陸橋、東溝の南端は溝幅が急に狭くなるため連結溝になりそうで、後期～古墳時代初頭の四隅の一部が連結する方形周溝墓と見たい。主軸は少し西に傾き、中期の方形周溝墓の主軸方向とは異なる。東溝の底より完形品に近い古墳時代初頭の壺（第220図25）が出土している。S Z4は南東隅が調査区外になるが、あとは陸橋となつてゐるので、四隅が陸橋となる中期後葉に該当する方形周溝墓と見られ、西溝から完形品に近い中期後葉の土器8点が出土している。主軸方向はほぼ北を向き、東部地区で発見されている中期後葉の方形周溝墓と一致する主軸方向を示している。

S Z5の墳丘外である東隣接地より、土坑内に斜位の状態で埋葬された土器棺が確認された。西洋

梨型の胴部となる白岩式新段階に該当する形態の壺棺で、S Z 5に関係していたと思われる。

その他の遺構 東西方向の溝であるS D46・37、南北方向の溝であるS D39・40～43、U字状になるS D38などが確認された。溝の時期は、6世紀の土器を出土したS D39、中世の土器を出土したS D38・43、江戸時代後期の陶磁器を出土したS D41・46、明治時代の陶磁器を出土したS D37に分けられる。S D39は古墳時代後期の居住域を区画する溝、S D43は一部幅の狭い部分やS D46江戸時代後期の溝と重複しているが、戦国時代の溝部分は最低溝幅3.5mありそうな幅の広い区画溝と思われる。おそらくS H37などの戦国時代の建物群の東辺区画溝になると思われる。江戸時代後期の溝からの遺物の出土量は少ないが、比較的幅の広い区画溝であるため、付近に同時期の区画溝があった可能性がある。S D37は現在南にある屋敷の明治時代の区画溝になるもので、江戸時代末期の瓦が大量に出土している。土蔵に葺かれていた瓦であろうか。

(3) 遺物

第226図2の黒曜石の剥片は縄文時代に属すると思われる。この剥片の使用痕はない。

弥生時代の土器としては、中期後葉では第220図44～第222図86に示したS Z 5（S Z 4西溝=S Z 5東溝）出土、後期後半新段階～古墳時代初頭では第219図10～第220図35に示したS Z 3出土土器がまとまっている。S Z 5出土の土器は混入品もあるが、65・66・69・81は外に開く単純口縁の細頸壺、70・71・79の西洋梨型の胴になる細頸壺、72・73の胴の張る小型壺などは白岩式新段階のなかでも後期前半古段階に近いかなり新しい特徴を示している。50・74は受口口縁になると思われる広口壺で、白岩式新段階や後期前半段階にある壺である。高环は59の内面突帯がない鍔状口縁のものは後期前半古段階に近い形態である。甕は台付甕と思われる56・57があるが、後期前半段階のものと区別がつかない。なお、67の頸部に太い押引文の施された細頸壺は嶺田式の典型的な壺である。第225図181の土器棺は西洋梨型の胴形態で、180の蓋になる壺破片の文様は白岩式新段階ないし後期前半古段階の特徴を示している。

弥生時代の石器は第226図1の打製土掘具と3の砂岩の粗製剥片のスクレイパーは中期後葉、6の伐採斧は小型であるが弥生時代中期後葉～後期前半の時期となる。

S Z 3の土器は下に垂れたような折返口縁で、肩部文様が有段羽状刺突文になる14～18・20・22・32・34の壺は、後期後半新段階の壺の特徴である。25の肩部文様が無文で短く開く内湾口縁の壺は、古墳時代初頭に降るものと見られる。21の受口口縁の大型壺も口唇部内面に突帯があり、古墳時代初頭の大廓式や曲金式の影響と見られる。19の多段の羽状刺突文の施された広口の小型壺は、当遺跡では方形周溝墓によく出土するものである。高环も下に垂れた折返口縁、脚接合部に有段羽状刺突文となる10・11・32・33がある。13の高环と27の小型鉢は古墳時代初頭によくあるものである。台付甕は28の口縁部の刻目がなく長胴になりそうな小型のものが確認され、これも古墳時代初頭の特徴を示している。

古墳時代中期の土器は第220図38～42に示したS Z 3西溝上層より、見性寺II-1式段階の39～41の脚中央が膨らむ高环、42・43のくの字状口縁で、球形胴になる平底甕が出土している。

古墳時代後期の土器は第219図1～9に示したS B19・20より出土したものがある。6世紀前～中葉は1の須恵器壺蓋、5の土師器壺、7・8の土師器高环、2の胴部下半に籠目压痕のある土師器鉢、4・6の土師器直口壺、9のくの字状口縁の長胴甕などがある。第223図94～104に示したS K30出土の土師器で、96の内湾口縁の壺、94・95の短脚高环、99の大きく開く口縁の高环、98の底部が大きく窄まる甕は6世紀前葉、100の内湾口縁にならない壺、傾斜が緩くなる口縁の101・102の高环などは7世紀初頭に降る形態である。ほかに、6世紀前～中葉では柱穴出土の第225図166・179の須恵器壺

身、S D38出土の混入品である第224図136・137の口唇部がつまみ上げられる土師器長胴甕、第225図178のくの字口縁の長胴甕、6世紀後葉では175の須恵器坏身、S K43出土の第223図123の土師器坏、122・第225図172の土師器甕、S K44出土の126の土師器小型鉢、S D39の混入である第224図150の土師器甕、7世紀では138は初頭の須恵器高坏、152は前葉の須恵器壺、第222図89の前葉の須恵器長頸瓶があり、各時期のものがまんべんなく出土している。

古代の土器はS D38の混入品である第224図139～141の8世紀前葉の須恵器坏蓋、第225図162の8世紀初頭の須恵器高台坏身、173は10世紀後葉の清ヶ谷産灰釉陶器碗であるが数は少ない。

中世前期では12世紀前葉の渥美・湖西産山茶碗の第224図142、12世紀末葉では渥美・湖西産山茶碗の144・145、13世紀前葉で渥美・湖西産山茶碗の146・第225図174と数少なく、知多産山茶碗は見られない。他に143・153が渥美・湖西産の壺と大甕は12世紀、154は常滑の三筋壺で13世紀前葉、160・第222図88は龍泉窯系青磁碗と鎬蓮弁のある鉢蓋で13世紀に該当する。中世後期では第225図164は瀬戸大窯1期の丸皿、第224図147の志戸呂産折縁小皿、第222図90の初山産丸皿で16世紀後葉、第224図161の古瀬戸後IV期新段階、第222図92は瀬戸大窯1期、91は瀬戸大窯3期の摺鉢、第225図177の16世紀の常滑壺、第224図155～159は16世紀後葉の地元産ろくろかわらけ、93・176の遠江型内耳鍋など一定量ある。第226図5は滑石製鍋の底部破片で戦国時代に該当し、一般集落では出土しない珍しいものである。

江戸時代後期の土器・陶磁器は第224図151の肥前の茶碗蓋、第225図163の瀬戸産の筒茶碗、129の瀬戸産の鉢、第225図165のかわらけ、第223図127・第224図128の棟瓦で、筒茶碗とかわらけは18世紀後葉、それ以外は19世紀前葉の時期で、近世・近代溝からの出土である。

(4) まとめ

弥生時代中期後葉と後期後半新段階の方形周溝墓は確認されたが、最新の土器から見るとS Z5は後期初頭、S Z3は古墳時代初頭に降る可能性が高い。主軸方向は何れも北向きで、東部地区で見られる弥生時代中期後葉と古墳時代初頭に属する方形周溝墓の主軸方向と一致する。弥生時代の竪穴住居はなかったので、終始墓域であった可能性が高い。

古墳時代後期の竪穴住居や掘立柱建物、土坑が確認できた。6世紀前～中葉の古い時期に属する可能性が高い。掘立柱建物は総柱の高床倉庫が確認され、第1次調査で確認された居館部の高床倉庫群の様相と類似するが、柵列などの区画施設は確認できていない。

鎌倉～戦国時代の区画溝が確認できた。とくに戦国時代のS H37とこの屋敷地の東辺を区画するであろう南北方向のS D43が確認された。文献上確認される本間氏のかけの上屋敷関連の遺構とも考えられる。

江戸時代の遺構は区画溝と水溜土坑があるにすぎず、遺物量も少ないため、本調査区は江戸時代の屋敷地外の畠地であった可能性がある。

15. 第75－2次調査区の概要（報告書36第227図～第168図）

(1) はじめに

遺跡の北端を南北に横断する都市計画道路小野田柳原線より初めての東側の調査区で、都市計画道路16M-1線に伴い平成20年度に実施された調査区である（2009報告書26写真図版編）。小野田柳原線内の第75-1次調査区と同時並行で実施したため、第75-2次調査区とした。この調査区の西側には開析谷があり遺構面の存在はないと思われたため、調査対象外とした。

包含層の保存状況は良く、全域厚さ20cmの包含層が確認できた。

(2) 遺構

主な遺構は弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物である。

竪穴住居 弥生時代後期の竪穴住居は地床炉が中央北よりにある S B 17で、平面形態は楕円形である。楕円形の竪穴住居で、堀方が深いため壁溝は確認できなかった。時期の分かる遺物は出土していないので、楕円形の多い後期前半段階の竪穴住居としておきたい。

北壁にかまどをもつ古墳時代後期の竪穴住居 S B 16が確認できた。東半分は調査区外となるが、平面形態は方形になると思われる。かまどの残りは S B 16 a で良く、S B 16 b では悪いため、S B 16 a の方が新しいと判断した。なお、S B 16 a のかまどの破壊祭祀はなかったようである。南壁付近にある貯蔵穴は確認できない。6世紀後～末葉の土器が出土している。かまどは確認されていないが、南壁付近に貯蔵穴をもつ S B 18・20も古墳時代後期の竪穴住居と考えられる。S B 20の貯蔵穴からは、6世紀中葉の土器が出土している。S B 19からも古墳時代後期の土器が出土しているが、斜面の遺構なので、竪穴住居なのか掘立柱建物かは分からなかった。

掘立柱建物 S H10～12の柱穴より6世紀に該当する土師器の破片が出土しているので、いずれも古墳時代後期の掘立柱建物と判断した。S H10は2間×2間の建物で、中央部分に搅乱が入るが、柱穴の堀方が大きいので総柱の高床倉庫になるとを考えたい。S B 20よりは新しい建物であるため、6世紀後葉に該当しようか。S H11・12は2間×1間以上の土間造りの建物であろうが、全体の形態は分からぬ。

その他の遺構 方形の大型土坑である S K 7が調査区東端で確認された。大半が調査区外で全形態は分からぬが、1m近くになる深いものである。弥生時代後期・古墳時代後期・奈良時代の土器が出土しているが、中・近世の時期になるかもしれない。S D16は四隅が連結溝でつながる方形周溝墓の周溝にも見えるが、弥生時代中期後葉、後期後半古段階の2時期の土器が出土するため、方形周溝墓の周溝になるかどうかは分からぬ。

(3) 遺物

弥生時代の土器としてまとまっているものはないが、第231図32は三河の瓜郷式の系譜を引く、単純口縁の細頸壺で中期後葉古段階の特徴を示す。30は西遠江の伊場式にある後期後半古段階に併行する高杯である。

5世紀の土器は第231図1と第232図35の5世紀前葉の見性寺II-2式期の土師器高杯が図化できた。古墳時代後期の土器は6世紀前～中葉では第231図9～13に示したS B 20の貯蔵穴から出土している。13は6世紀前葉の地元衛門坂窯の須恵器杯蓋、10は土師器の模倣杯蓋・身、11は内湾度が弱くなった土師器杯、12の短脚高杯は杯部がやや浅くなつた形態を示し、9の土師器の折返口縁の甌は6世紀中葉に該当するものである。他には8の土師器模倣杯蓋、第232図47・48・53の地元衛門坂窯の須恵器杯蓋と、21・54の須恵器杯身、36の土師器の短脚高杯がある。6世紀後～末葉では第231図2～7・15～19・第232図30～56に示したS B 16、S K 71、S D 17・18出土の土器があり、6・17～19・49の須恵器杯蓋、22・24・55の須恵器杯身、5・44の土師器杯、43・46の土師器長脚高杯、33の土師器鉢、2～4・37～42・45のくの字状口縁の土師器長胴甌がある。7世紀では27の須恵器杯身、7・26の須恵器高杯、52の土師器杯、51の土師器高杯で量は少ない。16のミニチュア土器は形態から判断すると6世紀に該当するものである。

古代の土器は8世紀前葉の須恵器では第231図20の杯蓋、後葉の須恵器では25の無高台杯身、28の皿、29・50の甌があるが、量としては少ない。

(4) まとめ

弥生時代の遺構は後期の竪穴住居1棟、方形周溝墓状の溝が確認されたにすぎないが、後期の居住域であることは間違いない。

古墳時代後期の竪穴住居が調査面積の割に、3棟も発見された調査区であった。供伴する掘立柱建物も3棟確認でき、この時期の中心的な居住域であることが判明した。

中近世の遺構・遺物はないがSK7の大型土坑がこの時期になるかもしれない。

16. 第76次調査区の概要（報告書36第233図・第235図）

(1) はじめに

遺跡の中央にあたる狭い調査区で、区画道路2号に伴い平成20年度に実施され（2009報告書25写真図版編）、第34次調査区の南側にあたる（2005報告書13写真図版編、2012報告書31遺構・遺物図版編、2014報告書37本文編）。調査区内に仮設の下水道管が付設されていたので、一部調査ができなかつた。

調査区北半に厚さ10～20cmの包含層が確認できた。

(2) 遺構

数狭い調査区のせいか遺構数は少なく、竪穴住居1棟、溝などが確認された。

竪穴住居 地床炉と壁溝らしい遺構が確認できたので弥生時代の竪穴住居と認定したが、平面形態・時期共には分からぬ。

その他の遺構 SD19は湾曲するような溝であるが、性格は不明。弥生時代後期後半新段階の土器が出土している。

SD18はSD19と同じように湾曲しているが、埋土の色調から見て江戸時代後期の区画溝であろう。SD1は第34次調査区から延びてきている畑地の区画溝で、明治時代までの遺物を含む。

(3) 遺物

第235図4～6に示したSD19出土の弥生時代の土器は、6の粗雑化した折返口縁壺、4・5も粗雑化した折返口縁の高壺で、いずれも後期後半新段階に属する。8の砂岩の粗製剥片のスクレイパーは刃部に敲打痕が見られるので、叩石のように使われていたのかもしれない。弥生時代中期後葉～後期によく見られる石器である。

古墳時代後期の土器は2の6世紀前葉の須恵器壺蓋が出土している。

1は瀬戸産の植木鉢、3は瀬戸産の染付茶碗で、いずれも明治時代に降るものである。7は19世紀前葉の桟瓦の瓦当部である。

(4) まとめ

狭い調査区であったが弥生時代の竪穴住居が確認でき、周辺部の調査区の状況から見ても、弥生時代中期後葉～後期の居住域であったことは間違いない。

江戸～明治時代の区画溝が確認され、周辺に何らかの屋敷地があったと思われる。

17. 第79・80・85-2次調査区の概要（報告書38第2図～第26図）

(1) はじめに

第79・80次調査区は遺跡の南東部、都市計画道路掛之上小野田線の東端に位置しており、平成21年度に調査され（2010報告書28写真図版編）、西隣は平成19年度調査の第60次調査区である（2008報告書23写真図版編、2013報告書35遺構・遺物図版編1、本文編本書掲載）。第85-2次調査区は第79・80次調査区の北、平成20年度調査の第74次調査区（2009報告書25写真図版編、2013報告書35遺構・遺

物図版編1、本文編本書掲載)の南側に当たる調査区である(2010報告書27写真図版編)。

包含層は第79・80次調査区の東端では、遺跡の端のせいか流失したためか確認できなかつたが、それ以外でほぼ厚さ10~20cmの包含層が調査区全面に残っていた。第85-2次調査区は、居住域の中心地であるせいか厚さ20~30cmの包含層が良好に残っていた。

(2) 遺構

主な遺構は弥生時代中期後葉～後期前半の方形周溝墓、後期の竪穴住居、中世の掘立柱建物である。

竪穴住居 弥生時代後期の竪穴住居は、地床炉が北壁付近にあるS B21(第85-2次)と、S B56(第79・80次)は平面形態が隅丸形で地床炉が2箇所ある竪穴住居2棟が確認された。後者は壁溝が3時期あるので最低2回の建て替えがあったと思われる。どちらも時期の分かる遺物は出土していないが、隅丸方形の多い後期段階の竪穴住居としておきたい。

掘立柱建物 S H12(第79・80次)は方形の堀方をもつ3間×2間以上の土間造りの建物で、奈良時代の建物と判断した。ただし、主軸方向がほぼ北向きになるため、東に少し傾く郡衙正倉域の建物方向とは異なる。根固め石のない時期と、根固め石を入れた時期があり、最低1回の建て替えが確認できた。H13~15(第79・80次)は柱穴の堀方が円形で小さく、柱穴より戦国時代に該当する土器の破片が出土しているので、いずれも戦国時代の掘立柱建物と判断した。S H13は3間×2間以上の土間造り建物で、比較的大きいのでこちらが母屋、小型のS H14・15は納屋か倉庫のような建物であろう。

方形周溝墓 四隅の3箇所に陸橋が確認されたS Z4(第79・80次)と、最低2箇所の陸橋のあるS Z5(第79・80次)の2基が確認できた。出土遺物から前者は中期後葉、後者は後期前半新段階になると見られる。S Z4北溝から大量の土器が出土しているが、破片が多く甕も一定量含むため方形周溝墓より新しい時期のものが集落より廃棄された可能性がある。溝中層より焼土が確認でき、溝内祭祀関わる遺構として注目される。これに対して西溝では完形率の高い壺が出土しているので、こちらは方形周溝墓の祭祀に使用された土器群と思われる。また、人頭大の礫も土器と同レベルで持ち込まれているので、何らかの標識石として使われたとも思われる。何れの方形周溝墓も主軸方向をほぼ北に向けるため、東部地区で発見される方形周溝墓の主軸方向と一致する。

その他の遺構 土坑の内、弥生時代中期後葉の土器を出土するものは、S K58(第85-2次)・175・180(第79・80次)で、とくにS K175からまとまって出土している。弥生時代後期前半古段階ではS K173(第79・80次)、後期後半古段階ではS K174(第79・80次)があり、S K182(第79・80次)からは後期後半新段階併行期の搬入品の壺出土している。土器は出土していないが、埋土から円形のS K126(第79・80次)と方形のS K181(第79・80次)は江戸時代に該当すると思われる。

溝の内、弥生時代ではS D54(第85-2次)より中期中葉、S D94(第79・80次)より後期前半新段階、S D48(第85-2次)・62(第79・80次)より後期後半新段階の土器が出土している。また、S D73(第85-2次)から奈良時代初頭、S D50・51(第85-2次)・65(第79・80次)から中世前期、S D49(第85-2次)から中世後期、S D63・93(第79・80次)から江戸時代後期の土器・陶磁器が出土している。S D54は同時期の土器を出土したS D60(第74次)とともに、方形周溝墓の溝になるかもしれない。S D73より8世紀初頭になりそうな瓦が須恵器と共にまとめて出土している。S D63は水溜池と思われるS X16に接続している。第79・80次調査区では東西方向、第85-2次調査区では南北方向の溝が確認でき、複数の時期が1箇所にまとまる傾向があるため、時期を越えて地形的に排水しやすい場所に設けられた溝と思われる。

(3) 遺物

弥生時代の遺物は、第11図1～第15図104に示したS Z4、第17図159～171に示したS K175出土の

中期後半葉の土器がまとまっている。この時期特有の細頸壺は10・33～38・40～43・45・60～62・162～166で、このうち40～43・162～165と、S D54出土の第18図192のようなラップ状に外に開く単純口縁が基本となるが、34・44・52の受口口縁、33の内湾口縁の壺もある。あまり見ない5～7の無文の広口壺がまとまって出土している。32の内湾口縁で、浮文のつくものは珍しい。11・63は受口口縁となる大型の広口壺、10・16・42・45・52は小型壺である。9の口縁端部に刻目がある太頸壺は、中期中葉にある太頸壺の系譜を引くものであろう。高坏は脚部が3・27・29・159のように単純に外に開くものと、30・第21図256のように後期の高坏にも見られる脚の下端部に屈曲があるものがある。甕は第14図76・79～81の鉢形の台付甕と、74・75・77・78の後期的な球形胴の台付甕がある。第15図105～第16図142に示したS Z 5出土の土器の内、中期中葉の壺の119、後葉の壺の124・125と高坏の105、後期前半新段階になる壺の122、高坏の106・110～113、後期後半新段階になる120などが混在して出土しており、量としては後期前半新段階のものが最も多い。第17図175は遠江以西からの搬入品の加飾壺で、球形胴で肩部に櫛描横線文と円形浮文が施され、後期前半新段階併行期と思われる。

弥生時代の石器としてはS Z 4出土の第23図1の砂岩の粗製剥片スクレイパー、2・3の叩石は中期後葉に該当する。3は石材と研磨の様子から伐採斧の再利用品と考えられる。S K175出土の6・7・第24図8～15・第25図24・第26図28・29に示した砂岩の粗製剥片のスクレイパーのための製作用の石核かもしれない。27の磨製石鏃は先端が途中で折れたため、穿孔をやめた未完成の磨製石鏃と思われる。これらの石器の時期は中期後葉であると思われる。16の小型の打製土掘具は縄文時代の時期になる可能性がある。4・第25図17～23・26・第26図30・31に示した叩石は弥生時代後期によく見られる石器だが、4・19・21には金属器を磨いたような刻目状の痕跡がある。

古墳時代後期の遺物は、6世紀中葉の第19図232の須恵器坏身、230の土師器高坏、6世紀後葉の226の土師器模倣坏蓋、7世紀代では233・第21図261・262・第22図296の須恵器坏蓋、第19図237・第20図245の坩、244の平瓶、第19図220の長頸瓶の丸底部の破片が出土しているだけで、数は少ない。

古代の遺物のなかで第19図216～218・第20図248～第21図254に示した平瓦がまとまっている。隣接の第60次調査区からも桶巻造の平瓦、四重弧文の軒平瓦が出土しており、白鳳期に遡る瓦が出土している。216・218・264は桶巻造の平瓦で白鳳期、248～254は一枚造の平瓦で8世紀中葉まで降るかもしれない。土器は8世紀初頭～前葉の第19図234～236の須恵器坏蓋、238・239の須恵器高台坏、8世紀中葉の第21図263の須恵器平底坏と、後葉の第22図301須恵器高台坏のほか、9世紀後葉の第20図246、10世紀後葉の第22図298、11世紀前半の309の清ヶ谷産灰釉陶器が出土している。瓦と比べると土器の出土量は少ない。

中世前期では12世紀前～中葉の渥美・湖西産山茶碗の第18図188・第21図265・266・268・第22図300・302と甕の305、第18図189の鉢、12世紀末葉の渥美・湖西産山茶碗の267・268・303、東遠江産山茶碗の269、13世紀前～中葉の渥美・湖西産山茶碗の第16図152・第19図221・第20図247・第21図270・271、知多産山茶碗の第21図271・272・第22図292・293・299と片口鉢の304がある。13世紀前葉では渥美・湖西産と知多産山茶碗が拮抗している。なかでも、第21図277の古瀬戸前期の瓶子、第18図186の中国産青磁碗は注目される。中世後期では第22図306の古瀬戸後IV期の折縁皿を始めとし、瀬戸大窯のうち第18図213・第21図275・第22図307の1～2期の摺鉢、3期の274の天目茶碗と308の摺鉢、3～4期併行の地元志戸呂産の第18図214の丸皿、第21図278の鉢、276の摺鉢と一定量の土器が出土している。ほかに遠江型内耳鍋の第16図142・第18図185・第22図288・290、三河産鍔付鍋の第21図280、279の地元産ろくろ整形かわらけ、第22図291の中国製染付端反皿がある。

江戸時代後期は、第18図215の肥前産染付碗、第21図273の志戸呂丸碗しか図化できなかった。

(4) まとめ

弥生時代中期後葉と後期の方形周溝墓が各1基と、後期の竪穴住居が確認された。後期の竪穴住居が中期後葉の方形周溝墓を破壊して造ることは、当遺跡では珍しい。方形周溝墓を破壊して、全面集落域とするのは古墳時代後期からである。周辺調査区の方形周溝墓とは単位群を形成していないが、第85-2次S D54・60が方形周溝墓であるならば、S Z 4と単位群を形成するかもしれない。

第85-2次調査区では白鳳期の桶巻造平瓦と奈良期の一枚造平瓦が、まとまって出土した。第60次調査区でも4重弧文軒平瓦が出土しており、本格的な寺院ではないものの、瓦葺建物が東部地区にあったかどうか検討を要する。

中世前期と後期の土器・陶磁器が一定量出土し、古瀬戸前期の瓶子、中国製青磁碗や染付皿も出土しており、東部地区全域に中世の集落域が広がっていたことが確認できた。

江戸時代後期の区画溝や池状遺構などが確認できたが、遺物量は少なく畠地利用の場所であったことが確認できた。

18. 第81・82-1次調査区の概要（報告書38第27図～第55図）

(1) はじめに

遺跡の北東部地区にあり、第82-1次調査区は第75-2次調査区（2009報告書26写真図版編、2014報告書36遺構・遺物図版編2、本文編本書掲載）の東側に隣接し、平成20年度に実施された調査区である。第81次調査は都市計画道路16M-1建設に伴い、平成21年度に実施された（2010報告書28写真図版編）。

包含層はほぼ全域良好に10～20cm確認されたが、第81次調査区の西端になると包含層が残っていないかった。これより西は包含層が薄くなると思われる。

(2) 遺構

主な遺構は弥生時代中期後葉～後期前半の方形周溝墓、後期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物、戦国時代の大型土坑である。

竪穴住居・掘立柱建物 竪穴住居は弥生時代後期と思われる地床炉をもつS B17a・b・58の2棟、古墳時代後期のかまどと貯蔵穴をもつS B16a・b・23～25・57・59～63の10棟が確認できた。S B17は隅丸方形のa住居、炉と柱穴の組み合わせがわかつたb住居で、一部のみが重複しているため建て替えではないかも知れない。遺物は古墳時代後期の土器しか出土していないが、隅丸方形の多い後期後半段階と思われる。S B58は楕円形の竪穴住居で、中央北よりに地床炉がある。こちらも、弥生時代の土器は出土していないため、時期はわからないが、楕円形は中期後葉～後期前半段階に多い。

S B16は第75-2次調査区にまたがる住居で2時期ある。a住居の方がかまどの残りがいいいため、b住居より新しいと思われる。時期は第75-2次調査区の成果を併せると、6世紀後葉になると思われる。S B23は東壁にかまどがある珍しい竪穴住居である。かまどの保存状況はよく、かまど本体が確認でき、内部中央に土製支脚が残されていた。かまどの南隣には土手を伴う貯蔵穴があり、かまどとの間に底のない広口壺が、据え置かれていた。かまど付近の柱穴は見つかなかった。かまど付近と貯蔵穴内からは6世紀中葉の土器が出土しており、当遺跡の古墳時代後期の竪穴住居としては古い方の事例となる。S B24・25は貯蔵穴と思われる土坑から復元した竪穴住居で、S B24は壁溝から2時期あり、最低1回の建て替えがあったものと思われる。遺物はほとんど出土していないが、6世紀後葉の土師器の破片が見られる。S B57は北壁にかまど、南壁に接するように貯蔵穴が掘られていた。かまど付近と貯蔵穴内からは6世紀前～後葉の土器が出土しているが、中葉の土器が多そうであ

る。S B59はかまどの確認はできたが、壁溝は分からなかった。貯蔵穴らしい土坑も見つかっており、かまどの保存状況もいい。6世紀の土師器が出土しているが、詳細な時期はわからない。S B60は一辺3mの小型住居であるが、かまどと貯蔵穴はある。第6・8次調査S B3・4、第9次調査S B4などの小型竪穴住居では、かまども貯蔵穴も確認されなかつた。6世紀末葉の須恵器が出土している。S B61のかまどの位置は北壁にないものであるため、壁溝とかまどの時期は異なるかもしれない。S B62・63はかまどと貯蔵穴の位置関係から復元した竪穴住居である。おそらく、包含層中に床面があつたため壁溝が確認できなかつたのであろう。S B62のかまどの保存状況は良く、かまど上より6世紀中葉の長胴甕などの土師器が出土している。S B63のかまどの保存状況はよくない。かまど付近から6世紀前～中葉の須恵器・土師器が出土している。

掘立柱建物はS H12・17が確認されたが、何れも1間×2間程度の小型掘立柱建物で、S H17の柱穴内には礎石があるため、戦国時代に降る掘立柱建物かもしれない。S H12は第75-2次調査S H10・11と併行するように存在するため、この付近の竪穴住居との組み合わせになるものと思われる。S B23と重複するため、6世紀中葉以降の時期が考えられる。

方形周溝墓 四隅に陸橋のあるタイプの方形周溝墓と思われるS Z7・15と、四隅の一角が溝幅を減じながら接続するS Z16の3基が確認された。S Z7は2隅しか陸橋は確認できないが、西溝から中期中葉の壺と台付甕が出土していることから、当遺跡最古の方形周溝墓1基となる。台付甕は周溝底を掘り下げ、横向きに埋置し口を礫で塞いだように見えるため、土器棺のように使われたのかもしれない。S Z15は古墳時代後期の竪穴住居であるS B25や近世溝のS D19と重複しているため、四隅の陸橋は確認できたが保存状況はよくない。周溝内からは6世紀の須恵器・土師器がまとまって出土しているため、S B25を建てた際にゴミが捨てられながら埋め立てられたと思われる。弥生時代後期後半の甕の破片が出土している。後期の方形周溝墓であろうか。S Z16は北溝の一部が確認できたにすぎないが、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の方形周溝墓の特徴を示すので、方形周溝墓と認定した。遺物はほとんど出土していないが、古墳時代初頭の土器片が僅かに確認できた。

土坑 弥生時代の土坑は後期前半新段階土器を僅かに出土したS K187が該当する。S K78は第81次調査区南端にごく一部しか確認できなかつたが、大型の方形土坑で5世紀前葉の土師器が土坑上層から大量に出土している。第75-2次調査区とまたがつて確認された大型方形土坑であるS K71より、古墳時代後期、奈良時代の土器の他、今回中世前期の山茶碗が出土したため、中世の遺構の可能性がでてきた。S K186はS K71に類似した大型方形土坑であるが、戦国時代後期の16世紀後葉の土器・陶磁器が出土している。この土坑の南に展開する第62・73次調査区で確認できた掘立柱建物群に付属する施設とも考えられる。水溜用土坑か半地下倉庫の可能性も考えられる。

江戸時代後期の土器・陶磁器を出土した土坑はS K74・76・79・80・82・83で、まとまって土器陶磁器が出土しているのはS K80である。土坑の形態はS K74・80・82・83が円形、S K79が長方形である。遺物は出土していない円形のS K73・81も、江戸時代後期になると思われる。第81次調査区に集中しており、いずれも今まで多数発見されてきた、江戸時代後期の水溜や肥溜土坑だろう。

その他の遺構 S D99より6世紀前葉の土師器が出土している。短い溝なので竪穴住居を区画する施設かもしれない。江戸時代後期の溝としては南北方向に延びたS D19・23があげられる。ともに北端で東西方向に向きを転じるため、屋敷地の区画溝になるものと思われる。土坑や溝からも一定量の江戸時代後～末期の土器陶磁器が出土していることから、屋敷地があったと思われる。

(3) 遺物

縄文時代の遺物は第53図6の頁岩と8の黒曜石の剥片が出土した。8は右側面に微細な剥離がある。

弥生時代の土器は第46図143・144に示したS Z 7出土の中期中葉の土器がある。143の単純口縁の細頸壺は肩部模様に大きな波状の沈線文が施されているが、連続押引文にはなっていないので新しい特徴になるかもしれない。144の口縁端部に刻目が入る条痕文の鉢形甕の底部には低い台がつくので、初期の台付甕事例として注目される。ほかに第48図202の単純口縁の細頸壺は頸部に列点文があり、中期後葉の白岩式新段階に該当する。第52図317のくの字口縁の台付甕は長胴化しており、後期後半新段階に該当する。141と第52図324の肩部に疑似流水文の施された細頸壺も白岩式段階に該当する。後期の土器は微量で僅かに、第46図142の後期前半段階の高坏脚、第42図5・第45図129の後期後半新段階では有段羽状刺突文の施された壺と高坏、146の折返口縁の壺と第46図147くの字口縁の台付甕ぐらいしか図化できなかった。

弥生時代の石器は第53図10の小型の伐採斧で叩石に転用され、石材は西遠江～三河産のものがある。第54図18の扁平片刃石斧は良くあるサイズで、地元の堆積岩で作られている。第55図22は扁平片刃石斧の未製品で、剥離・敲打調整後の研磨調整の最初で終わっている。石材は西遠江～三河産である。12・13・24の砂岩製の粗製剥片を利用したスクレイパーは、微細な剥離や摩耗痕が見られるが、稻を刈りとった際の使用痕は観察されていない。これらの石器の時期は後期の遺構から出土しているものがあるが、製作時期を示すのか分からない。

古墳時代初頭の土器は第46図140の扁平化した折返口縁の壺があるのみで数は少ない。

古墳時代中期の土器は第48図202～第50図264に示したS K 78出土の、5世紀前葉の見性寺II-2期に該当する一括資料がある。坏部に稜がつき、脚部中央が僅かに膨らむ高坏の206～230、短脚化した231～234の2種類がある。小型丸底壺は238・239・242・243・246・247のサイズと、ミニチュア土器に近い235・236・248がある。壺は237の折返口縁、240の口縁端部に面がある口縁、245の複合口縁、249の受口口縁、250と251の直口の壺がある。263が直口壺の胴部になるかもしれない。264の胴部が下ぶくれになるものは、254・259のくの字口縁の広口壺の胴部になりそうである。253・256・258・261・262は短く外反する口縁の甕で、球形胴で丸底になると思われる。5世紀後葉の須恵器としては第42図25の大型壇、末葉の第43図60・第47図168・第52図322の須恵器坏蓋、第45図131の須恵器坏身があるが数は少ない。

古墳時代後期の土器は、第42図1～第46図138に示したS B 16・17・23・24・57～59・60・62・63、第47図164～第48図193に示したS K 71出土のものがある。6世紀前～中葉では20・52～55・61・67・68・75・76・106・107・126・127・175の須恵器坏蓋・身、30・35・63・89・99・103の土師器模倣坏蓋・坏身、27・73・74・120・133の土師器坏、37・39～43・104・113～115・122・123の土師器高坏、7・12・13・38・64・85・86の土師器短脚高坏、105・116の土師器鉢、28・154の丸底の土師器直口壺、44・57・72の折返口縁の土師器壺、136の折返口縁の土師器甕、79の球形胴の土師器甕、29・45～47・65・93・108～112・117～119・124・125・132・134・135の短く外反する口縁とくの字口縁の土師器長胴甕がある。須恵器の内20・52・53・55・106・107は地元衛門坂窯の製品である。ほかに第52図315・320・325の須恵器坏蓋、第52図313・314・327の内湾口縁の土師器坏、328の折返口縁の土師器壺、318の広口の丸底壺が該当する。6世紀後～末葉では21～24・56・69・70・95～98・102・160・169～173・176～179の須恵器坏蓋・身、62の須恵器長頸瓶、77・90～92の土師器坏、14・26・80・87・88・152・153の土師器高坏、2・16・31・130・155～158の外反する口縁の土師器長胴甕がある。ほかに第46図137・第48図201・第52図321・326の須恵器坏蓋・身、第47図159の搬入品と見られる東駿河型甕などが6世紀後～末葉に該当する。7世紀の土器は第47図180の須恵器盤、第48図187・188の須恵器高坏、192の須恵器長頸瓶、62の土師器高坏があり極めて少ない。

古墳時代の土製品としては第53図2の角柱形の土製支脚がある。石器としては11・第54図16の叩石・摺石、7の砥石、9の台石がある。14・15の砥石は金属を磨いた痕跡のある砥石であるが、古墳時代後期、奈良時代のいずれかの時期に該当する。

古代の土器は8世紀初頭～前葉の第47図185・186・第48図198の須恵器高台坏、後葉では182・190の須恵器平底坏、183・184の須恵器皿のほか、174の長頸瓶、第45図128の10世紀末葉の清ヶ谷産灰釉陶器碗がある程度で数は少ない。

中世前期の土器は12世紀前葉の渥美・湖西産山茶碗の第48図197・第51図301、13世紀前葉の渥美・湖西産山茶碗の第48図196の僅か3点のみ図示できた。後期は第51図288～300に示したSK186出土の16世紀後半の一括資料がある。陶磁器の出土はないが、288～290の地元産のろくろかわらけ、291～295の西遠江～三河産の非ろくろかわらけ、296～299の遠江型内耳鍋、300の土師質の羽釜があり、ほかに第52図331の瀬戸大窯1期の摺鉢がある。SK189出土の第53図4の土錘は古墳時代後期のものと形態は変わらないし、第55図19～21の砥石や台石も弥生時代の石器とは区別がつかない。

江戸時代の土器・陶磁器は第50図265～第51図287・304～309に示したSK78～80・82・83、SD19・22から出土している。19世紀前葉の瀬戸産は271～275、284の壺や灯明皿・鉢など碗類以外のものを含むのに対して、肥前磁器は269・270・276～279・281～283の碗類が主体である。18世紀の志戸呂産は305の丸皿、306の徳利、309の摺鉢のみである。17世紀初頭の304の瀬戸登窯1期の志野丸皿、第47図163の18世紀後葉の徳利以外の志戸呂製品は、19世紀主体であるため19世紀前葉まで継続使用されたと見られる。265は常滑産火鉢、266・267・285の棟瓦・268の丸瓦は18世紀～19世紀前葉のもので、軒平瓦部の中心飾は鳶文となる。第53図1の鉄器は火打石、石器は櫛目状の調整のある第54図17の凝灰岩製砥石は江戸時代末期に大量流通する三河産砥石であろう。

(4) まとめ

弥生時代中期中葉の本遺跡最古の方形周溝墓としてSZ7の1基が確認できた。東部地区では初めての発見となり、西部地区の第12次調査SZ6、第46次調査SZ12、第22次調査SZ6に次いで4例目の事例となる。周辺部の調査区同様にこの時期の墓域であったことが判明し、中期の方形周溝墓と後期の土坑が重複しないこと、古墳時代後期の竪穴住居により破壊されたことが確認できた。

古墳時代後期の竪穴住居が比較的集中して発見され、掘立柱建物とともに住居の単位を形成していることが判明した。第73次調査区で確認された竪穴住居とともに、6世紀前～中葉に主体的な時期があつたことがわかった。

中世後期の戦国時代末期の屋敷地に伴う大型土坑SK186が確認できた。出土土器は武士の館に特有なかわらけが主体で、西遠江～三河に分布する非ろくろかわらけもまとまって出土している。大型掘立柱建物群からなる屋敷地内にあつた大型土坑で、半地下式倉庫かもしれない。この屋敷は戦国時代の古文書に記された本間氏のかけの上屋敷の可能性が指摘される。

江戸時代後期の遺物がある程度まとめて出土した土坑や溝があり、屋敷地があった可能性がある。

19. 第82-2・87-1・2、91-1・2次調査区の概要（報告書38第56図～第82図）

(1) はじめに

遺跡の北東部にあたる場所の調査区で、平成19年度に調査の第62次調査区（2008報告書23写真図版編、2013報告書35遺構・遺物図版編1、本文編本書掲載）の東側に隣接し、さらに平成20年度に調査された第73次調査区（2009報告書25写真図版編、2014報告書37遺構・遺物図版編2、本文編本書掲載）の南側にあたる調査区である。第82-2次調査は都市計画道路の掛之上線、その他は民地の宅地造成

と道路堺に設けられた擁壁工事と駐車場建設に伴う発掘調査であった。

包含層は第82－2次調査区で、厚さ30cm前後になる保存状況のよい場所であった。ちなみに、第73次調査区西半分の包含層の厚さは10cmと薄かった。

(2) 遺構

本調査区での主な遺構は、弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居、弥生時代中期後葉の方形周溝墓、戦国時代の掘立柱建物などの遺構が検出された。

竪穴住居 竪穴住居は弥生時代後期の隅丸方形でかまどをもたないS B 65 a・b・78、古墳時代後期のかまどをもち方形プランになるS B 3・64の5棟が確認できた。S B 65 a・b・78からは時期の分かる出土遺物が出土していないし、平面形態も壁溝の一部しか確認できないため詳細な時期は分からぬが、隅丸方形という平面形態からいずれも弥生時代後期の竪穴住居としておきたい。S B 65 aより地床炉1が確認できた。またこの住居より北側にも地床炉2があり、竪穴住居の抽出に務めたが、壁溝・柱穴の確認はできなかった。なおS B 65・78はS Z 5 a・bを破壊して造られている。

S B 3の壁溝は西と南側しか確認できなかつたが、かまどの位置でおおよその規模が分かつた。遺物がでていないので詳細な時期は分からぬ。かまどの保存状況はいいので、かまどの破壊祭祀は行っていないことがわかつた。S B 64も北壁溝のごく一部が確認されているにすぎないが、北壁溝が直線になるので方形の竪穴住居であろう。かまどは北壁に2基確認でき、両方ともかまどの保存状況はいいので、かまどBからかまどAの時期への新旧関係が考えられる。遺物はかまどAから6世紀末葉の坂尻I－4期の土師器、6世紀後葉の須恵器が出土し、かまどBからは6世紀中葉の坂尻I－2期の土師器、6世紀中葉の須恵器が出土していることから見ても新旧関係に矛盾はない。さらに両かまどの保存状況がいいことから、かまどの破壊祭祀は行なわれず建て替えが行われたと思われる。

掘立柱建物 S H16・19・20の3棟が確認できた。S H16は間仕切りないし棟持ち柱列を内部に持つ2間×3間の土間造りの建物で、第73次調査S H37と構造、主軸方向が類似するため、付近で確認できている戦国時代の掘立柱建物の一つと見てもいいだろう。また、戦国時代の掘立柱建物に見られる、根固石のある柱穴も2箇所確認できた。S H19・20については太めの柱穴からなる建物で、付近にある古墳時代後期の掘立柱建物と同時期と考えたが確証はない。

方形周溝墓 北西方向に主軸をとる方形周溝墓のS Z 3・5 b（第82－2次）と、北方向に主軸をとるS Z 5 a（第82－1次）・5（第87－1次）・6の5基が検出された。四隅の分かるものはないが、分かる範囲ではS Z 5 a（第82－1次）・5（第87－1次）・6は四隅のいづれかを連結溝で結ぶ方形周溝墓になると思われる。今回調査対象となったS Z 3南溝からは受口口縁になる弥生時代後期前半段階の土器が出土しているが、第73次調査区の東溝からは後期後半新段階の壺が出土している。東溝出土の土器は完形率が高く溝の底近くから出土しているため、後期後半新段階の時期と考えられる。

S Z 5 b（第82－2次）の時期は溝中の土器が、S Z 5 aと重複しているため溝内の土器がうまく分別されていないが、重複部分の北・東溝や南溝（S D104）より後期の土器が出土している。後期前半段階の土器から最新のものは後期後半新段階の土器が出土しているが、何れも破片なので確実な時期は分からぬ。なお、S Z 5 aの西溝からは大量の白岩式新段階の土器が出土している。

S Z 5（第87－1次）は南溝をS Z 6と共有し、さらにS Z 6の南溝はS Z 5 a（第82－2次）の北溝と連接して、3基の単位群を形成している。時期の分かる土器はS Z 6南溝より白岩式新段階の土器が出土している。また、S Z 5からも白岩式新段階の土器が出土しており、単位群を形成する3基の方形周溝墓の時期差はほとんどないということになる。なお、主軸方向は東部地区で確認できる

中期後葉の方形周溝墓の主軸方向と一致する。

土坑 土坑の中で弥生時代後期前半のものは S K 190、後期後半は S K 191・192、古墳時代後期は S K 10、中世後期の戦国時代の土坑は S K 193・194・218が該当した。とくに S K 189・192・193からは弥生時代後半段階と戦国時代の土器が一定量出土している。

弥生時代後期後半の土器を出土した S K 190～192は、何れも楕円形の摺鉢状の土坑で土器が一定量出土しているため、ゴミ穴として掘られたと考えられる。古墳時代後期の S K 10も楕円形で摺鉢状土坑で、弥生時代後期後半の土坑と類似する。戦国時代の土坑は小型で深めの S K 193・218と大型で方形土坑の S K 194が確認できた。大型方形土坑は隣接の第82－1次調査 S K 186と同形態・規模になるもので、戦国時代後期の屋敷地内にある半地下倉庫などの施設が考えられる。小型土坑は井戸ほど深いものではないため、水溜用土坑と考えられる。これらの土坑は、S H16と関係のある戦国時代後期の屋敷地に関係した遺構であろう。

江戸時代後期の遺物を出土する土坑はない。

その他の遺構 P 176は焼土が認められる所謂焼土坑で、弥生時代後期の屋外炉とも考えられる。

溝は東西に延びている S D 1・79・108・119、南北方向に延びている S D 118がある、このうち時期の分かる遺物が出土しているのは、中世前期の S D 79、戦国時代後期の S D 1ぐらいである。時期の分かる遺物は出土していないが、幅の狭い小溝である S D 107・108・118・119は江戸時代後期の畠地の区画溝と思われる。S D 1は S H16のある屋敷地の南辺を区画する溝で、第44次調査区の西端で陸橋となり、掘立柱の2脚門と見られる柱穴が確認されている。近代水田跡は聞き取りによると昭和30年代まで水田として機能していたらしい。

(3) 遺物

縄文時代の遺物としては第80図3の小型の打製土掘具は、縄文時代に該当する可能性がある。

弥生時代中期後葉の土器としては、後期の混入品もあるが第67図40～第74図252に示した S Z 5 a (第82－2次)・5 (第87－1次)・6から出土した土器があげられる。何れもなで方の肩部のとなる細頸壺の45・52・86～100・104～111・113～128・130・182・211・219・220・223・224が主体で、86・87のラッパ状に開く単純口縁のものと、97～99の受口口縁がある。44・177・186・187の中・大型の広口壺があり、103・112・191のような肩部に横一条の突帯文のあるものがこの壺に該当する。218の単純口縁の広口壺の形態は珍しい。183の外反口縁で内部に浮文があるものは、西遠江以西の土器と類似する。高坏は239の内面突帯があるものが、白岩式新段階に該当する。78の外に外反するように開く脚は白岩式新段階～後期前半古段階に多い形態である。85の浅鉢は後期に類例のないものであるため、白岩式新段階に該当する鉢形高坏になるかもしれない。102・123は小型の細頸壺である。口縁端部に刻目が施され、外反口縁となる鉢形甕は60・62・154～163、外反口縁で球形長胴の台付甕になるものは164・165・231～234で、65のよう低い台は前者の台、175・176の高い台は後者の台となる。なお、66・188・236・250は中期中葉の嶺田式の受口口縁壺や鉢形甕である。

後期の土器は少ないが、第75図269～第77図334・第78図353～357・第79図384～396に示した S K 190～192・195、S D 104 (= S Z 5 b (第82－2次) 南溝)・105から比較的まとまって出土している。後期前半新段階の特徴として、270のような折返口縁下端に指頭圧痕を残す粗雑化し、肩部ないし接合部に有段羽状刺突文の施された286・288～294・319・322～326・353・354・388～391の壺と高坏が該当する。273の胴部が張り肩部に羽状刺突文と結節縄文の施されたもの、285の小型の外傾口縁で多段の羽状刺突文の施された小型壺、287の複合口縁の壺なども後期後半新段階に一定量ある。269の無文の広口壺は珍しい器形で、古墳時代初期に降るものか。276は小型台付甕にも見えるが、調整がミ

ガキなので平底鉢、309の刻目のある甕も平底鉢になる可能性がある。318は内湾口縁の片口鉢である。多くの字状口縁で長胴気味の台付甕が後期後半新段階の特徴で、277～279・301～307・310・311・356が該当する。312・316の接合部に粘土帯を張るものは、西・中遠江に分布する台付甕の地域色であるが、316のように棒状浮文がつくものは珍しいので、高坏になる可能性もある。ほかに後期前半段階の土器として、68～75・79～84・240～245の高坏のうち68～71の鍔状の単純口縁で、72のように接合部は文様がないか73の一条の突帶文、79～84の脚端部の屈曲部の短いものがある。46～48・178の折返口縁の壺と、212～214・217の折返口縁の高坏は408の大型の鉢は後期後半段階に該当する。

第81図9の磨製石鏃、5・8・10の砂岩の粗製剥片スクレイパー、7の叩石、6の磨石はS Z 5 a (第82-2次) 周溝中から出土しているので、中期後葉に該当する石器と思われる。

古墳時代中期の土器は第80図400・404に示した5世紀前半の見性寺II-2式期の高坏と、5世紀後葉の甕の破片がある程度で、数は非常に少ない。

古墳時代後期の土器は第66図1～第67図37・第78図358～365に示したS B 64・65・78・S K 195出土の土器があげられる。6世紀中葉では、22の須恵器坏身、8・9の土師器摸倣坏蓋・身、1・10・21・23・24の深くて大きめの土師器坏、25～29・359の5世紀後葉からの系譜のある坏部が有稜の土師器高坏、3・360の短脚の土師器高坏、31・362の折返口縁の広口壺、364の折返口縁の甕が該当する。6世紀後～末葉では、19の須恵器坏身、2・11～12・20の小型化し浅くなった土師器坏、361の土師器長脚高坏、13・30の鉢、18の胴部上半が外に直線的に開く土師器甕、6・16・32の大きく外反する口縁の土師器長胴甕が該当する。ほかには、第80図403は6世紀中葉の地元衛門坂窯産の須恵器坏蓋、411の6世紀末葉の須恵器坏蓋、7世紀では第75図256の受部が蓋につくようになる須恵器坏蓋、第79図370の須恵器フラスコ瓶、第80図399の須恵器高坏、402の土師器高坏などがあるが数は少ない。第68図67は形態から見ると6世紀に該当する坏型のミニチュア土器である。

石器としては第80図4の金属を磨いた痕跡のある叩石、第81図11～16の古墳時代後期の遺構であるS K 195出土の石器のうち、12の弥生時代中期後葉～後期によく見られる伐採斧の転用叩石、15の砂岩粗製剥片のスクレイパーは弥生時代後期、それ以外の13・14・16の台石や砥石は古墳時代後期に属すると思われる。

古代の土器は第80図413・418の8世紀初頭の須恵器坏蓋・身、419の須恵器高坏、第79図378の10世紀末葉の地元清ヶ谷産灰釉陶器碗がある程度で少ない。

中世前期では12世紀前葉の第79図379～381・第80図414・415の渥美・湖西産山茶碗・小碗、13世紀前葉では416の渥美・湖西産山茶碗、第67図38・382の知多産山茶碗のほか、第78図344の玉縁口縁の白磁碗が特筆される。第80図417の縁のない三つ巴文軒丸瓦は、丸瓦部の裏面がコビキAなので、16世紀以前の中世瓦であることは間違いない。

中世後期では第75図258～268・335～349・第79図371～376・397・398に示したS K 189・193・218・S D 1・107から出土しているものがまとまっている。古瀬戸後IV期のものとして264の灰釉平碗、瀬戸大窯段階になると、1～2期の第80図420の天目茶碗、261・262・372の摺鉢、373・376のろくろかわらけ371・375の西遠江～三河産鍔付鍋がある。16世紀後葉では大窯3期の265の天目茶碗、345の鉄釉丸皿、346の鉄釉稜皿、347の灰釉丸皿、263の摺鉢、地元産施釉陶器は大窯3期併行の268初山産の丸皿と、3期併行の343の志戸呂産摺鉢、4期併行の志戸呂産266の天目茶碗、267の丸碗、348・349の丸皿がある。ほかに第67図36・335のロクロかわらけ、336の西遠江～三河産の非ろくろかわらけ、37・258～260・337～342も16世紀代の遠江型内耳鍋に該当する。34・397の15世紀後葉の龍泉窯系線描蓮弁文の青磁碗B 4類の破片の出土も本調査区内での屋敷地の性格を考える上で注目される。土製

品の内1・2は戦国時代に該当する土錐の可能性があるが、形態からは古墳時代後期のものとは区別がつかない。

江戸時代の陶磁器で図示できたのは、第67図39の18世紀瀬戸産小壺以外はない。

(4) まとめ

弥生時代中期後葉の方形周溝墓が3単位で縦列方向に確認できた。すなわち、北からS Z 5（第87-1次）、S Z 6、S Z 5 a（第82-2次）の列が確認できるが、溝の切り合い関係はないため築造の順番は分からぬし、出土した土器を検討しても白岩式新段階の中に収まってしまう。S Z 5（第82-2次）は中期後葉のS Z 5 aと後期後半新段階のS Z 5 bがほぼ重複した事例としては特異である。後期の方形周溝墓が改修される事例は第56-1次調査区のS Z 13・18で確認できた。中期後葉と後期の方形周溝墓が重複する事例は第25次調査区の中期後葉のS Z 9・8と後期後半新段階のS Z 5にあるため、今回で2例目となる。さらに、この中期の方形周溝墓はおそらく弥生時代後期のS B 65・78によって破壊された後に、後期後半新段階の方形周溝墓が築造されたという特殊な経緯を辿っていることが推測される。さらに、S Z 5 aの方台部は15m以上ある大型方形周溝墓に該当するもので、盟主的な方形周溝墓を象徴的に破壊した可能性すら指摘できるかもしれない。ただし、他の調査区では弥生時代中期の方形周溝墓と後期の方形周溝墓が重複することはほとんどなく、方形周溝墓の破壊が集落域全体規模で始まるのは、古墳時代後期以降である点は間違いない。

古墳時代後期の堅穴住居が2棟確認でき、隣接する第50次調査区でも2棟堅穴住居があるため、一つのエリア内で堅穴住居が集中する場所の一つであることが判明した。

奈良時代の遺構は全く確認できないので、郡衙正倉域の北辺区画溝外には郡衙関連の建物は、周辺の調査区を含めても及んでいない地区であることが判明した。ただし、須恵器などの遺物は8世紀全般にわたり出土するので、何らかの施設があったことは否定できない。

戦国時代の掘立柱建物や大型土坑・土坑と区画溝が比較的まとまって確認できたため、北側の第62・73・82-1次調査区で確認された掘立柱建物、区画溝、大型方形土坑などと考え合わせると、文献上知られている本間氏の戦国時代のかけの上屋敷があった可能性がますます高まった。

江戸時代後期の遺構については、遺物がほとんど出土しない小溝が存在するため、屋敷地ではなくて畠地利用されていた場所と思われる。

20. 第84-1～3次調査区の概要（報告書38第83図～第115図）

(1) はじめに

都市計画道路田端掛之上線と西通掛之上線の交差点にあたり、遺跡の南東部としては最大面積となる調査区である。なお、主要幹線道路の迂回路の関係で南の1区を前に、北の2区は迂回路工事が終わった後の2回に分けて調査を実施した。北側は平成16年度に調査された第33次調査区（2005報告書14写真図版編、2012報告書31遺構・遺物図版編1、2014報告書37本文編）、東側は平成14・19年度調査された第13・60次調査区（第13次=2003報告書6本文・写真図版編、第60次=2008報告書23写真図版編、2013報告書35遺構・遺物図版編1、本文編本書掲載）、南側は平成19年度に調査された第67次調査区（2008報告書23写真図版編、2014報告書36遺構・遺物図版編2、本文編本書掲載）、西側は平成19・20年度調査された第65・77次調査区（第65次=2008報告書23写真図版編、2014報告書36遺構・遺物図版編2、本文編本書掲載、第77次=2009報告書26写真図版編、2013報告書35遺構・遺物図版編1、本文編本書掲載）である。

また、本調査区北東の農協駐車場内で、平成20年度に実施した看板基礎工事に伴う調査と、第70次

調査の一部の成果も併せて報告した。

包含層は全域で厚20～30cmの良好な包含層が確認できた。

(2) 遺構

本調査区での主な遺構は、弥生時代後期の竪穴住居・土坑・小穴多数と、古墳時代後期の竪穴住居、奈良時代の大型掘立柱建物の一部、中世の区画溝である。

竪穴住居・掘立柱建物 竪穴住居は弥生時代後期と思われる楕円形のS B 52・55・74・71a・73、隅丸方形のS B 2・3・14・54・61・68～70・75・76、不明 S B 72の16棟が確認できた。この内遺物から時期判定できるものをあげると、後期前半新段階はS B 54・55・68・69・73、後期後半古段階はS B 14、後期後半新段階はS B 70となり、後期前半段階が主体の時期の竪穴住居群となる。平面形態も、後期前半段階では楕円形と隅丸方形があり、後半段階では隅丸方形となる傾向は、他の調査区で得られた傾向と一致する。なお、S B 69・70・76は一辺4mに満たない小型住居で、S B 70は地床炉があるにも関わらず、柱穴は確認できなかった。反対にS B 71a・73は長軸方向9～10mにもなる大型竪穴住居で、4本の柱穴は認められたが、地床炉は確認できなかった。

壁溝から建て替え回数を示すと、S B 2・14・55・74では1回、S B 68では2回、S B 54では3回、S B 61では4回となり、後期の竪穴住居としては建て替え回数の多い住居を含む。地床炉が確認された住居の内、位置がほぼ中央にあるものはS B 3・14・68・70・75、北よりにあるものS B 54・61・69・74である。ただし、S B 61の炉については、壁近にあるため認識できなかった竪穴住居の炉の可能性が高い。S X17とした焼土3も良く焼けており、竪穴住居の炉である可能性が高いが、壁溝や柱穴は確認できなかった。焼土付近の土器は6世紀末葉の須恵器も出土しているが、弥生時代後期前半新段階の土器片が多い。S B 66は方形の竪穴住居の一部で、古墳時代後期に該当するかもしれない。

竪穴住居の柱穴より太いものを1間×1間の掘立柱建物として認定するとS H 3、さらに竪穴住居としたS B 55の一部も掘立柱建物に該当すると思われる、何れも付近に存在する弥生時代後期の竪穴住居の主軸方向と同じく北に向けるため、弥生時代後期の掘立柱建物になると考えたい。

大型掘立柱建物 隣接した第49・67次調査区で調査された奈良時代の大型掘立柱建物S H 3の一部であるP 14・15が、第70次・第84-3次調査区内で確認できた。これにより、この建物は3間×6間以上の大きさになる大型掘立柱建物であると確認された。

土坑 土坑の内で弥生時代後期前半新段階の土坑はS K 196・202～204・207・208・215、後期後半古段階の土坑はS K 206、後期後半新段階の土坑はS K 59・200、古墳時代後期の土坑はS K 198、中世の土坑はS K 197が該当した。とくにS K 200からは多数の土器片が出土した。土坑と竪穴住居は重複することが多く、S K 205はS B 68の中央に位置しており、埋没した竪穴住居の窪みにゴミ穴用の土坑を掘ったとも考えられる。土坑に共通する形態はないが、S K 210などの深めの方形土坑は江戸時代後期の水溜用土坑に多い形態である。なお、江戸時代後期の遺物を出土する土坑はない。

13世紀前葉の山茶碗を出土したS K 197は、隣接の第13次調査区で確認されたS K 1・2と同じく、13世紀前葉の土坑墓になる可能性がある。ただし、S K 197の平面形態は木棺を埋葬した方形にならないこと、副葬品になりそうな山茶碗は出土していないため、中世墓になるか決められない。また、S B 72の南側にある方形の搅乱坑は、平成9年に行われた試掘調査坑の一つで、ここから第113図6に示した13世紀前葉の和鏡が出土しており、出土状況を示す図面はないが、搅乱坑の周辺に和鏡が出土しそうな遺構は認められないので、おそらく中世木棺墓の副葬品と見られる。

その他の遺構 出土遺物で溝の時期が確認できるのは、弥生時代後期前半新段階の溝はS D 109（第70次）、13世紀前葉の溝はS D 91・114・117、16世紀の溝はS D 113である。周辺の調査区の状況から

見て、S D115は江戸時代後期の畠の地割溝になると思われる。S D109は方形周溝墓の西溝になる可能性はあるが、東側調査区外を調査しないと分からぬ。S D114は13世紀前葉の屋敷地の区画溝、S D113は16世紀の屋敷地の区画溝と思われる。S D113の溝は第13次調査区 S D 1に接続しており、S字状に蛇行し、方形の区画溝にならないことが分かった。また、溝の堀方を見ると2時期あることが分かるが、新旧関係は分からぬ。第113図1～5に示した中国（北宋）銭が出土している。

農協駐車場看板基礎調査区では柱穴や土坑が確認できたが、時期が分かる遺物は出土していない。

（3）遺物

弥生時代中期の土器は、第112図490の丸子式段階の条痕系壺、第104図235の嶺田式の条痕系壺、後葉の白岩式新段階としての第98図15・第105図262の内面突帯がある高坏、第108図347の鉢形甕の低い台と362の東三河系の壺、第98図23・第102図161の鉢形甕、第114図8の平底甕の下に置く円盤状土製品があるぐらいで極端に少ない。

最も多いのは後期前半新段階の土器で、第98図1～第100図110に示したS B 12・14・54・55・66・68・69、第101図142～第102図162に示したS K 179・196、第104図220～第106図283に示したS K 202～204、第107図321～第108図377・388～第111図464に示したS K 207・208・210・212・214、S X 17、S D109出土の土器が該当する。ラッパ状に開く単純口縁の細頸壺17・40・42・43・45・399、外反口縁の151～153・225・226・360・400・402～404・407・410、内湾口縁の223・266、受口口縁の18・44・132・154・227～229・232・233・278・280・358・359・405、断面四角の折返の鍔状口縁の高坏と細頸壺の2・29～31・46・82・83・91～93・112～115・331・350・351・401、折返状に口縁端部に面を作る単純口縁の41・90・116・276などが本段階の特徴的な壺となる。受口口縁となる広口壺は231で大型壺が多い。高坏は111・129・153・277・326・388・389の単純口縁のものもあり、脚接合部は32・37のような横一条の突帯文か33・35のような無文があり、下端部は38・39のように短く屈曲したものとなるか、147・149のように屈曲部がつかずそのまま開くものがある。265・279の鉢については、平底になるものと、高坏になるものがあるが坏部では区別がつかない。台付甕は小さく外反した口縁で胴部は球形にならない22・101～103・160・162・283・337・458と同形態で平底の339がある。

後期後半古段階の土器は第106図284～第107図320に示したS K 206出土のものしかなく、壺は293～296の口縁部の折返部下端が窪むようになるが、肩部文様は298・302のように有段化しないで1段の羽状刺突文が特徴的である。高坏も284・285のように折返口縁が壺と同様に下端部の形が崩れたものに変化する。脚接合部は289のような二条の突帯文か、有段化していない羽状刺突文がある。台付甕は305・308・309のくの字状口縁で球形胴に変化したものになる。鉢については290・291のように口縁部が外に開くような変化が認められる。

後期後半新段階の土器は第101図133～141、第102図167～第104図219に示したS K 59・200出土のものがある。壺は断面台形ないし三角形に変化した折返口縁で、肩部に有段羽状刺突文のある134～137・183～188・190・192・194～196・198が該当する。182の壺は胴の張る形態で新段階、肩部の横刺突文は古段階の特徴を合わせもつ。高坏は脚接合部に有段羽刺突状文が施された133・174が該当する。181の大型鉢は内湾した口縁部で、口縁外面に繩文を施すのは古い特徴である。台付甕は208～210・212のようにくの字状口縁で口縁端部面がなくなるものが多くなり、211の折返口縁の台付甕も存在する。214の台接合部に粘土帶を巻くものは西・中遠江に見られるが、後期後半新段階では減少する。

弥生時代の石器は第114図10～第115図23に示したS B 54・68・S K 196・S X 17・S D 109出土のものが後期前半新段階の時期で、20は磨製石鎌、15・17・18は西遠江～東三河の石材で作られた扁平片

刃石斧、22は伐採斧、14は伐採斧転用の叩石である。10は打製土掘具、13は叩石としては表面を磨いた入念なものである。16は砂岩の粗製剥片のスクレイパーで、稲の刈取使用痕はない。11・19・21の台石も敲打痕と、研磨面があり、石皿か置砥石として使われていたと思われる。12の砥石は良く使い込まれ、金属器用かもしれない。その他24は抉入の柱状片刃石斧、26は小型の伐採斧、25・27は叩石、28は砂岩の粗製剥片のスクレイパーで、何れも後期前半段階に属す可能性が高い。

古墳時代の土器は混入品も含めると、5世紀前葉の土器として第112図499・500のミニチュア壺と小型丸底壺、第113図506の有稜高壺がある。後期では第107図320・第109図378の6世紀末葉の須恵器壺身と319の土師器高壺、379の7世紀前葉の須恵器壺身、第112図492の7世紀前葉の須恵器高壺、第111図467の7世紀後葉の須恵器壺蓋、第102図166の7世紀の須恵器長頸瓶、第113図507の須恵器鉢がある程度でまとまっている。498のミニチュア土器は形態と色調からみて6世紀のものと判断した。

古代の土器は第112図477の8世紀前葉の須恵器壺蓋、第109図385の11世紀前葉の清ヶ谷産灰釉陶器碗の僅か2点しか図化できなかった。

中世前期では12世紀前～中葉の渥美・湖西産山茶碗の第109図383・485～487・第112図496と484の片口鉢、481の東遠江産山茶碗、12世紀後～末葉の渥美・湖西産片口鉢の382、東遠江産山茶碗の第108図344・482と387の小皿、13世紀前～中葉の渥美・湖西産山茶碗の第102図164・第109図384・第111図469・第112図488・489・494、知多産山茶碗の163・386・483と数が少ないため傾向を示すことはできないが、東遠江産山茶碗の出土が目立っている。381の13世紀のかわらけは珍しい。

中世後期ではS D113出土の第111図470・471の瀬戸大窯1期の摺鉢、第112図472～474の16世紀後葉のかわらけのほか、S D115出土の495の16世紀後葉のかわらけがある。中国錢としてS D113出土の第113図1～5があり、何れも北宋錢で書体と初鑄年を示すと1は真書で1009年、2・4は行書で1078年、3は真書で1023年、5は真書で1068年と11世紀に収まるものであるが製作時期を示すものではない。6は試掘調査で出土した和鏡で、梅花鳥蝶文と花座紐、一条圈線が施され、厚さ4mm程度の縁の特徴から見ると13世紀に該当する。

江戸時代の遺物は陶磁器の小破片を除き図化できるものはなかった。

(4) まとめ

弥生時代後期前半新段階の竪穴住居と土坑が集中的に確認された。時期の分からぬ小型住居などは後期後半段階の竪穴住居があるとは思われるが、土坑の分も含めて前半新段階の遺物量は圧倒的に多い。また、方形周溝墓は確認できなかつたので、居住域の中心的な場所であることも指摘できた。

古墳時代後期の竪穴住居は少なく、住居が希薄な場所であることが分かつた。

奈良時代の遺構はS H 1の柱穴が確認され、郡衙正倉域以外の建物では最大規模となることが追認できたが、遺物はごく少数であり生活施設のない正倉域周辺部の状況を示していると思われる。

中世前期と後期の区画溝が確認され、遺物も土器の他中国錢も出土したが、内部の掘立柱建物の抽出はできなかつた。また、13世紀の鏡を副葬する中世墓があつたことも注目される。ランクが高い屋敷墓の可能性が指摘できる。

江戸時代後期の遺物・遺構については、少量の陶磁器の破片を出土する幅の狭い溝が検出されただけで、周辺の調査区で確認された状況と一致するため、畠地利用されていた場所と思われる。

21. 第85-1・90・94次調査区の概要（報告書39第116図～第150図）

(1) はじめに

遺跡の東部地区、平成19年度に調査された第66次調査区（2009報告書24写真図版編、2014報告書36

遺構・遺物図版編2、本文編本書掲載)と、第74次調査区(2009報告書25写真図版編、2013報告書35遺構・遺物図版編1、本文編本書掲載)の間にあたる連続した調査区である。宅地造成分を主体として、区画道路15号線分を含み、第85-1次調査が平成21年度、第90・94次調査が平成22年度に実施された(第85-1次=2010報告書27写真図版編、第90・94次=2011報告書30写真図版編)。

包含層は南半分で厚さ10~400cmが確認されたが、北半分では地山面が浅くなり、包含層はほとんどなかった。

(2) 遺構

本調査区での主な遺構は、弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物、弥生時代中期後葉の方形周溝墓と土器棺、古墳時代初頭の掘立柱建物を有する方形区画と小穴、弥生時代後期の大溝など多彩な遺構が検出された。

竪穴住居 竪穴住居は弥生時代中～後期と思われる平面形態が橢円形となりかまどをもたないS B 23・24・33、古墳時代後期のかまどや貯蔵穴をもち、平面形態が方形になるS B 11・25・27~29・31・32の10棟が確認できた。S B 21a・b・22・26a・bからは時期の分かる出土遺物が出土していないし、平面形態も壁溝の一部しか確認できないため詳細な時期は分からぬが、地床炉もつことから弥生時代後期の竪穴住居と判断した。ただし、S B 30からは後期後半新段階の土器が出土しているので、近くにあるS B 26a・bなども後期後半段階の竪穴住居になるかもしれない。S B 34は平面形態が方形になりそうなので、古墳時代後期の竪穴住居になるかもしれない。

S B 23と24の新旧関係は、地床炉の位置から見るとS B 24のほうが新しく、出土土器から見ると後期前半新段階の土器がS B 24より出土しているため、S B 23は中期後葉～後期前半新段階になると思われる。S B 23は壁溝が2時期確認できるため、最低1回の建て替えがあったと思われる。S B 23の地床炉は何れも柱穴近くにあるため、単なる焼土の可能性もある。S B 24の地床炉も3箇所あるが、中央に近い位置にあるのは炉1である。S B 33からは時期の分かる土器は出土していないので、平面形態から見ると中期後葉～後期前半新段階に該当する。壁溝が2時期確認できるので、最低1回の建て替えがあったと思われる。地床炉は住居のほぼ中央にある。

古墳時代後期の竪穴住居のうち、遺物の出土しているもので時期を決定すると。S B 25は6世紀前葉～7世紀中葉、S B 27は6世紀中葉と7世紀前～中葉、S B 28と29は6世紀前～中葉、S B 31は6世紀中葉、S B 32は6世紀後葉となる。S B 27出土の6世紀中葉の須恵器をS B 28の混入品とすると、7世紀前～中葉の時期になると思われる。S B 25はS B 27よりも古いため、6世紀の竪穴住居となろうか。S B 25・28・31のかまどの保存状況は良くないので、かまどの破壊祭祀が行われた可能性がある。貯蔵穴はかまど付近に位置し浅いものはS B 27・28、南壁付近に位置し深いものはS B 11・25・29・32で確認でき、両方あるものはなかった。壁溝より建て替えが複数時期確認できたのは、S B 29で3時期あり2回の建て替え、S B 32では4時期あり3回の建て替えが確認できた。古墳時代後期の竪穴住居で建て替えされるものは数少ない。

掘立柱建物 平面形態が正方形になり2間×2間の土間造りになるS H40・42・44～46、長方形で1間×3間のS H43、小型で1間×3間のS H39の3棟が確認された。このうち、正方形のものは古墳時代後期の掘立柱建物によくある形態で、主軸方向も北を向くS B 27・28・31とS H40・43・44、東を向くS B 11・32とS H45・46に分けられ、前者は6世紀前～中葉、後者は6世紀後～7世紀中葉の時期幅に収まるものと考えられる。柱間の狭いS H39とその近くにあるS H42は、第72・74次調査区の中世前期の建物と隣接するため、中世前期の建物と考えた。

方形周溝墓・土器棺 四隅に陸橋をもつ中期後葉の典型的な方形周溝墓になるS Z 5・6と、S Z 9

の北西隅が連結溝でつながるものがある。出土土器で時期を判定すると、S Z 5・6・9のほかS Z 8、S Z 5の北側に連結するS Z 7の西溝になるS K56のすべてから、中期後葉の土器が出土しているため、中期後葉の時期になると思われる。土器から見るとS Z 7が白岩式古段階、それ以外が白岩式新段階になりそうなので、S Z 7→S Z 5→S Z 6の築造順が考えられる。S Z 5～7は連結し、S Z 1とS Z 6は主軸をややすらし、溝も連接するもので同一の単位群になるかは分からぬが、主軸方向は一致する。S Z 1と6の新旧関係は分からなかった。S Z 9は主軸をやや東に向けるもので、後期の方形周溝墓と一致し、S Z 8との新旧関係で新しいことが分かっているため、中期でも末葉の時期が考えられる。S Z 8は南溝と西溝しか確認されていないが、S K55より中期後葉の土器が出土しているので、これが東溝とすることが可能ならば方台部12mの大型方形周溝墓となる。

S Z 8西溝南端の底近くからは底部穿孔の甕と、近くに人頭大の礫を配したもの。その北側にやや底から浮いた状態で、甕の破片を合口とした横位埋葬の壺棺が確認された。壺棺は西遠江～三河の瓜郷型式、甕は在地の白岩型式である。なお、この土器棺内部より出土した第145図14の砥石の破片と、S Z 9東溝出土の砥石の破片が接合している。S Z 9東溝南端付近から口縁部を取り除いた小型の壺が、底からやや浮いた状態で出土している。白岩式新段階でも新しい特徴の壺である。S K56（S Z 7西溝）からは胴部下半がない壺が直立した状態で出土しており、白岩式古段階に該当する壺である。

土器棺はS B30に壊された状態で出土した土器棺と、S Z 5の南西陸橋に位置する土器棺1、その西側にある土器棺2の3基の土器棺が確認された。S B30付近の土器棺と土器棺2は斜位、土器棺1は直立埋葬であった。何れも保存状況が悪く詳細な時期は分からぬが、土器棺2の形態を見ると、胴部下半との境が明瞭で、肩部が湾曲する形態は後期後半新段階の土器棺の特徴を示しているため、時期の分からぬ2基の土器棺も含めて、中期後葉の方形周溝墓とは時期が異り、後期後半新段階になる土器棺群と思われる。

土坑・小穴 弥生時代の土坑は、後期後半新段階の土器を出土したのはS K61a・b・60・63（第90次）・64である。このうちS K60・63（第90次）からはまとまって土器が出土している。何れも不定形の土坑で、弥生時代後期後半新段階を中心とするゴミ穴と思われる。P207より6世紀前葉の土師器坏が完形品で出土しており、S B28に関係した貯蔵穴かもしれない。

江戸時代後期の遺物を出土する土坑はない。

その他の遺構 S D76からは弥生時代後期後半新段階の壺が出土し、北端に連結溝らしい小溝がとりつきこれが方形周溝墓の周溝とするならば、弥生時代後期後半新段階の土器が出土したS K64が北溝、S D64の一部が東溝、S D63が南溝となる可能性はある。

東西や南北方向に延びているS D26・62・68～70・72・74・75からは、時期の分かるの土器陶磁器が出土していないものの、埋土の状況と隣接調査区の状況から、江戸時代後期の排水用と畠地の区画割りのための溝と考えた。S D62が連結するS X12は、S D62を通じて第74次調査区の窪地とも連結し、水溜用の小池状遺構となっている。

（3）遺物

縄文時代の遺物としては第146図24の黒曜石製の石鏃の破片、第145図15の頁岩製の剥片がある。

弥生時代中期中葉の土器は、第144図334の連續押引文のある細頸壺、第139図155・166・167・第144図309・335は口縁の口唇部に刻目が施され、外面条痕調整が施された甕が確認できたが、何れも混入品である。309は口縁内面に羽状の籠描文が施されている。

中期後葉の土器は第136図75～第139図159、第139図162～169に示したS Z 8・9、S K55・56から出土した土器が中期後葉の土器としてあげられる。いずれもなで方肩部となる細頸壺の77・78・

126・163と、胴部が大きく張る85・95・169の細頸壺がある。前者は93・127・139・152の受口口縁のものと、168の内湾口縁の他、ラッパ状に開く単純口縁の3種類がある。後者の85は西遠江～三河の瓜郷式の壺に属するものである。受口口縁で太頸の76・94・96も必ず組成される大型壺である。86・87・138の鍔状口縁で、内面突帯があるものが白岩式新段階の高坏である。89の脚接合部に横一条突帯文がつくものは、後期前半段階にならないと出現しない。甕は口縁部が緩やかに外反する鉢形の83・84・111が典型的な形態で、83の平底と121・123・133のような低い台がつくものがある。81・109・110・130は球形胴の台付甕で、後期前半段階のものと区別がつかない。120の焼成後穿孔の台は中期後葉の台付甕では事例がない。

弥生時代後期は前半新段階の第140図170～第141図207に示したSK60の土器がある。壺は177～179の小さな断面四角になる折返口縁の壺と、口縁端部に面を作りそこに施文する176は後期前半新段階から見られ、受口口縁の175・180・181は白岩式新段階から系譜を引く壺である。高坏は171・172の脚接合部に横一条の突帯文がつき、174のように下端の屈曲が短くあまり開かないものがこの段階の高坏の特徴となる。台付甕は短く外反する口縁で球形胴となる200～203がある。187は西遠江の伊場式の壺で、第134図16・第146図25も伊場式～欠山式に比定できる高坏である。

後半新段階は第141図222～第142図266に示したSK63（第90次）の土器がある。後半新段階特有の有段羽状刺突文の施された壺と高坏をあげると232～235・242、折返部が断面台形化し端部横方向に押引文が施された口縁の224～226・238の壺、高坏が該当する。第143図291の内湾口縁の無文の壺は、古墳時代初頭に降る可能性が高い。甕はくの字状に外反する口縁の253～257で、とくに長胴化した255がこの段階の新しい特徴となる台付甕である。

弥生時代の石器は砂岩の粗製剥片から作られた第145図13・第146図19～21・23のスクレイパーがあり、19・21・23は顕著な摩耗痕が刃部に観察されるが、稲の刈取の際に残る使用痕は確認できない。22の叩石は石材から見ると弥生時代の伐採斧の再利用品であろう。14・17の台石は両面使用で板状を呈する。これらの石器は弥生時代中～後期前葉によく見られるものである。16・18の叩石は金属を磨いたような痕跡があり、弥生時代中～後期か古墳時代後期の時期になるか分からぬ。

古墳時代中期の土器は5世紀前葉の第135図65と第136図69の複合口縁の壺と丸底鉢が出土しているが、いずれも混入品でこの時期の明確な遺構はない。

古墳時代後期の土器は第134図18～第135図46・66～第136図71に示したSB25～29・32出土の土器で、6世紀前～中葉は須恵器では33・43・44・46・66・71の坏蓋・身、土師器は25・39・42の坏、31・40の折返口縁の壺がある。6世紀後～末葉の土師器は36の坏、19・20の鉢、67の長脚高坏、37の底部の穴があまり小さくならない甕、32の外反口縁の長胴甕がある。7世紀の須恵器は24・30・38の坏蓋・身、34・35の高坏がある。ほかに第144図297の6世紀中葉の須恵器坏身、331の6世紀前葉の土師器杯、第141図208の6世紀末葉の須恵器坏身、第136図70の6世紀後葉の土師器の有稜高坏、第141図208は6世紀末葉の須恵器坏身、221は7世紀前葉の須恵器坏蓋、第144図317は7世紀のフラスコ瓶である。古墳時代後期の竪穴住居が多数確認された割に出土量は少ない。第145図1・3～6の大きな土錐は古墳時代後期、7・8・10～12の小型の土錐も古墳時代後期の出土例が多い。

古代の土器も8世紀前葉に該当する第144図298・299・329の須恵器坏蓋・身、第143図279の長頸瓶の4点しか図示できなかった。

中世前期の土器は12世紀前葉の渥美・湖西産山茶碗である第143図278、13世紀前葉の渥美・湖西産山茶碗の287、東遠江産山茶碗の281、後期では277の青磁碗、第144図313の白磁皿が目立つ。ほかに15～16世紀のものは285のかわらけ、288の志戸呂産摺鉢、289の常滑甕などがあり、中世の土器は何

れも江戸時代の溝での混入品である。

江戸時代の土器陶磁器は小破片のみの出土で図化できるものはない。

(4) まとめ

弥生時代中期後葉の方形周溝墓である、3基が縦列方向に単位群として確認でき、築造順はS Z 7 → S Z 5 → S Z 6となりそうである。この時期差は溝から出土した土器を検討すると、S Z 7が白岩式古段階、それ以外は白岩式新段階の中に収まる。当遺跡での大型方形周溝墓になりそうなS Z 8西、溝内より土器棺が検出され、棺身の壺は西遠江～三河の瓜郷式であることが判明した。被葬者の出自を示したものとして注目される。これらの中期後葉の方形周溝墓は、古墳時代後期の遺構により削平されることが本調査区でも判明した。また、土器棺と方形周溝墓には時期差がありそうで、中期後葉の方形周溝墓の周辺に後期後半の壺棺群が埋葬された可能性が指摘できた。

古墳時代後期の竪穴住居について、一つのエリア内で時期の変遷があったことが判明した。掘立柱建物との確実な組み合わせは確認できなかったが、竪穴住居だけでは理解できないこの時期の建物群の実態を知ることができた。

奈良時代の遺物は少ないながらも出土しており、周辺の調査区でも奈良時代の掘立柱建物も確認できるので、郡衙正倉域外の東部地区での郡衙関連の建物について検討が必要となっている。

鎌倉時代と戦国時代の遺物が少量出土したので、本調査区より東側に同時期の遺構が展開する手かがりを得ることができた。

江戸時代後期の遺物・遺構については、少量の遺物を出土する溝が検出され、周辺の第72・74次調査区で確認された状況と一致するため、畠地利用されていた場所と思われる。

22. 第86-1・2次調査区の概要（報告書39第147図～第150図）

(1) はじめに

遺跡の中央北端にあたる調査区で、南側に平成12年度に調査された第7次調査区（2001報告書2本文・写真図版編）と、平成20年度に調査された第75-1次調査区（2009報告書26写真図版編、2013報告書35遺構・遺物編1、本文編本書掲載）がある電柱の付設や地下埋設ケーブル工事により西を1区東を2区とし、平成21年度に実施した。付近の第4次調査は静岡県埋蔵文化財調査研究所が、平成9年度に原野谷川の河川改修工事に伴い実施した（静岡県埋蔵文化財調査研究所1998）。

包含層は両調査区とも、厚さ20～30cmで確認された。

(2) 遺構

2箇所の調査区はともに狭いものであったが、遺構は弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代の土坑などの遺構が検出された。

竪穴住居 2区で壁溝と床面の一部が確認できたが、調査区が狭く形態・時期ともによく分からなかつたが、直上の包含層からは、6世紀前葉の土師器がまとまって出土しているし、第75-1次調査区のS B18は古墳時代後期の竪穴住居である。

土坑 1区 S K87は江戸時代の溝と重複していたが、深かったため残存した。平面形態はよく分からぬが、楕円形になるものであろう。遺物はS字甕を含む古墳時代初頭の土器が主体である。2区 S K86は円形の土坑で、弥生時代後期、古墳時代後期、戦国時代末期の遺物が出土しているが、古墳時代後期の遺構の可能性が高い。

その他の遺構 2区のS D 7は戦国時代後期の箱堀状の区画溝で、これより東に同時代の大型掘立柱建物が展開している。遺物はスラッグが出土しているので、屋敷地内で鍛冶を行っていた可能性を指

摘しておきたい。

(3) 遺物

弥生時代後期前半新段階～後半古段階の土器としては、第149図1～4を示すにとどまる。1の脚接合部に横一条の突帯文のある高壺、4の横刺突文のある壺は前葉新段階、2の二条の突帯文のある高壺、折返口縁の下端に刻目のある壺は後期後半古段階の特徴を示す。

古墳時代初頭の土器はSK87出土の第149図11～14である。12は弥生時代後期後半新段階の系譜を引く内湾口縁の壺で、縄文が施されること、肩部が大きく湾曲した形態は古墳時代初頭に降る特徴を示す。14のS字甕は、西遠江以西よりの搬入品でB類に該当する。

古墳時代中期の土器は2区包含層より6世紀の土器と共に出土した、第150図37・38・41に示した5世紀後～末葉の須恵器壺蓋・身、壺の口縁である。

古墳時代後期の土器は2区包含層より第149図15～第150図36・39・40・43の6世紀前葉を主体とする須恵器・土師器が出土している。土師器の壺は16～18の口縁が内湾するもの、19～29の前段階からの系譜を引く有稜高壺、30～32・34の丸底の鉢か小型の壺になるもの、33・36の折返口縁の広口壺が6世紀前葉の特徴を示す土師器である。35は6世紀後葉によくある外反口縁の長胴甕である。須恵器39はすかしのある短脚高壺の破片、43の外面疑似格子目叩き、内面青海波を残す甕も6世紀前葉に多いものである。

(4) まとめ

1・2区共に狭い調査区で、遺構の全体像は分からなかったが、古墳時代初頭のS字甕が出土する遺構は少ない。2区で古墳時代後期の6世紀前葉の土師器が包含層よりまとまって出土し、古墳時代後期の居住域としては一つの中心域になることが、周辺の調査区の状況からも確認できた。

戦国時代後期の区画溝が確認でき、この溝より東側に有力武士の館があることが判明した。

23. 第83・88-1・2、92-1～3次調査区の概要（報告書39第151図～第164図）

(1) はじめに

遺跡の中央南端にあたる調査区で、北側に平成17年度に調査された第39・40次調査区（2006報告書16写真図版編、2013報告書33遺構・遺物編1、2014報告書37本文編）、さらに東側には平成16年度調査された第30次調査区（2005報告書13写真図版編、2012報告書32遺構・遺物編2、2014報告書37本文編）がある。宅地造成を主体として南端に区画道路12号線を含み、第83次調査が平成21年度、それ以外は平成22年度に8次にわけて調査された（第83次＝2010報告書27写真図版編、第88・92次＝2011報告書30写真図版編）。

包含層は北半で厚さ20～30cmが確認されたが、南端では搅乱により包含層はほとんどなかった。

(2) 遺構

本調査区での主な遺構は、古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物、弥生時代中期後葉の方形周溝墓、奈良時代の区画溝などの遺構が検出された。

竪穴住居・掘立柱建物 竪穴住居は古墳時代後期の方形プランになるSB29・30の2棟が確認できた。SB29の壁溝は床面の堀方が深いせいか検出できなかつたが、平面形態が方形になる堀方で、かまど、柱穴、貯蔵穴が確認できた。かまどの脇から6世紀前葉と後葉の土器が出土しているが、原位置を保っているものは6世紀後葉の土器であるため、6世紀後葉に該当する竪穴住居である。内部に土製支脚が残されており、かまどの保存状況はいいので、かまどの破壊祭祀は行なわれていない。南壁付近に橢円形の貯蔵穴が確認されたが、完形率の高い土器は出土していない。SB30は北・西・南の壁

溝のごく一部が確認されているにすぎないが、各壁溝が直線になるので方形の竪穴住居とした。かまどは後世削平されたのか確認できなかった。時期は土器が出土していないため分からぬが、主軸方向は S B29 さほど変わらないので、6世紀後葉あたりと考えておきたい。

掘立柱建物については、竪穴住居と同じようにやや東に主軸方向をとる S H13 とほぼ北向きの S H12、西向きになる S H11 の 3 棟が抽出できた。S H11・13 は堀方の狭い柱穴からなり、S H11 は 2 間 × 2 間の総柱建物、S H13 は 2 間 × 2 間の土間造りの建物で、古墳時代後期にはよくある掘立柱建物である。S H12 は一部方形になる大きな堀方をもつ 1 間 × 2 間の土間りで、こちらは古墳時代後期になるかは分からぬが、第162図10に示した 8 世紀初頭の須恵器が出土していること、奈良時代の掘立柱建物の主軸方向は東向きになる S H13 に近いことから、8世紀の建物になる可能がある。

方形周溝墓 北方向に主軸をもつ方形周溝墓になる、S Z 2・3・10～12 の 5 基と東向きに主軸が傾く S Z 5 の 1 基、合計 6 基が検出された。S Z 10 を除いて、何れも周辺調査区と併せて全体が判明し、このうち四隅の形状が判明したのは S Z 2・3・11 で、何れも四隅に陸橋をもつ中期中～後葉の典型的な方形周溝墓である。土器では S Z 5 東溝で白岩式古段階の供献用の壺が出土している（第40次調査で報告済、2013報告書33）以外、時期の分かる土器は出土していない。S Z 2・3 の平面形態が正方形になるのに対して、S Z 11 は長方形を呈している。S Z 5 は 4 方向の溝の規模がそれぞれ異なるため、陸橋の幅も異なって見えるが、底の浅い部分を失っている可能性がある。S Z 3 については陸橋部にある連結溝の痕跡が見られる。主体部や溝内土坑、土器棺などの埋葬施設は確認できないが、土器棺や溝内土坑の近くに存在する拳～人頭大の礫は S Z 2 北、西溝、S Z 5 東溝で確認されている。

区画溝 第39・40次調査区で確認された奈良時代の郡衙正倉域東辺を区画する溝が 2 本が本調査でも確認された。S D17 は郡衙正倉 I 期、S D21（第39次調査 S D 9）を II 期と捉えている溝である。S D17 は幅 3 m の南北溝で、東西溝の S D21 より南へ延びるが、江戸時代後期の S D 6 あたりで消滅しており、東西方向に延びていたらう I 期南辺区画溝は確認できなかった。遺物は 8 世紀後葉の須恵器はなく、最新でも 8 世紀前葉である。S D21 は幅 2 m の溝で、第83次調査区で南東コーナー部分が確認でき、さらに郡衙正倉 II 期東辺溝の S D 9 とは接続せず、幅 3 m の土橋の出入口部があることが判明した。調査区内で精査したが、土橋内には門となるような柱穴は確認できなかった。遺物は 8 世紀前葉の須恵器が出土している。なお、S D17 と S D 9 の間隔は中心部分で 23.5 m を測る。

土坑 土坑の中で埋土と出土遺物から弥生時代後期に該当しそうなものは S K41・42・45・53 であるが、何れも土器の細片しか出土していないので詳細な時期は分からぬ。古墳時代後期は S K48、江戸時代後期は深めの円形や長方形の S K43・44・46・47・51 が該当する。S K43 からは水や肥溜用の木桶を設置した堀方が底で確認でき、S K44・46 の円形土坑も木桶を埋設した土坑であろう。S K52 は風倒木痕の黒色土部分のみ掘り下げたもので、弥生時代後期の土器片が出土した。弥生時代後期の土坑は調査区北半、江戸時代後期の土坑は調査区南半に多い傾向がある。

その他の遺構 奈良時代の区画溝である S D21 と並行する溝の S D10 は、2 時期の溝が合体したもので、江戸時代後期の溝、東西方向から南へ方向を変える S D 5、南北方向の S D 3・4・23 も江戸時代後期の土器陶磁器の破片が出土している。溝内の遺物量はさほど多くないため畠地の区画溝あるいは排水用溝になると思われる。

(3) 遺物

弥生時代中期後葉の土器は第162図18・19第163図32に示した S Z12・S K53 出土のものが唯一の土器である。18は外反口縁の、32も細頸壺であろう。19は条痕仕上げの平底甕の底部と思われる。15は後期後半の折返口縁の壺、16は高坏の脚部破片である。22の受口口縁の壺と23の胴部上半に縄文を施

す壺は後期後半古段階の時期に該当する。第164図67は羽状刺突文の施された後期後半新段階の壺である。第164図2・3に示した砂岩の粗製剥片を利用したスクレイパーは、弥生時代中期後葉～後期前半に良くある石器である。稲を刈りとる際の使用痕は確認できない。

古墳時代後期の土器は第162図1～9に示したS B29出土のもので、6世紀前葉の須恵器は6の壺蓋、土師器は1～3・5・8の外反口縁の長胴甕がある。4の小型甕は6世紀後葉、7は6世紀末葉の須恵器壺蓋である。その他6世紀前葉では第164図66の内面青海波痕を残す須恵器甕、第163図33は土師器の短脚高壺、7世紀では30・35の須恵器壺蓋・身、39・40の須恵器の高壺脚、34の土師器の大型台付甕脚部が出土している。第164図1の土製支脚は完成品で方柱状をなしていたが、2次焼成のため風化しており取り上げの際破損した。

古代の土器は8世紀初頭～前葉の須恵器がSD17・21より出土しており、第163図37・38が8世紀初頭の高台壺、8世紀前葉では36・42が高台壺身と蓋である。41・44の湖西窯系甕の口縁も8世紀前葉に該当する。他に第162図25は10世紀前葉の浜松市宮口産灰釉陶器碗、第164図65は11世紀前葉の清ヶ谷産灰釉陶器碗である。

中世前期の土器は第162図27の12世紀前葉の東遠江産山茶碗、第163図56の印刻草花文が施された渥美産の珍しい壺、13世紀前葉の13の渥美・湖西産、14の知多産山茶碗があるのみ。後期では第163図52の鍔付釜は三河産と思われるものが出土しているだけである。

江戸時代後期の溝や土坑から出土している、第163図47～50・53～55・57～第164図64に示した土器・陶磁器は、肥前産磁器と瀬戸産陶器は19世紀前葉、志戸呂産陶器は18世紀のものが供伴するので、志戸呂産の耐用年数が高いと見るべきかもしれない。79は明治時代の薬瓶である。

(4) まとめ

弥生時代中期後葉の方形周溝墓が隣接の調査区の成果を含めて、6基確認できた。遺物量が少なくて確実な時期を示せるものは主軸が東に傾くSZ5のみで、北向きのSZ3・10～12の4基は平面形態で中期後葉の方形周溝墓と判断した。この内縦列で溝を隣接する単位群を形成するのはSZ3・12である。遺跡の南東部の方形周溝墓の主軸方向は中期後葉の方形周溝墓が東に傾くのに対して、後期後半新段階の方形周溝墓は北向きになる。また、遺跡の北東部の中期後葉の方形周溝墓の主軸は北向きである。SZ5の主軸方向は南西部の方形周溝墓状況と一致、北向きの方形周溝墓は北東部の状況と一致するが、これらが主軸を北に向ける後期の方形周溝墓となる可能性も残されている。

古墳時代後期の竪穴住居について、掘立柱建物と併存する可能性が判明した。竪穴住居の時期は6世紀後葉段階ではあり、遺跡の南東部で発見される竪穴住居が6世紀前～中葉の時期のものが多いことと対照的であるが、少なくとも6世紀後葉の集落の一部になることは判明した。

奈良時代の遺構・遺物は、郡衙正倉域南辺を区画する溝が初めて確認できた。しかも、区画溝は2時期あり、東に23.5m移動したこと、II期の溝の南東隅が判明し、土橋になる出入口部も確認できた成果は大きい。土橋の幅は3mで大きな門柱も発見できなかったため、正門になるものではないだろう。この成果から郡衙正倉域の規模を示すと、I期で東西136m南北推定180m、II期で東西154m南北180mとなるため南北が長い長方形となる。奈良時代の掘立柱建物と見られるSH12は郡衙正倉に関係した建物とは思われないので、II期か郡衙廃絶後の建物と推測される。

中世の遺構・遺物共に少ないので、この時期の遺構が希薄な場所であることが判明した。

江戸時代後期の遺物・遺構については、遺物を出土する溝と土坑が検出されたが、遺物量から見て付近に屋敷地があった場所と思われる。

24. 第89・93次調査区の概要（報告書39第165図～第181図）

(1) はじめに

遺跡の北東部地区、平成19年度に調査された第62次調査区（2008報告書23写真図版編、2013報告書35遺構・遺物編1、本文編本書掲載）の西側に隣接し、さらに北側には平成19年度調査された第63-2次調査区（2008報告書21写真図版編、2013報告書35遺構・遺物編1、本文編本書掲載）がある。両調査区とも民地の調査宅地造成に伴い平成22年度において実施された調査区である（2011報告書29写真図版編）。

包含層は部分的に希薄な場所もあつたが、全域に厚さ10～30cmの包含層があった。

(2) 遺構

本調査区での主な遺構は、弥生時代後期の竪穴住居・土坑、古墳時代後期の竪穴住居、弥生時代中期中～後葉の方形周溝墓、戦国時代の掘立柱建物などの遺構が検出された。

竪穴住居 地床炉をもつS B13を弥生時代後期の竪穴住居と認定したが、平面形態、規模とも不明である。古墳時代後期の竪穴住居もかまどの保存状況がよくなく、南壁近くにあった貯蔵穴を手かがりにS B10～12の3棟が確認できた。壁溝はS B12しか確認できなかった。なおS B12では貯蔵穴は南壁中央と東隅の2箇所にあった。貯蔵穴などの出土土器から時期を判断すると、何れも6世紀中葉の時期になり、3棟とも同時併存していた可能性があるが、建物の主軸方向はS B12が西に少し傾く。

方形周溝墓 北方向に主軸をもち、一辺の周溝を共有する方形周溝墓になるS Z11～12と、重複する周溝のあるS Z10の3基が検出された。四隅の分かるものはS Z12だけであるが、S Z11も四隅に陸橋をもつ中期後葉の典型的な方形周溝墓になると思われる。主軸方向は北を向くため、東北部地区で確認される中期後葉の方形周溝墓と一致する。出土土器から時期を検討すると、S Z11の北溝からは後期前半古段階の壺2点、S Z12東溝からは嶺田式の壺が出土しているので、S Z12よりS Z11への変遷が考えられるが、白岩式段階の方形周溝墓がないので時期差が大きい。また、S Z12の北・西溝からは後期後半新段階の土器片が出土しており、混入品と判断できるかどうか検討を要する。

S Z10は2時期の方形周溝墓が重複しており、溝もほぼ並行にあるため改修にされたものと思われる。平面形態はどちらも南隅が陸橋になることは確実で、S Z10aの北隅には連結溝らしいものがあるが、連結先は調査区外で分からぬ。S Z10aの周溝から後期後半段階の土器片が出土しているが、微量なため確実な時期は決定できない。東部地区で確認された後期後期後半新段階の方形周溝墓の主軸方向はすべて北向きで、S Z10のように東に傾くものはない。墳丘の改修をするものは、第56-1次調査区の後期後半新段階に該当するS Z18などで確認されているため、この点からは後期後半新段階の方形周溝墓になる可能性はある。ちなみに、墳丘を拡張した事例はあるが、縮小した事例はないためS Z10の改修も拡張と見たい。

掘立柱建物 主軸方向を北に向ける掘立柱建物が7棟確認された。隣接の第62・63・73・75-1次調査区で発見された北向きの掘立柱建物は、戦国時代になるものが多いこと、同時期の半地下倉庫と考えられる大型土坑、屋敷地の区画溝があるため、本調査区の主軸が北向きになる掘立柱建物もすべて戦国時代に該当すると考えた。比較的大型になりそうなS H12・14～17の5棟、中型のS H5・13の2棟に分けられる。建物は何れも土間造りで、間仕切りの柱列ではなく、柱間2mで統一されている。S H14は桁行5間、S H15も桁行4間以上になりそうである。S H12は正方形の建物で、P 5・6間だけ1.2mと狭くなるため、出入口が西側壁についていた可能性がある。S H15 P 3・4より針葉樹の柱が残存していた。掘立柱建物で柱が残存していた事例としては、隣接の第62次調査区S H6・7に次いで2例目である。なお、S H6・7も柱間数や規模から見て戦国時代の大型掘立柱建物になる

可能性が高い建物である。

S H 5・14・15・17の4棟の重複関係を見ると、建物間の距離からS H14とS H17は同時併存してもいいが、残りの2棟は同時にあるとは考えられないで、最低3回の建物群からなる改築があつたものと推測される。柱穴の切合関係からはS H12が古くS H13が新しいため、S H12・14・17の時期と、S H13・15・16の時期、S H 5の時期の3時期が考えられる。

その他の遺構 土坑・小穴の中で弥生時代後期後半新段階の土器を出土したものはS K79・P 56、S K77があり、S K75・78・79などからも弥生後期の土器片が出土しているが、何れも土器の出土量は少なく時期は決定できない。第62次調査区では弥生時代後期後半段階の竪穴住居が確認されているので、付近に後期後半の竪穴住居が存在していたのであろう。

古墳時代後期の土坑はS K81で、用途は不明である。古墳時代後期の竪穴住居とは少し離れている。

江戸時代後期の土器陶磁器を出土したのはS E 1とS D51・52である。S E 1は礫層を堀抜いた井戸で、安全管理のため途中で調査を断念したが、埋土中より合口にしたかわらけが出土した。井戸の廃棄の際の祭祀に用いられたものと思われる。S K82・84の方形土坑も江戸時代の水溜土坑と考えたい。江戸時代後期の遺構・遺物共に少なかったが、井戸の存在より付近に屋敷地があると思われる。

(3) 遺物

縄文時代の遺物としては第180図8の石錘があげられる。

弥生時代中期中葉の土器としてはS Z12東溝出土の第177図67・69があげられる。67は頸部に連続押引文があるが、肩部の模様は69の肩部文様と同じく太い沈線文化したものに変化しており、嶺田式の中でも新しい特徴が見られる。

第176図34～第177図64に示したS Z11北溝より後期前半古段階の土器が出土している。白岩式では見られない49～51の胴部下半に稜をもち、大きく外反した口縁の細頸壺は後期前半新段階に通じる形態を示す。35・36・44の受口口縁、37・38のラッパ状に開く口縁の細頸壺は、白岩式新段階からの系譜を引くもので区別はつかない。34の内面突帯のない鍔状の単純口縁で、47の脚下端が小さく屈曲する高壺は、白岩式にはないものである。48の西洋梨型の胴部になる小型壺は白岩式新段階にもある。57～61の鉢形甕とその台になりそうな64は白岩式新段階の鉢形台付甕と区別がつかない。S Z12東溝出土の65の接合部無文の高壺脚や、66の片口鉢などもこの段階に該当するかもしれない。前半新段階の土器は第179図105～110のP 56出土の土器で、105の内面文様があり大きく外反する口縁の壺のほか、109の小さく外反した口縁の球形胴で、110のように下まで屈曲する台付甕は前半新段階の特徴を示す。108の長胴の台付甕は白岩式新段階よりの系譜がある。

後半新段階の土器は第176図31・32のS Z10 a南溝出土のものと、第178図74～80のS Z12北・西溝出土のものもある。76・77・79・80の有段羽状刺突文のある壺や高壺は、後期後半新段階の典型的なものである。78のくの字状口縁の台付甕も後半段階の特徴を示している。ほかに31の高壺は西遠江～三河に分布する欠山式高壺の脚、75の内湾口縁の壺と、98の薄手の単純口縁の壺も西遠江～三河に分布する欠山式の壺の破片であろう。97の折返下端に段があり、端部に連続押引刺突文のある壺も後半新段階の特徴を示す。

弥生時代の石器は中期中葉のS Z12東溝出土の第181図10の扁平片刃石斧と第180図9の叩石、後期前半古段階のS Z11東溝出土の7の砂岩の粗製剥片スクレイパーがある。

古墳時代中期の土器は5世紀前葉の第179図111の平底小型壺がある程度である。

古墳時代後期の土器は第175図1～第176図30に示した、S B10～12出土のものが6世紀中葉の時期の一括資料である。須恵器は20の5世紀末葉の須恵器壺蓋の破片は混入品の他、21の6世紀前葉の須

惠器坏身は中葉までの継続使用の製品であろうか。22～24・27・28の須恵器坏蓋・身のうち、23の口縁立上りが短くなる新しい傾向のものも認められる。1・6の内湾口縁の土師器坏は浅いが古い特徴、3・7・25・29・30の内湾度が弱くなったものは新しい特徴を示す。土師器の高坏は短脚の9・11・12と、5世紀前葉からの系譜をもつ有稜高坏の10・13～15・26の2種類がある。壺は折返口縁の16、長胴甕はくの字口縁の5・18が該当するが、17の端部をつまみ上げる特徴は6世紀末葉以降の長胴甕に多い。ほかに第178図81の薄手の長胴甕は7世紀前葉に降るものである。

古墳時代後期の石器はS B 12出土の第179図4と第180図6の台石で、金属器の刃を磨いたような痕跡がある。5の砂岩の粗製剥片のスクレイパーは弥生時代の石器の混入品かもしれない。第181図11の叩石も弥生時代のものと区別がつかない。

中世前期の土器は第178図85の12世紀前葉の渥美・湖西産山茶碗、86の12世紀後葉の渥美・湖西産山茶碗、88の古瀬戸前期の壺の破片、後期では第178図93の古瀬戸後IV期の端反の縁軸皿、103の瀬戸大窯1期の端反皿、87の古瀬戸IV期新段階併行の古志戸呂産鉢のほか、173・102の6世紀のかわらけ、101の伊勢鍋の口縁があるが数は少ない。

江戸時代後期の土器陶磁器は、第178図84の鉄絵皿、89・100の瀬戸の鉢、90～92の小型化した18世紀後葉のかわらけがS E 1などがら出土しているが数は少ない。

(4) まとめ

弥生時代中期中葉と後期前半古段階、後期後半新段階の方形周溝墓が3基確認できた。S Z 12から中期中葉の土器が出土し、本遺跡最古の方形周溝墓である可能性がある。ちなみに本遺跡での中期中葉の方形周溝墓は第12次調査区S Z 5、第22次調査区S Z 6、第46次調査区S Z 12、第48次調査区S Z 15の4例が確認され、本調査区S Z 12で5例目である。後期の方形周溝墓は墳丘を拡張していた可能性が高く、後期後半新段階の時期に多い事例と考えられた。

古墳時代後期の竪穴住居は6世紀中葉の3棟が確認できた。この地点でも6世紀後葉～7世紀の竪穴住居は少ない。組合せになる掘立柱建物は確認できなかった。

奈良時代の遺構・遺物は全く確認できないので、郡衙正倉域北辺の区画溝外には郡衙関連の建物は及んでいないことが判明した。

戦国時代の15世紀後～16世紀後葉の遺物が少量出土したが、遺構は大型の掘立柱建物を含む7棟の建物群が確認され、さらに南側にも同規模の掘立柱建物が存在する可能性が高く、この場所が戦国時代の屋敷地としては中心地になることが判明した。本間家文書には本間氏のかけの上屋敷が記された安堵書状が残されているので、これらの遺構群をかけの上屋敷に比定することが可能となってきた。

江戸時代後期の遺物・遺構については、少量の遺物を出土する溝や土坑が検出され、周辺の調査区で確認された状況と一致するため、畠地として利用されていた場所と思われる。

第4章 平成19～22年度の総括

本書では掛之上遺跡の調査が本格化した、後半期の平成19～22年度の見解を報告することができた。遺跡の東半部分の調査区が多く、時代別に要点と課題を記して総括としたい。

縄文時代 縄文時代の遺物は東部地区の調査区からも、中期中～後葉の土器片、石鏃・土掘具・石錐黒曜石の剥片などの石器が出土しており、確実な遺構は確認できていないが、遺物量から見て短期間の小規模集落が存在していたと思われる。本遺跡より北東方向の豊沢川北岸の段丘上にある長者平遺跡（袋井市1983）との関係が考えられる。

弥生時代 遺跡の西部地区において中期中～後葉・後期後半段階の方形周溝墓が多数検出されるのに対して、北東地区でも同段階の墓域になることが判明した。静岡県や南関東で確認される最古の方形周溝墓が西部地区で4例、北東地区で1例が確認できた。また、北東地区でも後期の方形周溝墓が、中期の方形周溝墓を破壊することは1例を除いてないため、同一墓域の中で中期と後期の方形周溝墓が混在して存在するといった状況にあることが東北部地区での墓域でも判明した。西部地区では中期後葉の方形周溝墓の主軸方向が東に傾くのに対して、北東地区では北を向いているので、別系統の単位群になることがわかる。北東地区の後期方形周溝墓も中期同様に北向きになるが、単独であることが多いため、中期の方形周溝墓よりも数が少なく被葬者層の変化が読み取れる。土器棺は中期後葉の時期は少数で、第74・85-1・74次調査区において中期の方形周溝墓の近くに後期後半新段階の土器棺のみが埋葬された事例も確認された。

居住域は遺跡の南東地区を中心に弥生時代中期中葉～後期の竪穴住居・掘立柱建物・土坑が展開しており、概ね墓域と居住域は分けられているが、それを区画する環濠は確認できていない。居住域の3倍以上が墓域になることが判明したが、東海道線以南の大門遺跡でも弥生時代中期中葉～後期の竪穴住居・掘立柱建物・土坑が確認されているので、こちらも含めると墓域と居住域の面積はそれほど違わないのかもしれない。

古墳時代 東部地区での前期の遺物・遺構は少なく、初頭の方形周溝墓が3基と前回報告の第26・55次調査区の方形区画の祭祀空間がある程度で、具体的な集落域の状況は分からぬ。

東部地区での中期の遺物は、5世紀前葉の見性寺II式段階の土師器と5世紀後葉の須恵器が散在的に、また前期の方形周溝墓の周溝内からも出土するが、竪穴住居や掘立柱建物などの遺構は確認されない。遺物は一定量出土する調査地点もあるため、遺構の性格として認識できない掘立柱建物があるのか検討課題として残ったが、いずれにしても中期の集落は前期よりもさらに縮小したことが判明した。

後期になると初めて弥生時代中～後期の方形周溝墓を破壊しつつ、ほぼ遺跡の全域で竪穴住居や掘立柱建物が確認されるようになる。ただし、弥生時代の遺構数と比べるとかなり少ない。個別遺構を検討すると同規模な2棟の竪穴住居が組合せになりそうな事例、小型竪穴住居や掘立柱建物と組合せになる事例など、竪穴住居単独では考えられない多様性のある集落構成となっている。また、東部地区でも時期が判明した竪穴住居は6世紀前～中葉のものが多く、6世紀後葉～7世紀の竪穴住居は少ない。長者平古墳群や地蔵ヶ谷横穴群のように、墓の数が最も多い6世紀後葉～7世紀中葉の群集墳時代の集落は、南に隣接する大門遺跡に主体があるのであろうか。

奈良時代 本遺跡では西部地区で郡衙正倉域が確認され貴重な成果があったが、正倉域外の東部地区でも第49・67次調査区SH3の大型掘立柱建物が確認された。SH3周辺で同規模の建物は確認でき

ないので、政庁域の建物になるかは分からぬ。遺物は東部地区全域に分布するが、数量は多くないため郡衙としてどのような目的の地域であったのか明らかにできなかつた。第71次調査区 S H 5 は土間造りの建物であるが建物間口規模から見て、束柱を礎石とする高床倉庫、第80次調査区の S H 12 も同様な倉庫になる可能性が高い。倉庫の規模は正倉域の総柱建物よりも一回り小さいため、倉庫の目的は異なるだろう。第61・72次調査区の S H 16・22・38の柱穴は中世のものと比べると堀方が大きいが、不揃いなものが多くII期ないし平安時代まで時期が降る建物かもしれない。

郡衙正倉域の区画溝のうちII期の溝の南東隅が第88次調査区で確認され、隅近くの東辺溝で土橋も見つかった。第92次調査区でもI期の東辺区画溝、II期の南辺区画溝が確認され、区画溝の範囲をある程度想定することができた。そうするとI期の区画溝は東西136m、南北規模推定180、II期では東西154m、南北180mの規模になる可能性が高い。

郡衙遺跡を象徴する遺物は転用硯以外、墨書土器など文字資料は平成22年度までの調査では一切出土していないが、第60・84-1・85-2次調査区で四重弧文軒平瓦と桶巻造の平瓦、一枚造の平瓦の8世紀初頭と中葉の2時期の瓦が出土した。量的には多くないため、郡衙付属寺院があつたのではなくて、小さな仏堂があつたか、再利用品として持ち込まれたかのいずれかと指摘しておきたい。

なお、遺跡の性格を示す文字が書かれた資料の出土はないため、どの郡に属する郡衙なのか確実なところは分からぬが、袋井市域の郡衙遺跡の状況を検討すると、坂尻遺跡が佐野郡衙、稻荷領家・春岡遺跡が周智郡衙だとすると、掛之上遺跡は山名郡衙になる可能性がある。

中世 東部地区でも鎌倉時代の山茶碗は全域の調査区の近世溝や土坑から出土するが、遺構は一部の掘立柱建物や墓の検出に留まっている。試掘調査で出土した鎌倉時代の和鏡の出土場所が第84次調査区内で特定できたが、具体的な出土状況が分かる遺構は残っていなかつた。試掘調査のグリッド範囲に収まる遺構は、土坑墓（木棺墓）としか考えられない。第13次調査区でも鎌倉時代の木棺墓と思われる遺構が確認されているので、このあたりに有力な鎌倉時代の武士の屋敷地があり、その屋敷墓が存在していたものと推定される。

第63-2・73・75-1・89・93次調査区で戦国時代の大型掘立柱建物が確認され、有力者の屋敷地があることが判明した。掘立柱建物以外でも半地下式の倉庫と思われる大型方形土坑なども存在している。この屋敷地を囲む区画溝は、第63-2・75-1次調査区 S D 7 が西辺を区画する溝、第73次調査区 S D 43 が東辺を区画する溝、第18・44・45・51東・50次調査区でも S D 1・26と門、食違の S D 2 と門の二重の溝で南辺を区画すると想定される。この区画溝の配置から考えると北側に館の主郭部分があり、その範囲は東西90m、南北90m、南郭は東西90m、南北20mの複郭構造になるものと推定される。遺物は区画溝などから中国製青磁碗などが出土しているに過ぎず、壺や大皿などの威信財は出土していない。この屋敷地の主は、天正2年（1574）本間八郎三郎や本間源右衛門尉宛に発給された武田家朱印状や武田勝頼判物に記載された「高部郷かけの上之屋敷」にあたる時期と符合するため、地元武将の本間氏の「かけの上之屋敷」に比定できる可能性が高まつた（袋井市1981）。

近世 前回の報告書では遺跡のほぼ中央に位置する第15・16・22・54次調査区で、17世紀～18世紀の遺構・遺物が集中したため、『寛政重修諸家譜』に載る元禄2年（1698）の知行替えによる渡辺図書恒綱の山名郡高部村陣屋の遺構・遺物の可能性を指摘した（袋井市役所1983）。東部地区では屋敷地に多い土器・陶磁器を多く出土するのは、北東地区のうち第75-2・81次調査区で、19世紀前葉の屋敷地に伴う区画溝や土坑が確認できたが、それ以外では遺物があまり出土しない区画溝が広がつており、ほとんど畠地として利用されていた場所と思われる。

【掛之上遺跡関連参考文献】

- 袋井市役所 1981『袋井市史史料編1古代中世』
- 袋井市役所 1983『袋井市史通史編』
- 浅羽町 1997『浅羽町史資料編1考古・古代・中世』
- 袋井市教育委員会 1983『掛之上遺跡II一掛之上遺跡第2次発掘調査報告書一』
- 袋井市教育委員会 1995「掛之上遺跡第3次調査報告」『大門遺跡V』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998『掛之上遺跡—平成9年度第二級河川原野谷川社会環境基盤重点河川事業（地方特定）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』（第4次発掘調査）
- 袋井市教育委員会 2000『掛之上遺跡—平成11年度袋井市駅前土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書一』（袋井市駅前土地区画整理事業に伴う（第5次）発掘調査報告書1）
- 袋井市教育委員会 2001『平成12年度掛之上遺跡VII本文・写真図版編』（袋井市駅前土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書2）※付載『掛之上遺跡第1次発掘調査報告書』
- 袋井市教育委員会 2002『平成13年度掛之上遺跡VI・VIII本文・写真図版編』（同報告書3）
- 袋井市教育委員会 2002『平成13年度掛之上遺跡IX・X本文・写真図版編』（同報告書4）
- 袋井市教育委員会 2001『平成13年度かけのうえ遺跡（掛之上遺跡11）』（同報告書5）
- 袋井市教育委員会 2003『平成14年度掛之上遺跡13・16・17本文・写真図版編』（同報告書6）
- 袋井市教育委員会 2003『平成14年度掛之上遺跡14・15・19本文・写真図版編』（同報告書7）
- 袋井市教育委員会 2003『平成14年度掛之上遺跡18本文・写真図版編』（同報告書8）
- 袋井市教育委員会 2004『平成15年度掛之上遺跡22・26写真図版編』（同報告書9）
- 袋井市教育委員会 2004『平成15年度掛之上遺跡21・24写真図版編』（同報告書10）
- 袋井市教育委員会 2004『平成15年度掛之上遺跡23写真図版編』（同報告書11）
- 袋井市教育委員会 2005『平成16年度掛之上遺跡31・35・36写真図版編』（同報告書12）
- 袋井市教育委員会 2005『平成16年度掛之上遺跡27・29・30・32・34写真図版編』（同報告書13）
- 袋井市教育委員会 2005『平成16年度掛之上遺跡28・33写真図版編』（同報告書14）
- 袋井市教育委員会 2006『平成17年度掛之上遺跡43・46・48写真図版編』（同報告書15）
- 袋井市教育委員会 2006『平成17年度掛之上遺跡38・39・40・42写真図版編』（同報告書16）
- 袋井市教育委員会 2006『平成17年度掛之上遺跡41・44・45写真図版編』（同報告書17）
- 袋井市教育委員会 2007『平成18年度掛之上遺跡50・53・56写真図版編』（同報告書18）
- 袋井市教育委員会 2007『平成18年度掛之上遺跡51・54・55写真図版編』（同報告書19）
- 袋井市教育委員会 2007『平成18年度掛之上遺跡49・52写真図版編』（同報告書20）
- 袋井市教育委員会 2008『平成19年度掛之上遺跡57・61・63写真図版編』（同報告書21）
- 袋井市教育委員会 2008『平成19年度掛之上遺跡59写真図版編』（同報告書22）
- 袋井市教育委員会 2008『平成19年度掛之上遺跡58・60・62・64・65・67写真図版編』（同報告書23）
- 袋井市教育委員会 2009『平成20年度掛之上遺跡66・69・71・78写真図版編』（同報告書24）
- 袋井市教育委員会 2009『平成20年度掛之上遺跡68・72・73・74・76写真図版編』（同報告書25）
- 袋井市教育委員会 2009『平成20年度掛之上遺跡70・75・77写真図版編』（同報告書26）

- 袋井市教育委員会 2010 『平成21年度 掛之上遺跡83・85・86 写真図版編』(同報告書27)
- 袋井市教育委員会 2010 『平成21年度 掛之上遺跡79・80・81・82・84 写真図版編』(同報告書28)
- 袋井市教育委員会 2011 『平成22年度 掛之上遺跡87・89・91・93 写真図版編』(同報告書29)
- 袋井市教育委員会 2011 『平成22年度 掛之上遺跡88・90・92・94 写真図版編』(同報告書30)
- 袋井市教育委員会 2012 『平成15・16年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編1』(同報告書31)
- 袋井市教育委員会 2012 『平成15・16年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編2』(同報告書32)
- 袋井市教育委員会 2013 『平成17・18年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編1』(同報告書33)
- 袋井市教育委員会 2013 『平成17・18年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編2』(同報告書34)
- 袋井市教育委員会 2013 『平成19・20年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編1』(同報告書35)
- 袋井市教育委員会 2014 『平成19・20年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編2』(同報告書36)
- 袋井市教育委員会 2014 『平成15～18年度 掛之上遺跡 本文編』(同報告書37)
- 袋井市教育委員会 2014 『平成21・22年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編1』(同報告書38)
- 袋井市教育委員会 2014 『平成21・22年度 掛之上遺跡 遺構・遺物図版編2』(同報告書39)

報告書抄録

フリガナ	カケノウエイセキ ホンブンヘン				
書名	平成19～22年度 掛之上遺跡 本文編				
副書名	袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書40				
編集著者名					
編集機関名	袋井市教育委員会				
所在地	〒437-1192 袋井市浅名1028 電話053-23-9264				
発行年月日	2015年3月25日				
フリガナ 所収遺跡名	カケノウエイセキ 掛之上遺跡				
フリガナ 所在地	シズオカケンフクロイシタカオカケノウエ 静岡県袋井市高尾掛之上				
コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 2216	遺跡番号 151	34° 44' 24"	137° 55' 53"	20070511 ～ 20110327	13002.0 m ² 袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う道路建設・宅地造成
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
掛之上遺跡	集落跡	弥生時代 中・後期 古墳時代 後期 奈良時代 鎌倉～戦国 近世	竪穴住居 掘立柱建物・土坑 方形周溝墓 竪穴住居 掘立柱建物・土坑 掘立柱建物 掘立柱建物・土坑 土坑・区画溝	土器・石器 須恵器・土師器 須恵器 山茶碗・陶磁器	弥生時代 中～後期 有力集落 古墳時代 有力集落 群衆正倉 戦国時代 館跡 陣屋跡

袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書40

平成19～22年度 掛之上遺跡

－本文編－

発行年月日 2015年3月25日

編集・発行 袋井市教育委員会

袋井市役所都市建設部都市計画課

〒437-8666 静岡県袋井市新屋1-1-1

印 刷 松本印刷株式会社

〒437-0013 静岡県袋井市新屋4丁目5-2

